

小杉町白石遺跡発掘調査報告

1994年3月

富山県小杉町教育委員会

小杉町白石遺跡発掘調査報告

1994年3月

富山県小杉町教育委員会

序

小杉町では、今まで丘陵部の開発に先立ち数多くの奈良～平安時代にかけての古代手工業生産（製鉄・製炭・窯業）に関連した遺跡を中心に調査を行ってきました。

ここ数年は、道路建設・宅地造成などの大規模な開発が平野部で行なわれるようになり、その事前調査も年々増加の傾向にあります。

このたび調査を実施した白石遺跡は、射水平野のほぼ中央に位置し、当町で調査例の少ない15世紀後半から16世紀前半にかけての集落跡の発掘となりました。

特に注目される点は、方形の溝に囲まれた居館的性格をもつ遺構から土器や陶磁器などの日常の食器類のほか、小刀・鉋・鋤先などの道具類と井戸部材として転用された五輪塔と銅製仏飯などの仏具類が出土していることがあげられます。今回の調査は部分的な発掘でしたが、今後周辺の調査が進めば、今回の調査結果との関連性がより明確になり、遺跡の全体像がつかめることとなります。

本書が、今後の調査研究を進める上での参考になり、文化財保護と郷土の歴史を知るための一助になれば幸いです。

終わりに、長年の調査に終始ご協力いただきました地元の方々をはじめ、関係各位に深く感謝の意を表します。

平成6年3月

小杉町教育委員会

教育長 稲葉 茂樹

例 言

1. 本書は有限会社河上金物店の新工場建設に伴う造成に先立って実施した、富山県射水郡小杉町（旧）繁塚1,028番地外に所在する白石道跡の発掘調査報告書である。なお、例言3の①印の調査箇所については、1992年3月に発行した『小杉町白石道跡発掘調査概要』で報告している。
2. 調査は、小杉町教育委員会が主体となつて行ない、民間考古学機関である山武考古学研究所（所長 平岡和夫）の調査協力を得た。
3. それぞれの調査期間、発掘面積、担当者は次のとおりである。

◎試掘調査：平成2年12月14日～12月22日 延べ6日 約6,000㎡ 原田義範

本調査

西地区	X 1～5 Y 7～18区	原田義範
	平成3年8月9日～8月31日 延べ13日	180㎡ 桐谷 優（山武考古学研究所）
東地区	X 2～5 Y 33～40区	原田義範
	平成3年7月19日～8月8日 延べ11日	56㎡ 桐谷 優（山武考古学研究所）

◎X17～24 Y 5～40区；X32～54 Y 4～36区；X 5～9 Y 64～66区

平成3年9月2日～11月30日 延べ56日 1,850㎡ 上野 章

X17～22 Y 38～62区；X33～52 Y 35～62区 原田義範

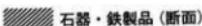
平成4年9月7日～12月9日 延べ60日 2,290㎡ 小村正之・丸山雅美（山武考古学研究所）

4. 調査事務局は小杉町教育委員会に置き、平成2年から平成3年度は社会教育課主任金山秀彰、平成4・5年度は係長堀川辰幸が事務を担当し、平成2年度から3年6月までを社会教育課長荒川秀次、平成3年7月から平成4年度までを生産学習課長盛田寿子、平成5年度を河畑 淳が総括した。
5. 調査の実施にあたり、富山県教育委員会文化課、富山県埋蔵文化財センターから助言、指導を受けた。
6. 本書の編集作成は、小杉町教育委員会が主体になり山武考古学研究所の協力を得て行なった。また執筆は、上野 章・原田義範・桐谷 優が行なった。文責は文末に記した。
7. 本調査に伴う整理作業は、本書に報告の地区については平成5年度に山武考古学研究所に委託して行なった。
8. 木製品の材同定については、バリノ・サーヴェイ株式会社が行ない、その分析結果を掲載した。
9. 調査から報告書作成に至るまで次の方々から指導・協力をいただいた。記して敬意を表したい。（敬省略）
小野正敏・久々忠義・酒井重洋・高梨清志・長島正春・古岡康暢・開成測量株式会社・有限会社河上金物店
10. 調査で得た凶面・写真・遺物は小杉町教育委員会が保管している。出土遺物には遺跡名をS Iとし、東地区からの出土はS I-Hと略して記入した。
11. 遺構の分類記号は、次の呼称を踏襲した。
SD：溝、SK：土坑、SB：建物跡、SE：井戸、P：柱穴状ピット、SX：不明遺構

凡 例

1. 本書の方位は、磁北である。
2. 土器の断面は、須恵器・珠洲を黒塗りとし、他の土器は白ぬきとして表現した。
3. 遺構番号は、本文・挿図・図版番号共に一致している。
4. 遺物実測中のスクリーントーンの貼り込みは、次のとおり表現した。

 煤・タール  炭化  赤彩  天目  灰釉

 鉄釉（茶褐色）  淡灰色  黒漆  石器・鉄製品（断面）

○ 土器

● 木製品

報告書抄録

ふりがな	こすまらしらいしせきほつくつちようさほうこく							
書名	小杉町白石遺跡発掘調査報告							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	上野 章・原田義範・梶谷 優							
編集機関	小杉町教育委員会							
所在地	〒939-03 富山県射水郡小杉町戸破1511 Ⅷ 0766-56-1511							
発行年月日	西暦 1994年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °' "	東経 °' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
白石遺跡	富山県射水郡小杉町 鷺塚、白石	16381	006	36度 43分 23秒	137度 7分 38秒	試験調査 19901214～ 19901222	◎ 6,000	工場建設に伴う事前調査
						本調査 〔西地区〕 19910809～ 19910831	180	
						〔東地区〕 19910719～ 19910808	56	
						19910902～ 19911130	◎ 1,850	
						19920907～ 19921209	2,290	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
白石遺跡	集落	中世	溝・掘立柱建物跡 井戸跡・土坑・ピット	木製品・中国製磁器 珠洲・土師質土器 瀬戸美濃・越前焼 加賀焼・瓦質土器 古銭		方形の溝(幅2～4m、 深さ0.82～1.4m、一 辺50m以上)に囲まれ た区画の内側に掘立柱 建物跡を検出。		

目 次

I	遺跡の位置と地形	1
II	調査の経緯	3
III	調査の概要	5
	1. 調査の方法	5
	2. 調査区の順序	5
	3. 西地区の調査	5
	-搬入口部分 (X 1 ~ 5 Y 7 ~ 18区) -	5
	-SD 1 -	5
	4. 東地区の調査	5
	-搬入口部分 (X 2 ~ 5 Y 33 ~ 40区) -	5
	-SD 2 -	5
	-門型クレーン基礎部分 (X17~22 Y38~61区) -	10
	-SD201~212 -	10
	-SK213~215 -	18
	-SK216~SK222, P401~403・405~414・416~419 -	19
	-X17~22 Y38~61区の遺構外の出土遺物 -	19
	-建物敷き部分 (X 33~52 Y 35~62区) -	21
	-SD18・41~52 -	21
	-SD53~57・60・62・63 -	22
	-SB01 -	38
	-SB02 -	39
	-SB03 -	40
	-SB04 -	40
	-SB05 -	43
	-SE65~68 -	45
	-SE69 -	47
	-SE70 -	49
	-SE71~75・86 -	50
	-SE76 -	61
	-SE77・78・80・82 -	62
	-SE83・84 -	64
	-SE85・87・155 -	65
	-SK90・93~99・101~109・111 -	69
	-SK114~116・118・129・134・136・137・139・141・142・148~150・156 -	70
	-SK157~161・165・168・172・173・175・176・179・180 -	75
	-P109・125・143・144・193・199・201 -	77
	-P208・214・231・234・242・244・259・260・269・270・287・292・295・300・301・303~307・334・339 -	79
	-SX182 -	83
	-SX339 -	84
	-X33~52 Y35~62区の遺構外の出土遺物 -	87
IV	まとめ	89
	引用参考文献	90
附章	自然科学的調査	91
	-白石遺跡から出土した木製品の樹種 -	91

挿 図 目 次

第1図 地形と周辺の遺跡……………1	第36図 SB04出土遺物……………42
第2図 試掘調査と発掘区劃図……………2	第37図 SB05遺構区、山上遺物……………43
第3図 西地区搬入口部分遺構配置図……………4	第38図 SE65～67遺構区、SE66出土遺物……………44
第4図 SD1遺構区、出土遺物……………6	第39図 SE68遺構区、山上遺物……………45
第5図 東地区搬入口部分遺構配置図……………7	第40図 SE69遺構区、出土遺物……………46
第6図 SD2遺構区、出土遺物……………8	第41図 SE69出土遺物……………47
第7図 東地区門型クレーン基礎部分 遺構配置図……………9	第42図 SE70遺構区、出土遺物……………48
第8図 SD201・202遺構区……………11	第43図 SE71～75・86遺構区……………49
第9図 SD202～205・211・212遺構区……………12	第44図 SE71井戸側展開図……………50
第10図 SD202・206～210遺構区……………13	第45図 SE71出土遺物……………51
第11図 SD202・203出土遺物……………14	第46図 SE71出土遺物……………52
第12図 SD203・208・209・211出土遺物……………15	第47図 SE71出土遺物……………53
第13図 SK213～217、P401遺構区……………16	第48図 SE71出土遺物……………54
第14図 SK218～222、P402・403・405～409遺構区……………17	第49図 SE71出土遺物……………55
第15図 P410～414・416～419遺構区 P401出土遺物、遺構外出土遺物……………18	第50図 SE71出土遺物……………56
第16図 東地区建物敷き部分遺構配置図……………20	第51図 SE71出土遺物……………57
第17図 SD42遺構区……………23	第52図 SE72出土遺物……………58
第18図 SD42・43遺構区……………24	第53図 SE72州土遺物……………59
第19図 SD42遺構区……………25	第54図 SE73出土遺物……………59
第20図 SD51・52遺構区……………26	第55図 SE74出土遺物……………60
第21図 SD46・48・49・55・56遺構区……………27	第56図 SE75・86出土遺物……………60
第22図 SD48～50遺構区……………28	第57図 SE76遺構区、出土遺物……………61
第23図 SD57・60遺構区……………29	第58図 SE77遺構区、出土遺物……………62
第24図 SD47・53・54・63遺構区……………30	第59図 SE78・80・82遺構区、SE82出土遺物……………63
第25図 SD43～46・62遺構区……………31	第60図 SE83・84遺構区、出土遺物……………64
第26図 SD18・41遺構区……………32	第61図 SE85・87・155遺構区、SE155出土遺物……………65
第27図 SD41～43出土遺物……………33	第62図 SK90・93～97遺構区……………66
第28図 SD44・45・49・51出土遺物……………34	第63図 SK98・99・101～107遺構区……………67
第29図 SD51出土遺物……………35	第64図 SK108・109・111・113～116・118・129遺構区……………68
第30図 SD51・52出土遺物……………36	第65図 SK130～134・136、SB04、P2、P234・259遺構区……………71
第31図 SD53・60出土遺物……………37	第66図 SK137・139・141・142・148～150遺構区……………72
第32図 SB01遺構区、出土遺物……………38	第67図 SK156～161、SD64遺構区……………73
第33図 SB02遺構区、出土遺物……………39	第68図 SK165・168・172・173・175・176遺構区……………74
第34図 SB03遺構区……………40	第69図 SK179・180遺構区……………75
第35図 SB04遺構区……………41	第70図 SK95・130・132・149・160・175・179・180出土遺物……………76
	第71図 P109・125・143・144・193・199・201・208・214 231・242遺構区……………77

第72図	P244・260・269・270・287・292・295・300・301 303・304～307・334・338・339遺構図……………78	第77図	SX339遺構図、出土遺物……………84
第73図	P125・143・199・260・301出土遺物……………80	第78図	遺構外出土遺物……………85
第74図	P193・231・270・300・303・334・338・339 出土遺物……………81	第79図	遺構外出土遺物……………86
第75図	SX182遺構図、出土遺物……………82	第80図	中世陶磁器組成表……………88
第76図	SX182出土遺物……………83		

図 版 目 次

図版第 1	1. 調査前の状況 (東から)	6. SD51 X33～38 Y55～62区付近 (東から)
西地区	2. SD1 確認状況 (北から)	7. SD51土層
	3. SD1 土層 (北から)	図版第 5
	4. SD1 遺物出土状況 (北から)	1. SE71～75・86全景 (西から)
	5. SD1 完掘状況 (北から)	東地区
東地区	6. 調査前の状況 (南から)	2. SE68 (東から)
	7. SD2 確認状況 (西から)	3. SE69遺物出土状況
	8. SD2 土層 (西から)	4. SE70 (西から)
	9. SD2 遺物出土状況 (西から)	5. SE71井戸側 (南から)
	10. SD2 完掘状況 (西から)	6. SE72曲物桶
図版第 2	1. 遺構確認状況	7. SE74 (南から)
東地区	2. 地区全景 (西から)	図版第 6
	3. SD201 (北から)	1. SE75
	4. SD201土層 (南から)	東地区
	5. SD202 (東から)	2. SE76曲物
	6. SD202土層	3. SE76光掘
	7. SD203 (北から)	4. SE77
	8. SD203土層	5. SE86
	9. 作業風景	6. SK113
図版第 3	1. 地区全景 (北から)	7. SK179
東地区	2. 地区全景 (南から)	8. SK180
	3. SD41 (東から)	9. SX182・339 (北から)
	4. SD41土層 (東から)	10. X33～39 Y52～62区付近 (東から)
図版第 4	1. SD42 X38～50 Y38～48区付近	図版第 7
東地区	2. SD42土層	西地区
	3. SD42遺物出土状況	東地区
	4. SD51 X33～35 Y52～58区付近	1. SD1遺物
	5. SD51土層 (北から)	2. SD202遺物
		3. SD203遺物
		4. SD208遺物
		5. SD209遺物
		6. SD211遺物
		7. P401遺物
		8. 遺構外出土遺物

- | | | | |
|-------|-------------|-------|-------------|
| 図版第8 | 1. SD41遺物 | | 12. SX182遺物 |
| 東地区 | 2. SD42遺物 | | 13. 遺構外出土遺物 |
| | 3. SD43遺物 | 図版第13 | |
| | 4. SD45遺物 | 西地区 | 1. SD1遺物 |
| | 5. SD49遺物 | 東地区 | 2. SD2遺物 |
| | 6. SD44遺物 | | 3. SD203遺物 |
| | 7. SD51遺物 | | 4. SD51遺物 |
| 図版第9 | 1. SD51遺物 | 図版第14 | 1. SD53遺物 |
| 東地区 | 2. SD52遺物 | 東地区 | 2. SB01遺物 |
| | 3. SD60遺物 | | 3. SB04遺物 |
| | 4. SB04遺物 | | 4. SB05遺物 |
| 図版第10 | 1. SE66遺物 | | 5. SE66遺物 |
| 東地区 | 2. SE68遺物 | | 6. SE69遺物 |
| | 3. SE69遺物 | 図版第15 | 1. SE69遺物 |
| | 4. SE70遺物 | 東地区 | 2. SE71遺物 |
| | 5. SE71遺物 | 図版第16 | 1. SE71遺物 |
| 図版第11 | 1. SE72遺物 | 東地区 | 2. SE72遺物 |
| 東地区 | 2. SE73遺物 | | 3. SE75遺物 |
| | 3. SE74遺物 | | 4. P125遺物 |
| | 4. SE75遺物 | 図版第17 | 1. P143遺物 |
| | 5. SE86遺物 | 東地区 | 2. P199遺物 |
| | 6. SE76遺物 | | 3. P260遺物 |
| | 7. SE77遺物 | | 4. P301遺物 |
| | 8. SE82遺物 | | 5. P303遺物 |
| | 9. SE83遺物 | | 6. P334遺物 |
| | 10. SE84遺物 | 図版第18 | 1. SX182遺物 |
| | 11. SE155遺物 | 東地区 | 2. SX339遺物 |
| 図版第12 | 1. SK96遺物 | | 3. 遺構外出土遺物 |
| 東地区 | 2. SK130遺物 | | |
| | 3. SK132遺物 | | |
| | 4. SK149遺物 | | |
| | 5. SK160遺物 | | |
| | 6. SK180遺物 | | |
| | 7. P193遺物 | | |
| | 8. P231遺物 | | |
| | 9. P270遺物 | | |
| | 10. P300遺物 | | |
| | 11. P339遺物 | | |

I 地形と周辺の遺跡

小杉町は、富山市と高岡市のほぼ中間地点に位置し、北側には射水平野が悠々と広がり、南側には小丘陵からなる射水丘陵を望む。射水平野の地層は新しく、今より1万〜8千年前に形成された新生第四紀で、砂や粘土・礫が層をなしている。この地層は、下条川や和田川が上流の丘陵を削り運搬してきた砂や粘土が厚く堆積し成り立っている。また、今から6000年前の縄文海進期の最盛期には、現在の標高5mの等高線まで海だったと言われており、その後、射水丘陵に源を発する中小河川が丘陵を侵食し、運搬してきた土砂により陸地化し、弥生時代には、海岸線が現在のラインに近くなったとされる。〔北林1956〕

白石遺跡は、下条川と新堀川に挟まれた射水平野の中の水田に立地し、海岸から約4.5km内陸に奥まった所である。この下条川流域は、大正14年に始まる河川改修や射水平野の土地改良事業が行なわれるまで、大きな降雨のたびに低湿地の河川があふれ、氾濫を繰り返して洪水の被害にみまわれた地域であった。改修以前は、曲がりくねった川であったが現在では直線的で、川幅を広くし川底も深くして射水平野の乾田化がはかれている。〔上野1992〕

文献によると、下条川以東の戸破・手崎・小白石などには、平安時代から室町時代末までの約500年に渡って倉垣庄が存在していたとされており、庄内には加茂社の末社が二十社前後と多く分布している。これらの末社はいずれも近世以前の親村に限られ、その勧進は古く南北朝から室町初期と考えられている。〔木倉1965〕

下条川を中心とした周辺の遺跡には、弥生時代末の遺跡が多く発見されている。上流から見ると二の井や大白にかけて存在する遺跡があり、その下流1kmに平成3年度に本調査された伊勢領遺跡がある。更に北西800m地点には、弥生時代・中世の針原東遺跡が存在する。〔上野1992〕

(嗣谷)

NO	遺跡名	主な時代
1	白石	弥生・古墳・中世
2	仮称新幹線分布調査N3	古墳・中世
3	仮称新幹線分布調査N4	弥生・中世
4	愛宕	奈良〜平安
5	戸破若宮	弥生・中世
6	釜塚	古墳
7	西二俣	弥生・古墳
8	針原東	弥生・中世
9	伊勢領	弥生・奈良
10	中山中 中山南	弥生・古墳
11	三谷	弥生



第1図 地形と周辺の遺跡

II 調査の経緯

1. 調査に至るまでの経過

国道8号線に接した小杉町蟹塚・白石地区の水田地帯に、有限会社河上金物店の工場進出計画が具体化したのは、平成2年4月である。その敷地面積は、約53,400㎡である。

同社は、金物のほかに近年鉄鋼製品の供給をはじめたが需要の活発化により、一大流通加工基地として重仮設設備工場の新設方針が小杉町に示された。新工場では、鉄鋼の消却に加え切断や鉄筋の曲げ加工なども予定している。

建設計画地は昭和62年に小杉町の企業団地候補地として上がり、某会社の工場立地の打診もあったが、埋蔵文化財の存在から工事計画との調整が困難なことから話は見送られた。

また、小杉町では平成2年度に計画地の西側を通る町道417号線の拡幅工事を予定していた。路線を含めた一帯には周知の遺跡である仮称・新幹線分布調査№4遺跡が存在することから、7月に路線敷きの試掘調査を実施し、遺構や遺物の検出された部分の本調査が引き続き進められ、併行して町道の建設が行なわれた。

平成2年4月に木格化した河上金物店の新工場計画は、大型開発事業に該当し、小杉町では開発に伴う各種関係法令の手続きや事前協議の窓口を商工振興課が担当し、富山県との連絡調整に当たってきた。会社では、小杉町・富山県との調整を図りながら、秋の収穫後に用地の取得が進められた。

2. 平成2年度の調査

小杉町教育委員会では、建設計画地に周知の遺跡が存在するため、まず遺跡の範囲・内容を把握することを目的として、平成2年12月14日から12月22までの6日間にわたり、試掘調査を実施した。この結果、遺跡は東・西地区に分かれ、2地区を合わせた遺跡面積が約22,900㎡の広大な広がりをもつことが明らかになった。

3. 平成3年度の調査

平成3年2～3月には、小杉町教育委員会と会社との間で試掘結果を踏まえ、遺跡の取り扱いについて種々検討が行なわれた。協議の結果、当初の建物配置案で工事を進めること。遺構の密集する遺跡東地区の東端は若干の盛土をしたらえ調整池として残す。北側の加工工場と門型クレーンは今後の増築スペースとし、当時は資材置場として利用するため、本調査は増築時に行なうことなどが合意された。従って今回の本調査対象地は、南側の門型クレーン（土間）の基礎部分と重仮設機械設備工場の建物敷地及び搬入口とし、取りあえず実施することとなった。

この内、南側の県道に面する搬入口2箇所の本調査は、工事の緊急度から最初に着手することになり、民間の調査機関の調査員の協力を求め、7月19日から8月31日まで延べ24日間の発掘を行なった。引き続き、建物敷きの調査に9月3日から11月30日までの延べ56日間あった。

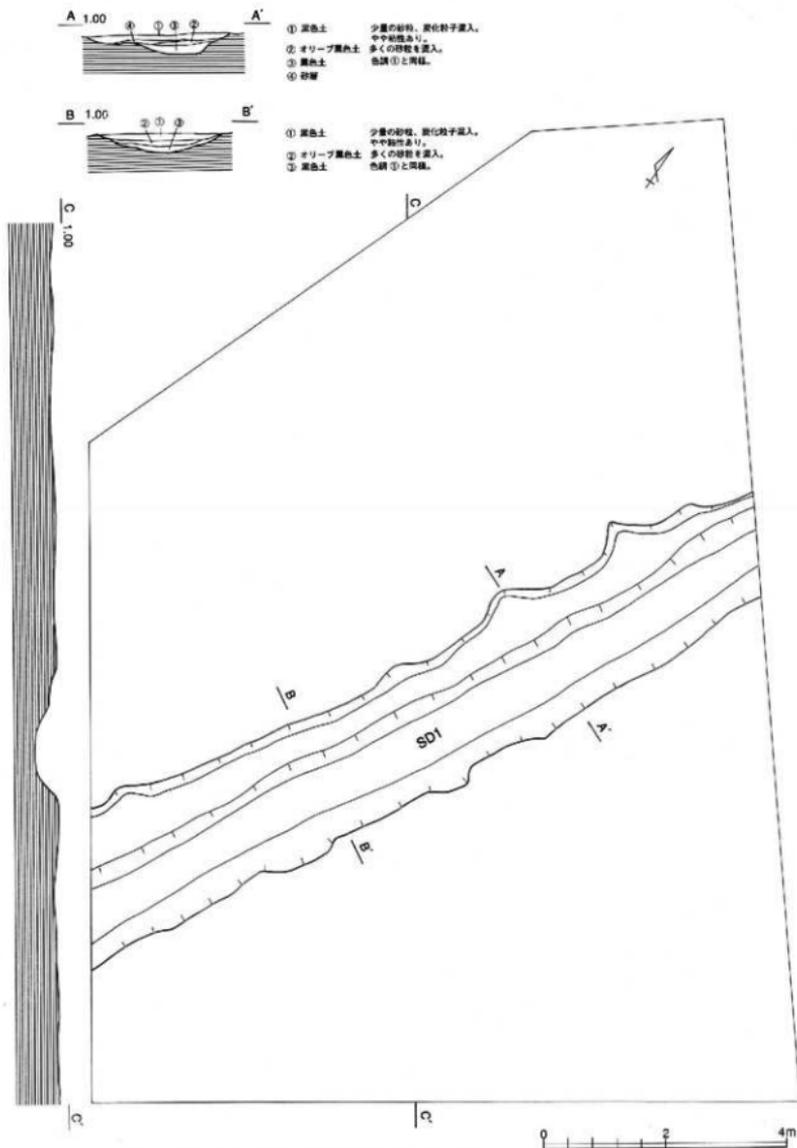
さて、工事の進行に伴い、建設用地の地区内排水路敷きの掘削も遺跡内で進められ、遺跡の保存に支障が出ると思われる箇所については、急遽、工事時に立会いを行なった。遺構が確認された箇所は、すぐに本調査を実施し対応した。遺跡の西地区は搬入口に続く部分であり、7～8月の調査により溝が検出された北側の部分敷きの発掘であった。また遺跡の東地区は南西端近くにあたる約60㎡を対象として本調査に入っていた。

調査面積は、門型クレーンの基礎部分約480㎡、建物敷きが約1,370㎡の合わせて約1,850㎡である。 (上野)

4. 平成4年度の調査

当初の事業者との協議では、年度初めから調査に入り9月までに終了する計画となっていたが、民間調査機関の調査協力が直前になり入ることが遅れたことや、作業員の不足により9月から実施し3か月で終了に至った。

平成4年度の調査は、3年度に実施した東地区の調査区以东の門型クレーン基礎部分約330㎡と、建物敷き約1,960㎡を対象に、民間調査機関の調査員2名の協力を求め、9月7日から12月9日までの延べ60日間で進めた。(原田)



第3図 西地区搬入口部分 (X1~5Y7~18区) 遺構配置図(1/80)

Ⅲ 調査の概要

1. 調査の方法(第2図)

本調査は、平成2年度に行なわれた試験調査の結果を踏まえ実施した。調査に際して重機により表土層を掘削し、遺構確認面までは人力で排土した。その後、10m間隔に基準杭を設け、X軸を南北方向にとり、Y軸を東西方向にとった。遺物の取り上げは、2m方眼を1区画とする小グリットを設定して行なった。調査は、X2～5 Y33～40区より開始し、西地区のX1～5 Y7～18区、東地区のX17～22 Y38～61区、X33～52 Y35～62区の順で行なった。

2. 調査区の層序

基本的層序は各地点毎に様相がやや異なるが、概ね以下の堆積となる。X2～5 Y32～40区とX1～5 Y7～18区は調査区南端に位置し、I層が水田耕作上の暗灰褐色土(15～20cm)、II層が淡灰黄色粘質土(5～10cm)、III層が黒色土(5～15cm)の順で堆積し、遺構確認面である青灰色粘質土に至る。

X7～22 Y38～62区とX33～52 Y35～62区は、I層が水田耕作上の暗灰褐色土(20cm)、II層が黒褐色粘質土(5～10cm)、III層が淡褐色砂質土(15～20cm)、IV層が淡灰色砂泥土(20cm)、V層が淡茶褐色砂泥土の順で堆積し、III層が遺構確認面であり、III層からV層は縄文時代の遺物包含層となっている。

3. 西地区の調査

掘入口部分(X1～5 Y7～18区 第3・4図、図版第1の1～5)

調査区面積は180㎡である。検出された遺構は溝一条で、遺構埋土より弥生土器細片・木製品が出土した。

SD1(第3・4図、図版第1の1～5) 主軸方向が25°東偏する南北溝である。規模は現長12.2m・上面幅1.6～2.4m・底面幅0.6m前後、掘り込み0.3～0.4mを測る。溝内の西側には、底面幅0.4～0.8mを測る一段浅いテラス状の掘り込みを有する。断面は皿状の底部より緩やかに立ち上がる。底面は南端と北端で比高3cmを測り、ほぼ平坦である。埋土は黒色を基調とした自然堆積土で、一層には炭化粒子を少量混入する。遺物の出土状況は、木器、土器、石器が2層と3層の交わりを中心に包蔵されていた。

遺物(第4図1～3、図版第7の1・13の1) 1は用途不明の木製品で、長さ23cm・幅2～5cm・厚さ1.2cmを測る。2は弥生時代後期後半の甕で、口縁部が[]の字状に外反し、口縁端部は先細る。口縁外面にはハケ目調整が施され、内面には明瞭な輪積痕が認められる。3は不整形円形を呈する磨り石で、扁平面には擦痕が認められる。

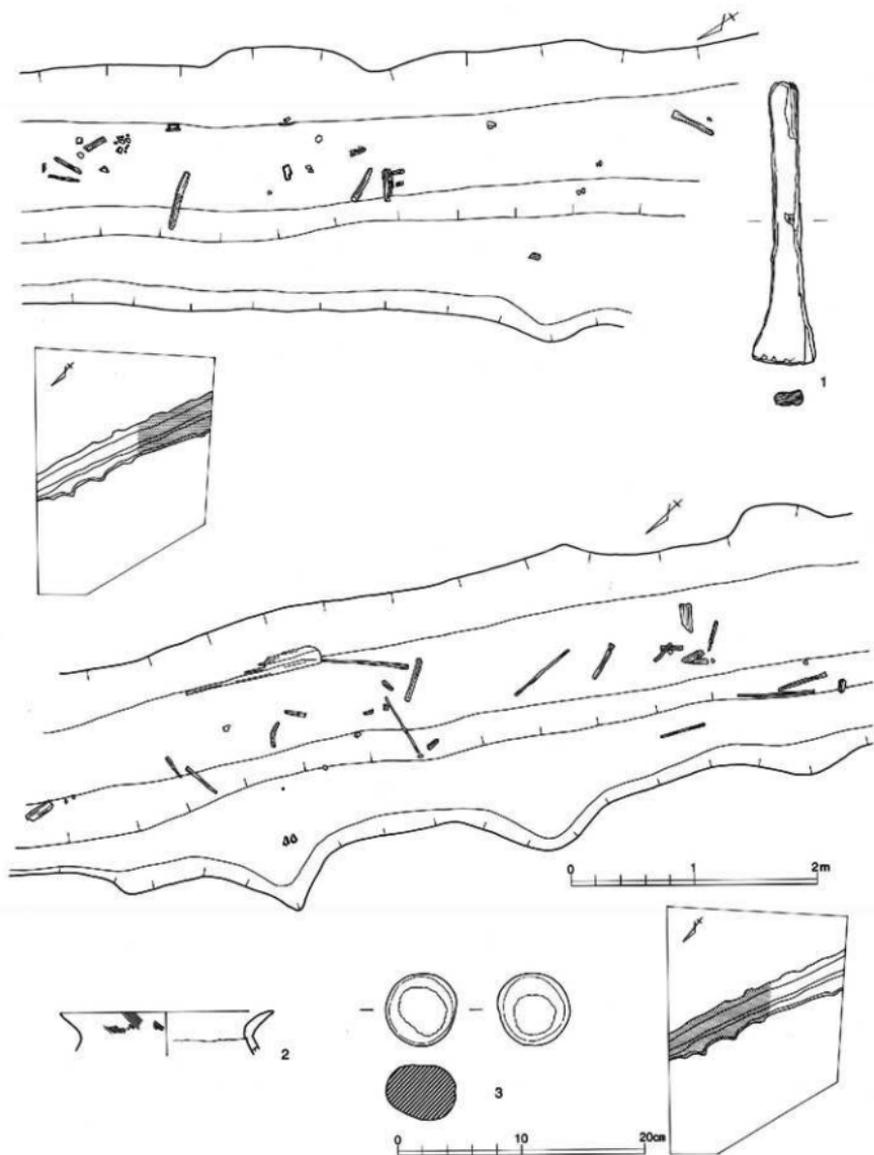
4. 東地区の調査

掘入口部分(X2～5 Y33～40区 第5・6図、図版第1の6～10)

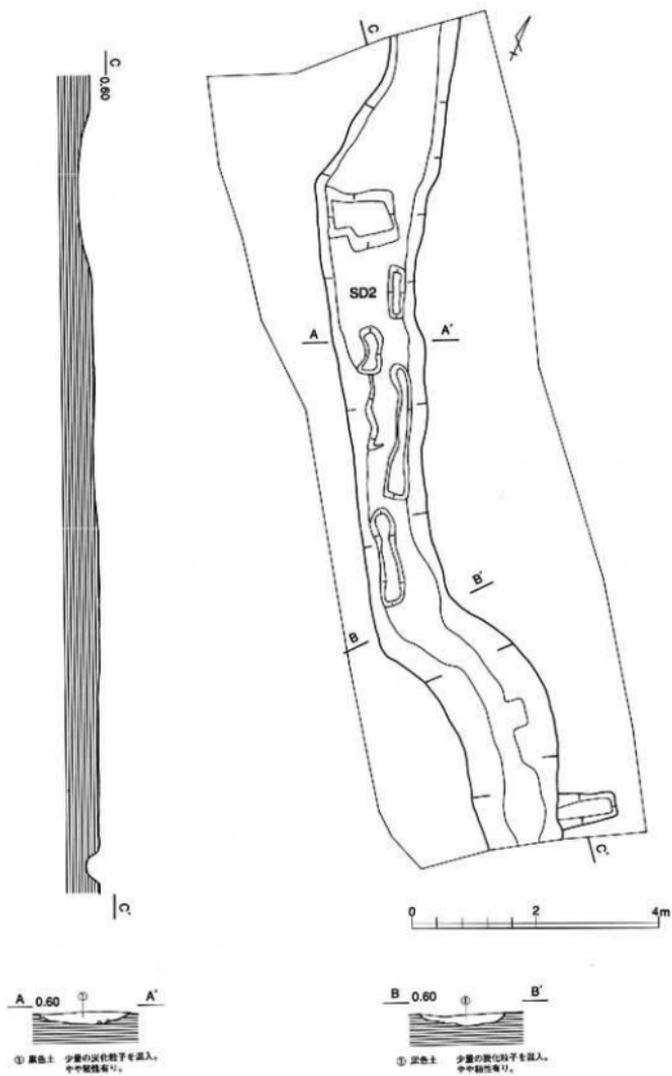
調査面積は56㎡である。確認された遺構は溝一条で、遺構埋土より木製品が出土した。

SD2(第5・6図、図版第1の6～10) Y軸に沿いながら緩やかに蛇行する東西溝である。規模は現長13.4m・上面幅1.1～1.8m・底面幅0.6～1.4m・掘り込み0.2m前後を測る。溝内底面には、浅い不定形な落ち込みが5箇所ほど存在する。埋土は黒色の単層で、少量の炭化粒子を混入する。遺物の出土状況は、木器が底面よりやや浮いた状態で多数出土している。

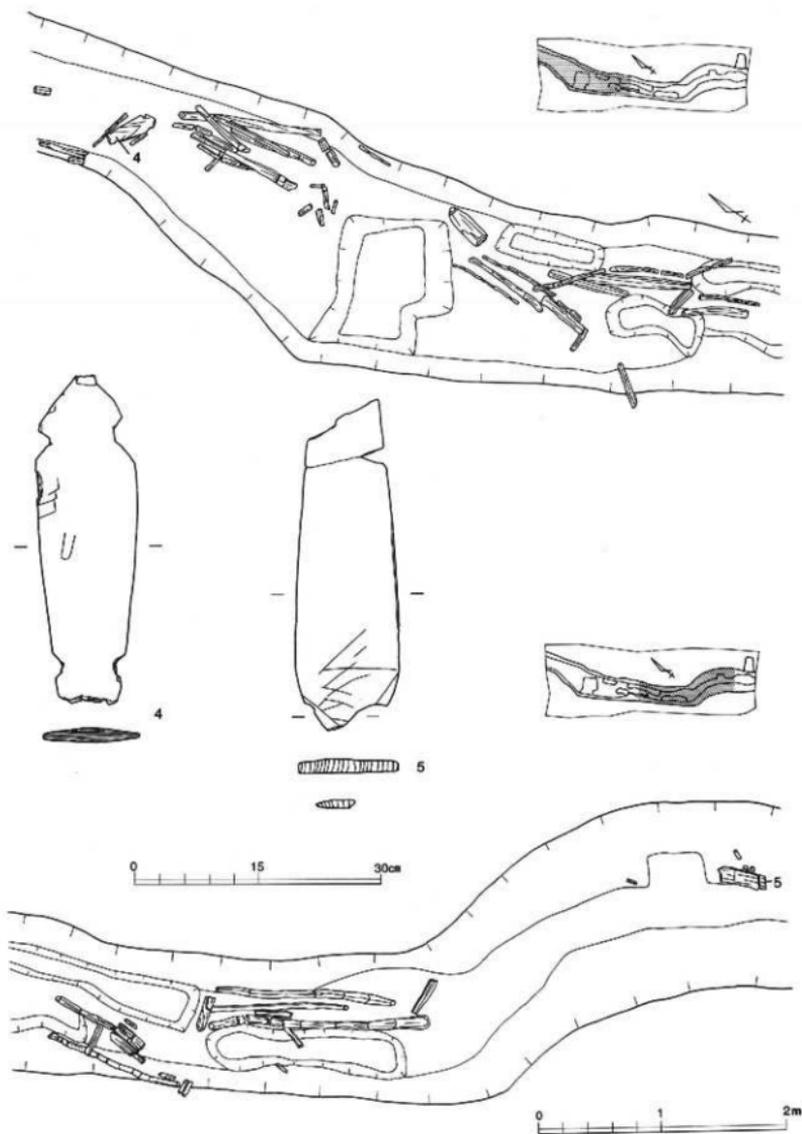
遺物(第6図4・5、図版第13の2) 4は田下駄の未製品と思われる。鼻緒孔は穿たれていないが、足板両端の左右から梯形の切欠きを入れ、縄などで横木にしばりつけ固定したのではなかろうか。規模は、長さ40cm・幅9～12cm・厚さ0.6～2cmを測る。器面にはケズリ痕が認められ、刃幅は1.2cm前後と思われる。5は身の先端部及び柄部を欠損した端であり、一木で身と柄を作り出す、一木端か別木で作る組み合わせ端かは不明である。規模は、現長34cm・幅9～12.5cm・厚さ1～1.8cmを測る。



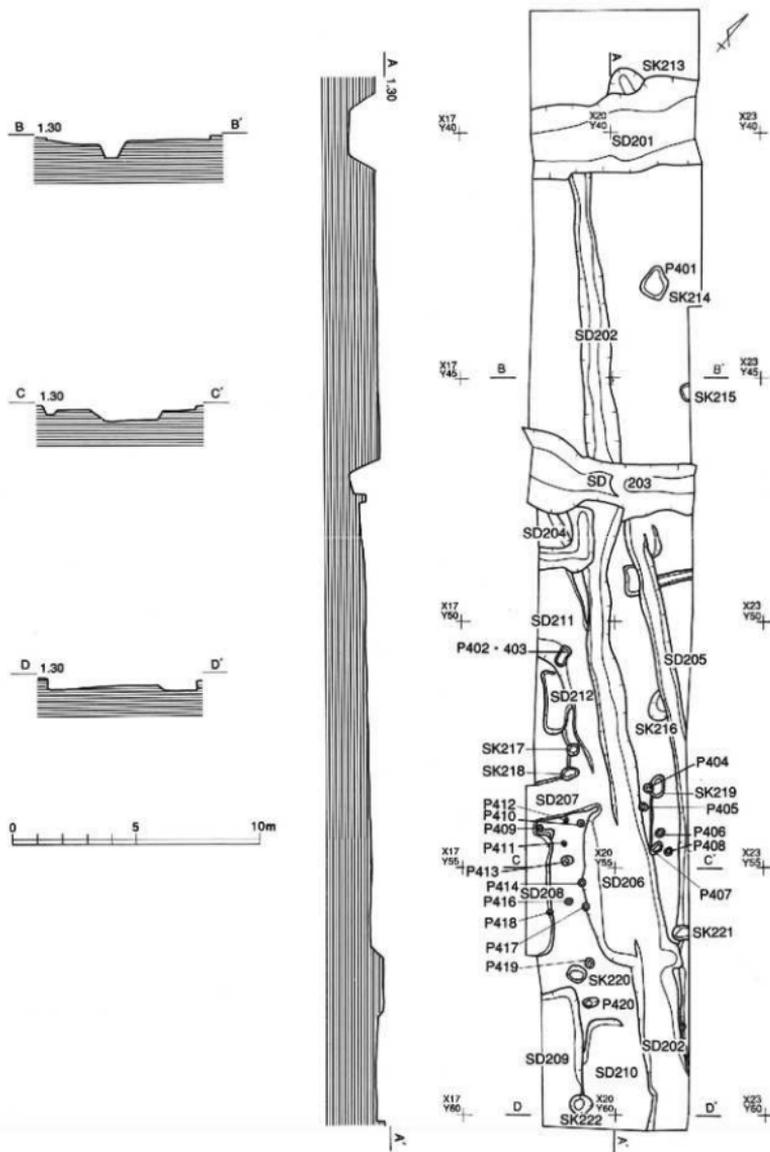
第4図 SD1遺構図(1/40)、出土遺物(1/4 3:21/6)



第5図 東地区搬入口部分(X2~5Y33~40区)遺構配置図(1/80)



第6図 SD2遺構図(1/40)、出土遺物(1/6)



第7図 東地区門型クレーン基礎部分(X17~22Y38~61区) 遺構配置図(1/200)

門型クレーン基礎部分 (X17~22Y38~61区 第7~15図、図版第2の1~9)

調査区面積は330㎡であり、地形は概ね平坦である。検出された遺構は、溝11条・土坑10基・ビット17基である。各溝は断片的調査にとどまるが、配列及び遺構埋土より区画溝が想定され、溝方向は南北溝が磁北より約35°西偏し、東西溝がそれに概ね直行する。出土遺物は中世を主体とし、流れ込みで弥生土器・石器が少量加わる。

土坑の平面形状は、円形基調と不整形に分けられ、遺構埋土は一層に黒褐色土ないしオリーブ灰色土が乗る。出土遺物はなかった。

ビットはP401を除き、SD206を挟むX18~21Y50~56区に集中して構築されており、いずれの遺構埋土も暗いオリーブ色を基調としている。

SD201 (第8図、図版第2の3・4) X18~22Y39~41区に位置する。溝は北東方向に伸びる。溝の幅は3m程で長さ6m以上ある。深さは1mあり西側でSK213、東側でSD202を切る。出土遺物はない。

SD202 (第8~10図、図版第2の5・6) X19~22Y41~61区に位置する。溝はSD201・203・204に切られ、南東方向に伸びる。溝の幅は0.6~1.6m程で、長さ39m以上ある。深さは0.3~0.6m程で、遺物は弥生土器、石鏃、瀬戸・美濃、珠洲、越前焼等が出土した。

SD203 (第9図、図版第2の7・8) X18~22Y46~48区に位置する。溝はSD202を直交するかたちで切り、東西方向に伸びる。溝の幅は1.6~3.2m程で長さ6m以上ある。深さは1~2mと深い。出土遺物は、漆器椀、下駄、珠洲、銅銭等8点が出土した。

SD204 (第9図) X18~20Y47~49区に位置する。溝の幅は0.9m程で東西方向に伸びた一辺の長さが約2mあり、西側に折れ曲がる。出土遺物はない。

SD205 (第9図) X20~22Y48~59区に位置する。溝の幅は0.6~0.9mで南東に伸びる。長さは22mを測り、SD203、SK221に切られる。深さは0.2mと浅く、出土遺物はない。

SD206 (第10図) X19~21Y54~57区に位置する。溝は南側をSD202、西側をSD207に切られ、原形は不明である。残存する溝の深さは0.5mで出土遺物はない。

SD207 (第10図) X18~20Y53区に位置する。溝の幅は1.5mでSD206・208・SK218により切られ、長さは不明である。深さは0.2mと浅く出土遺物はない。

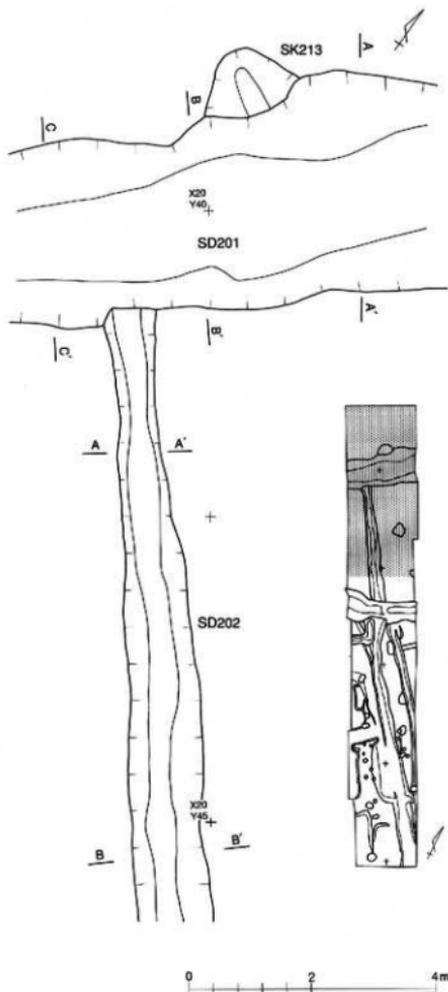
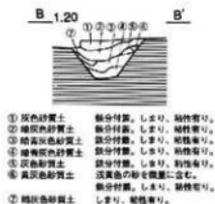
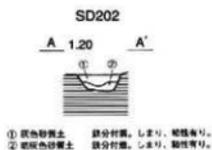
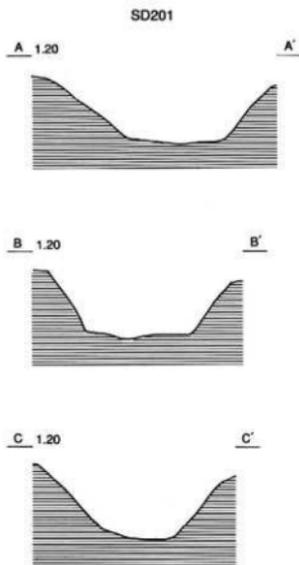
SD208 (第10図) X18~19Y54~57区に位置する。溝の西側の掘り込み面は未確認である。深さは0.2m程で出土遺物は十師貫皿が1点出上した。

SD209 (第10図) X18~20Y57~61区に位置する。溝の西側の立ち上がりは未確認である。遺物は弥生土器が1点出上した。

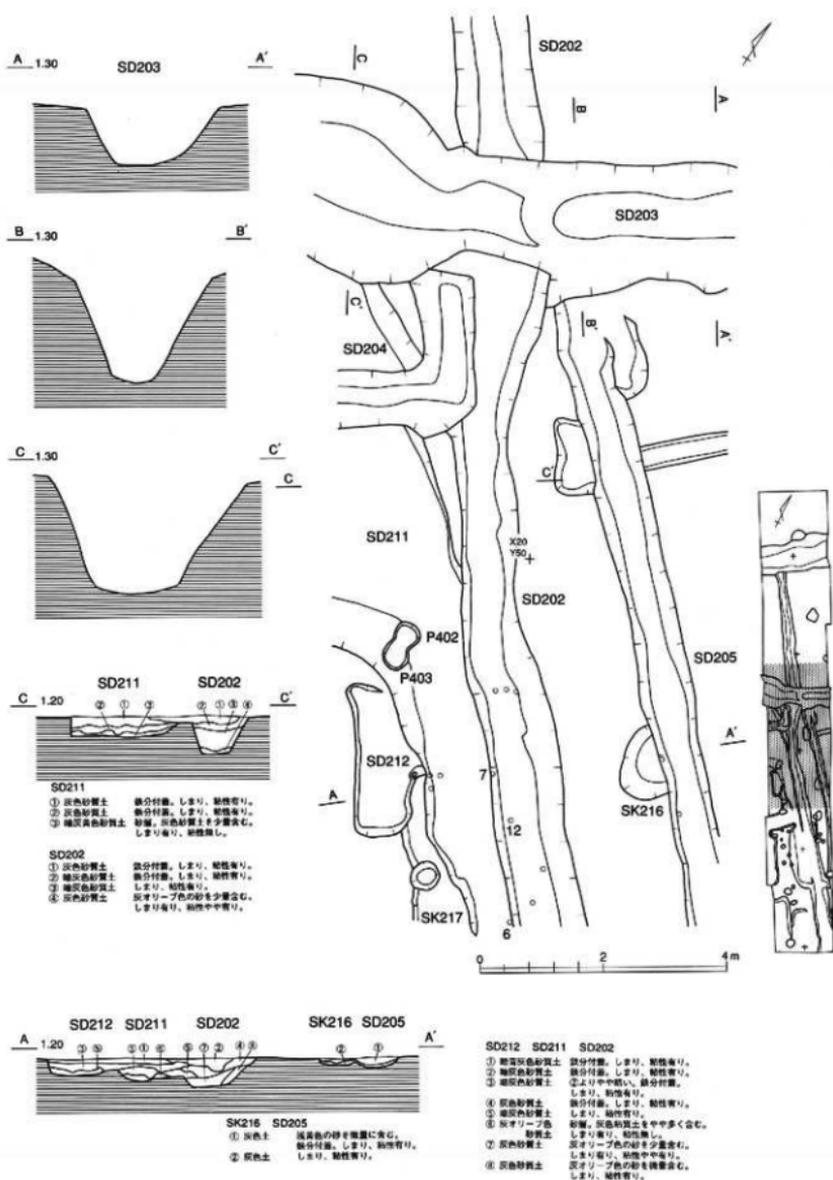
SD210 (第10図) X19~20Y58~61区に位置する。溝の立ち上がりが不明瞭なため規模や方向は不明である。出土遺物はない。

SD211 (第9図) X18~20Y47~53区に位置する。SD202により多く切られ、SD204・P402・403にも切られているため幅・長さともに不明である。深さは0.2~0.4mで出土遺物は弥生土器、珠洲等が4点出上している。

SD212 (第9図) X18~20Y51~53区に位置する。溝の東側をSD211に切られ、幅・長さについては不明である。深さは0.3mを測り、埋土は灰色砂質土で鉄分が付着している。出土遺物はない。

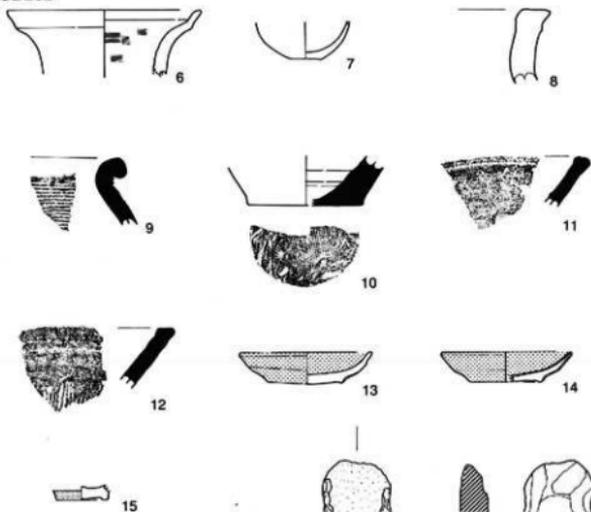


第8図 SD201・202遺構図(1/80)

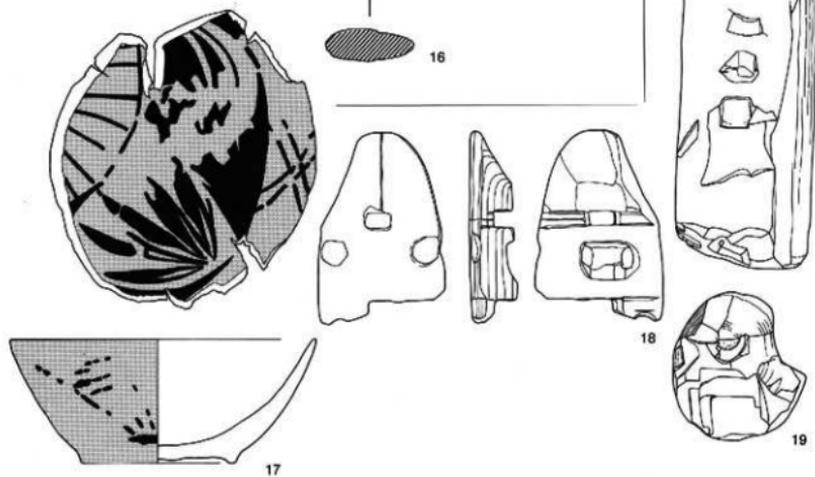


第9図 SD202~205・211・212遺構図(1/80)

SD202



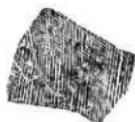
SD 203



0 10 20cm

第11図 SD202・203 出土遺物 (1/4、17は1/2、19は1/6)

SD203



20



21



22



23



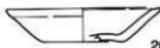
24

SD208



25

SD209

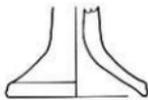


26

SD211



27



28



29



30

0 10 20cm

第12図 SD203・208・209・211 出土遺物 (1/4、23・24は1/2)

出土遺物

SD202 (第11図6~16、図版第7の2) 6・7は弥生時代後期後半の土器であり、6は壺7は甕である。6は口頸部が長く有段口縁をもち、内側には横方向へのハケ目調整が施される。7は底径2.5cmを測り、外面に油煙が付着する。8は16世紀中頃の越前焼の中甕である。口縁端部は外方向に引きだされ、内外面に弱い沈線がめぐる。軸は内面に塗り鉄が見られ、外面にはオリーブ色の降灰軸が掛かる。9~12は珠洲IV期に比定される珠洲であり、9は甕、10~12は摺鉢である。9は短頭化した口縁がしっかりと外反し、端部は環頭状に仕上げる。10は底径9cmを測り、底部の切り離しは静止糸切りである。11・12は口縁部がやや肥厚し、外端で面を取る。13~14は瀬戸・美濃の灰軸の皿で、16世紀中頃の所産と思われる。法量はいずれも口径が10.3cm・高さ2.7cm・底径5.8cmを測り、13は底部中央を高台より高く仕上げ。釉調は畳付きを除く総軸で、透感のあるオリーブ色を呈し、見込みに白泥色の灰灰が降り掛けられる。15は天目碗の底部で、底径は4cmを測る。軸は内底面に褐色の鉄軸、高台には満遍なく錆軸が施される。16は刃部を欠損した石罫で、側縁部及び基部に調整を加える。石材は安山岩系である。

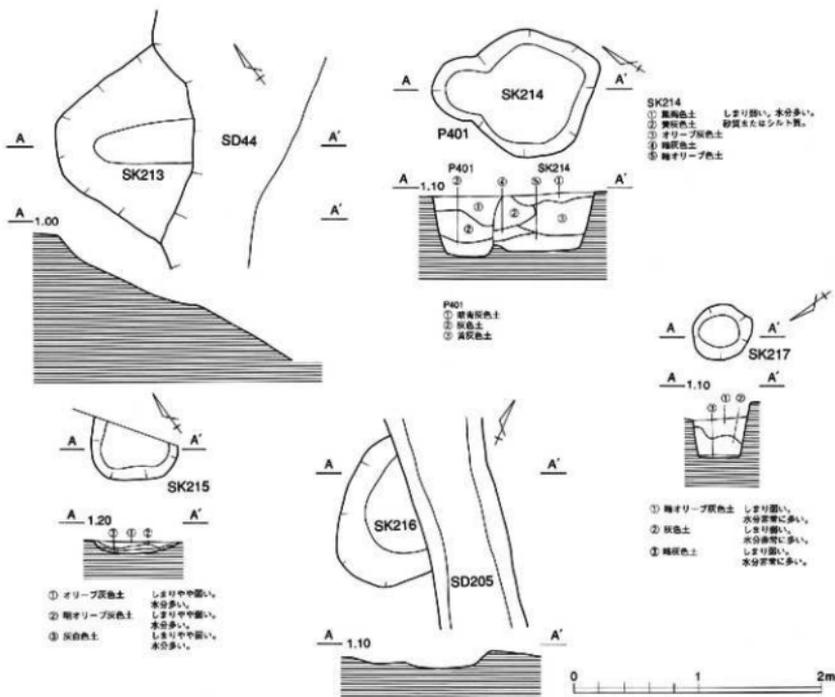
SD203 (第11・12図17~24、図版第7の3・13の3) 17は漆器の汁椀と考えられる。法量は口径10.8cm・器高5cm・底径5cmを測り、木取りは木目に対して垂直に取る「堅木取り」である。紋様構成は赤漆で見込みに笹と扇絵、外側面は不明。18は歯部を差し込んで作る露印下駄である。木取りは板目材を使用する。鼻緒孔の位置は前壺が前壺の中央にあり、後壺は歯の内側にあり、前壺と後壺の間隔は狭い。19は用途不明の木製品で、規模は長さ85cm・径16cmを測り、両端面には刃幅7cm程度のケズリ痕が認められる。また、一方に非常に浅い柄穴らしきものが大きさを異

にし、不等間隔に穿たれる。20～22は珠洲で、20は壺もしくは甕、21～22は摺鉢である。20は3cm当たりの叩き条数が13条を数え、部分的に格子状に叩き締められる。21は口縁端部で面を取る。叩き目の原体幅は2.2cmを測り、一帯当たりの条数は9条を数える。22は口縁端部を幅広く仕上げる。叩き目の原体幅は2.7cmを測り、一帯当たりの条数は7条を数える。帰属年代は21が珠洲編年のIV期、22はVI期に比定される。23・24は銅銭で24は判読不明。23は北宋銭で名称及び初铸年代は元祐通宝(1086年)であり、重さは2.9gを量る。

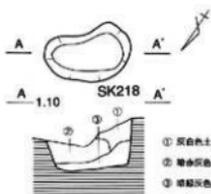
SD208(第12図25、図版第7の4) 25は珠洲編年のVI期に比定される摺鉢で、肥厚した口縁端部に撚目波状紋体が加飾され、波長間隔は3cmを測る。色調は灰色を呈する。

SD209(第12図26、図版第7の5) 26は非ロクロ系の土師質皿で、体部は直線的に立ち上がり、口縁端部を軽く摘み上げる。底部は上げ底ふうに仕上げ、色調は灰白色を呈する。

SD211(第12図27～30、図版第7の6) 27・28は弥生時代後期後半の土器であり、27は壺、30は高杯である。27は底部外面の周縁にボタン状の貼り付けが施される。28は短めの柱状部より裾部に至り「ハ」の字状に開脚する。29・30は珠洲であり、29は甕、30は摺鉢である。29は口縁部を嘴状に仕上げ、肩部に平行叩き締めが施される。30は体部が直線的に開き、外端で面を取る。帰属年代は珠洲編年のIV期である。



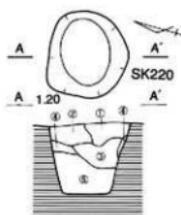
第13図 SK213～217、P401遺構図(1/40)



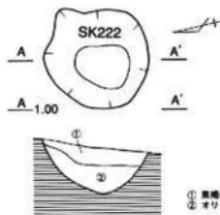
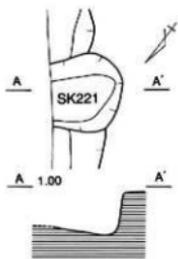
- ① 灰白色土 しまりや中強い、水分含量が多い。
 ② 暗赤色土 しまり強い、水分をきり、水分含量が多い。
 ③ 暗緑灰色土 しまり強い、土質を少量含む、水分含量が多い。



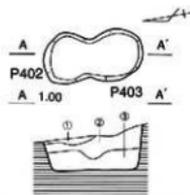
- ① 暗オリーブ灰色土 しまり強く、水分多い。
 ② 灰白色土



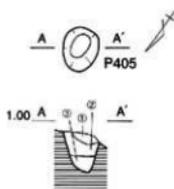
- ① 暗オリーブ灰色土
 ② 灰白色土
 ③ 灰白色土
 ④ 暗オリーブ灰色土
 ⑤ 灰白色土



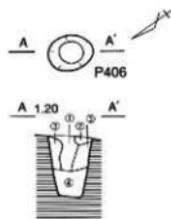
- ① 暗緑灰色土
 ② オリーブ灰色土



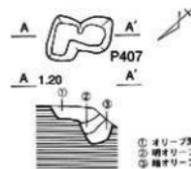
- ① 暗緑灰色土 しまり強く、水分多い。
 ② オリーブ黒色土 しまり強く、水分多い。
 ③ 暗オリーブ色土 しまり強く、水分多い。



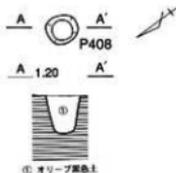
- ① 灰白色土
 ② オリーブ黒色土
 ③ 灰白色土



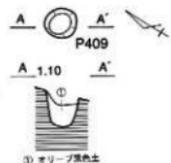
- ① オリーブ黒色土
 ② 灰白色土
 ③ 暗赤灰色土
 ④ 灰白色土



- ① オリーブ黒色土
 ② 暗オリーブ灰色土
 ③ 暗オリーブ色土



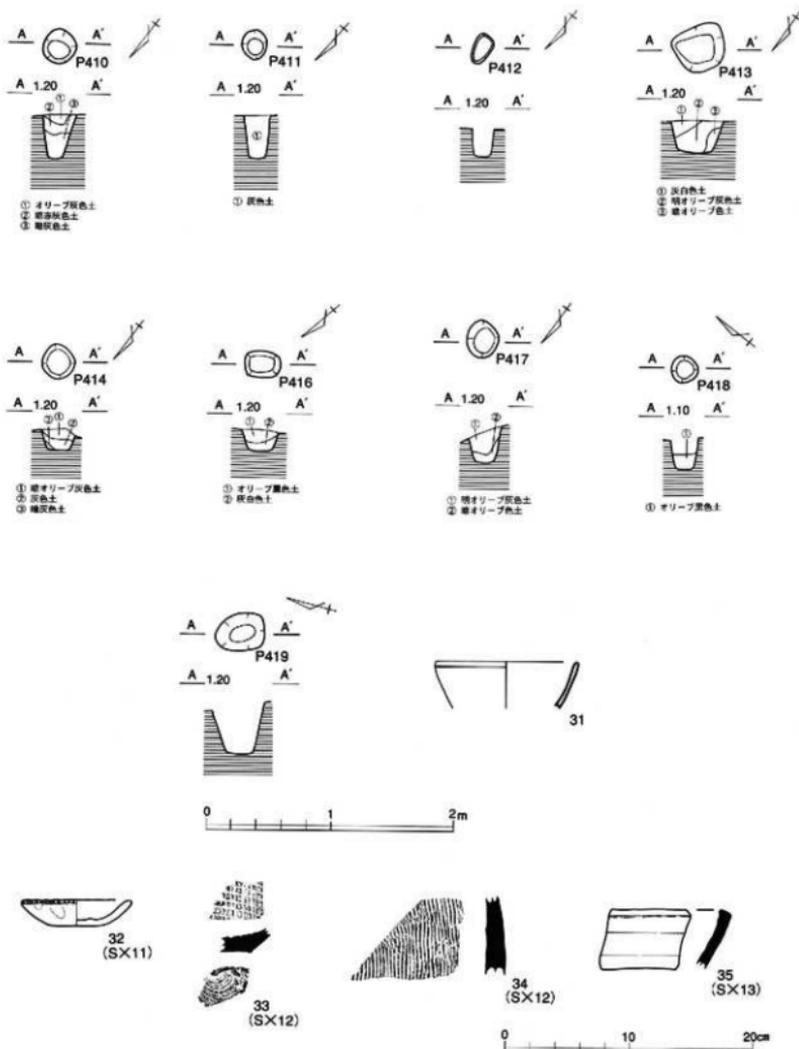
- ① オリーブ黒色土



- ① オリーブ黒色土



第 14 図 SK218~222、P402・403・405~409 遺構図 (1/40)



第15図 P410~414・416~419遺構図(1/40)、P401出土遺物、遺構外出土遺物(1/4)

- SK213 (第13図) X20 Y39区に位置する。上面径1.1m・下面径0.8m・深さ0.6mでSD201に切られ、不整形をなす。
- SK214 (第13図) X20 Y43区に位置する。上面径1.3m・下面径1.0m・深さ0.5mでP401により切られ不整形をなす。
- SK215 (第13図) X21 Y45区に位置する。上面径0.7m・下面径0.5m・深さ0.1mと浅い。遺構の半分は調査区域外

にあるため平面形はわからない。

SK216 (第13図) X19Y51区に位置する。上面径0.6m・下面径0.4m・深さ0.1mと浅く、SD205に遺構を半分程切られているため平面形はわからない。

SK217 (第13図) X19Y52区に位置する。上面径0.4m・下面径0.3m・深さ0.3mで円形をなす。

SK218 (第14図) X19Y53区に位置する。上面径0.7m・下面径0.5m・深さ0.3mで不整形をなす。埋土は水分が非常に多く、木屑を少量含む。

SK219 (第14図) X20Y53区に位置する。上面径0.9m・下面径0.7m・深さ0.1mと浅く長円形をなす。南側に付属ピットをもつ。

SK220 (第14図) X19Y57区に位置する。上面径0.6m・下面径0.4m・深さ0.6mで円形をなす。

SK221 (第14図) X21Y57区に位置する。上面径0.6m・下面径0.5m・深さ0.4mでSD205を切る。遺構の半分程は調査区域外にあるため平面形はわからない。

SK222 (第14図) X19Y59区に位置する。上面径0.8m・深さ0.4mで円形をなす。

P401 (第14図) X20Y42区に位置し、SK214を切り込み構築される。円形で上面径0.55m・下面径0.35m・底面までの深さは0.5mである。出土遺物は青磁1点が出た。

遺物 (第15図31、図版第7の7) 31は16世紀前半代の青磁の碗で、釉調はオリーブ色、胎土は灰色を呈する。

P402・403 (第14図) X18Y50区に位置する。円形のピットが重複した扇形で、短軸0.32m・長軸0.79m・底面までの深さは0.38mである。

P405 (第14図) X20Y53区に位置する。円形で上面径0.3m・下面径0.16m・底面までの深さは0.34mである。

P406 (第14図) X20Y54区に位置する。円形で上面径0.34m・下面径0.18m・底面までの深さは0.49mである。

P407 (第14図) X20Y54区に位置する。方形と円形のピットが重複した扇形で、短軸0.3m・長軸0.51m・底面までの深さは0.31mである。

P408 (第14図) X21Y54区に位置する。円形で上面径0.27m・下面径0.16m・底面までの深さは0.31mである。

P409 (第14図) X18Y54区に位置する。円形で上面径0.26m・下面径0.15m・底面までの深さは0.25mである。

P410 (第15図) X19Y54区に位置する。円形で上面径0.26m・下面径0.12m・底面までの深さは0.35mである。

P411 (第15図) X19Y54区に位置する。円形で上面径0.21m・下面径0.13m・底面までの深さは0.35mである。

P412 (第15図) X19Y54区に位置する。長円形で短軸0.16m・長軸0.26m・底面までの深さは0.22mである。

P413 (第15図) X19Y54区に位置する。方形で短軸0.38m・長軸0.4m・底面までの深さは0.26mである。

P414 (第15図) X19Y55区に位置する。円形で上面径0.25m・下面径0.18m・底面までの深さは0.13mである。

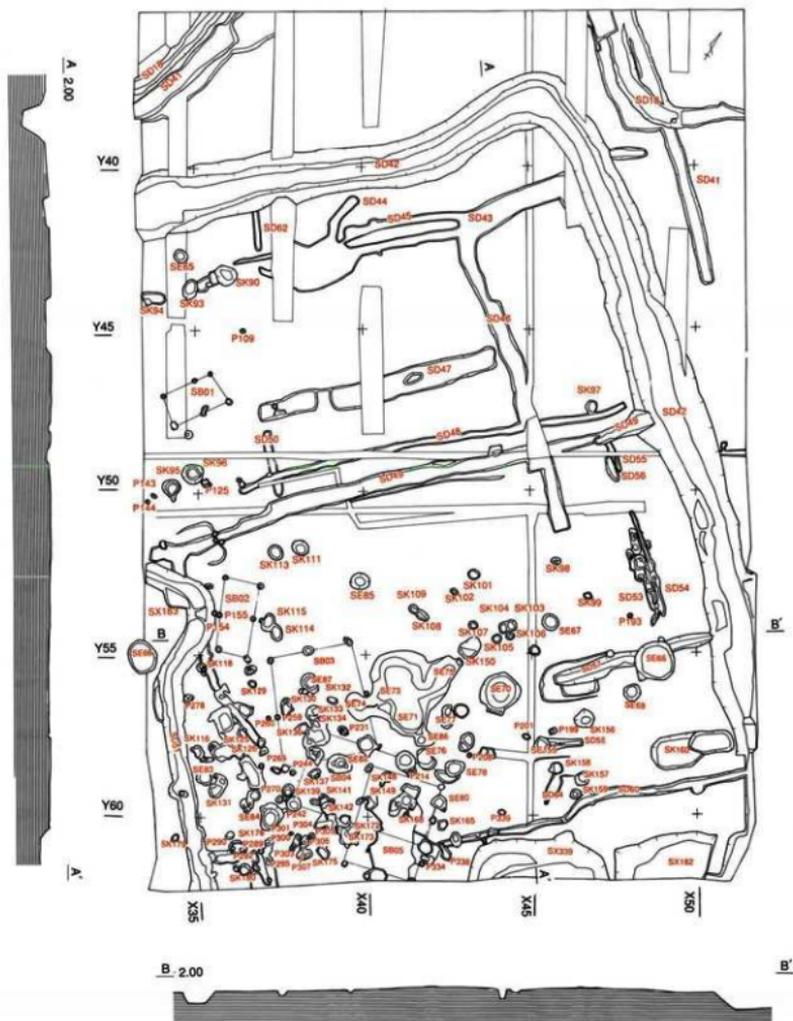
P416 (第15図) X19Y55区に位置する。方形で短軸0.22m・長軸0.29m・底面までの深さは0.15mである。

P417 (第15図) X19Y55区に位置する。円形で上面径0.27m・下面径0.16m・底面までの深さは0.25mである。

P418 (第15図) X18Y55区に位置する。円形で上面径0.21m・下面径0.14m・底面までの深さは0.24mである。

P419 (第15図) X19Y56区に位置する。円形で上面径0.4m・下面径0.21m・底面までの深さは0.38mである。

X17~22Y38~61区の遺構外の出土遺物 (第15図32~35、図版第7の8) 32は非クロコ系の土師質皿で、体部は扁平な底部より短く直線的に立ち上がる。外側面には指圧痕が連続し、見込みには横方向のナデが施される。色調は灰褐色を呈し、焼成は良好。法量は口径9cm・器高2cm・底径4cmを測る。33~35は珠洲系陶器で、33は卍し目の皿、34は壺もしくは鉢、35は鉢である。33の卍し目の条痕は、概して粗雑にヘラで縦横に切り込まれ、色調は灰色を呈する。34は3cm当たりの叩き条数が10条を数え、色調は青灰色を呈する。35は体部が直線的に立ち上がり、口縁部は外端で面を取り、かるく内方向に引き出す。色調は青灰色を呈する。



第 16 図 東地区建物敷き (X33~52Y35~62区) 遺構配置図 (1/300)

建物敷き部分 (X33~52 Y35~62区 第16~75図、図版第3~6)

調査面積は1,960㎡であり、調査区は概ね平坦である。検出された遺構は、溝21条・掘立柱建物跡5棟・井戸跡2基・土坑51基・ピット27基である。これら遺構群は、配置関係・出土遺物・遺構埋土より一連の機能を有していたと判断される。

掘立柱建物跡は、いずれも雑合的な建物で柱間寸法がバラツキ、各辺が一致せず、平面形態は略台形が主体となる。各建物間の配置は、SB02の平側柱列がSD42・51に平行し、SB03~05は重複関係にある。

井戸はY52~61 X33~49に集中して鑿井され、工法・規模はバラエティーであり、重複が著しい。

SD18 (第26図) X47~51 Y35~38区に位置する。溝はL字状を呈し、SD41を切り込み構築される。溝の幅は2.5~3.5mで、深さは0.4~0.9m程である。出土遺物はない。

SD41 (第26図) X47~51 Y35~43区に位置する。溝は北西方向に伸びる。西側はSD18と重複してはっきりした形がつかめない。溝の幅は1m程で長さは16m以上あり、深さは0.2mである。出土遺物は珠洲が1点出土している。

SD42 (第17~19図、図版第4の1・2) X33~51 Y37~57区に位置する。溝は南より東へとL字状に他の溝を切って伸びている。溝の幅は2.4~4.0mあり、深さは0.8~1.4mで深い。遺物は、瀬戸・美濃、珠洲、土師質皿、青磁、石製品等が14点出土している。

SD43 (第18・25図) X36~46 Y40~43区に位置する。溝は南北に伸び、SD45・46とつながっているため、はっきりした区分ができない。溝の幅は0.6m程で長さは20m以上ある。深さは0.2m程で遺物は縄文土器片が1点出土している。

SD44 (第25図) X39 Y41区に位置する。溝はSD45とつながっているため形状がはっきりしない。溝の幅は0.5mで遺物は鉄製鋤先が1点出土している。

SD45 (第25図) X36~42 Y41・42区に位置する。溝はSD43・44・46とつながっているため形状がはっきりしないが、南北方向に伸びている。溝の幅は0.5m程で長さは10m以上あり、深さは0.1mと浅く、遺物は珠洲1点が出土している。

SD46 (第21・25図) X43~46 Y42~51区に位置する。溝はSD43とつながっていてSD48・49を切る。溝の幅は0.6~1.2m程で、長さが17m以上ある。深さは0.1~0.2mで埋土は黒褐色土と灰白色土を基調とし、しまりのやや強い土である。

SD47 (第24図) X36~43 Y46~48区に位置する。溝の幅は1.5m・長さは15mあり、深さは0.15mと浅く、出土遺物はない。

SD48 (第21・22図) X36~47 Y47~49区に位置する。溝は北東方向に伸び、長さは23m以上あり、SD46に切られ、SD50を切る。溝の幅は0.5mで、深さは0.1mと浅い。出土遺物はない。

SD49 (第21・22図) X33~48 Y47~51区に位置する。SD48とほぼ平行に並ぶ。長さは30m以上ありSD51に切られる。溝の幅は0.6~1.0m程で深さは0.1~0.2mで、遺物は珠洲が1点出土している。

SD50 (第22図) X36・37 Y48・49区に位置する。溝は東西に伸びSD48に東方向を切られる。溝の長さは4.2m、幅0.5m程で深さは0.1mと浅く、出土遺物はない。

SD51 (第20図、図版第4の4~7) X33~36 Y52~62区に位置する。溝は南東に伸びSD49・52を切る。溝の長さは19m以上あり幅は1.0~1.5m程で、深さは0.6~0.9mである。遺物は、縄文土器、弥生土器、瀬戸・美濃、珠洲、加賀焼、土師質皿、砥石、木製品等が13点出土している。

SD52 (第20図) X35・36 Y54~57区に位置する。溝は北西より南東に伸び長さ6m以上で幅0.5mである。深さは0.2m程あり、遺物は、瀬戸・美濃、珠洲、土師質皿等が6点出土している。

SD53 (第24図) X48 Y52・53区に位置する。溝は東西に伸びSD54に隣接する。長さ3m以上で幅0.6mである。深さは0.15mと浅く、遺物は木製品が3点出土している。

SD54 (第24図) X48・49 Y50～53区に位置する。SD53に隣接し長さ6m程である。幅0.3m・深さ0.1mと浅い。出土遺物はない。

SD55 (第21図) X47 Y48・49区に位置する。溝はSD56に隣接し長さ2m・幅0.2m程で深さ0.1mと浅く、シルト質のやしまりのある埋土である。

SD56 (第21図) X47 Y49区に位置する。溝はSD55に隣接し長さ1.5m・幅0.5m・深さ0.25m程で埋土は灰白色上ブロックを混入したしまりのある土である。

SD57 (第23図) X45～50 Y54・55区に位置する。溝はSF68に切られ、北東方向に伸びる。長さ10m・幅0.7～1.2m程で深さは0.3mである。埋土は灰白色土、黒色土を混入し、8層に分けることができる。

SD60 (第23図) X42～51 Y58～60区に位置する。溝は北東方向に伸びる。長さ19m・幅0.3～0.6m・深さ0.3m程で埋土は黒褐色を基調にしまりが強い。遺物は瓦質陶器が1点出土している。

SD62 (第25図) X36 Y41・42区に位置する。長さ2m・幅0.4m程でSD42に切られる。

SD63 (第24図) X37 Y61区に位置する。溝の南側は調査区域外で長さは不明である。幅は0.5m程で深さは0.2m、埋土は4層に分かれ、しまりの弱い部分と強い部分に分かれる。

出土遺物

SD41 (第27図36、図版第8の1) 36は珠洲の甕で、細密な叩き締めが施される。色調は青灰色を呈する。

SD42 (第27図37～50、図版第8の2) 37～42は珠洲で、37～39は甕、40・41は甕もしくは壺、42は拵鉢、43は壺R種である。37はL線部が引き出され、全体に[く]の字状に外反する。38はL線部が円頭状を呈し、3cm当たりの叩き条数は8条を数える。色調は青灰色を呈し、器面には泡立つ様な降灰が掛かる。39は口縁部が短頭化し、円頭状を呈する。40・41は細密な叩き締めが施され、色調は暗灰色を呈する。42は三角頭の内傾L線に擔目波状紋部を加飾し、叩し日の原体幅は2.5cmを測り、一帯当たりの条数は7条を数える。43は紐クロコ成型による壺R種で、1径は9cmを測る。44は非クロコ系の十節質皿で、整形は内面見込みの横方向の2段のナデ、体外側面には指爪痕が連続する。色調は灰色を呈し、焼成は良好。45は14世紀後半の青磁の端反碗である。軸はオリーブ色を呈し、薄く掛けられ、胎土は灰色を呈する。46は15世紀後半～16世紀前半の天目碗である。軸は鉄軸で茶褐色を呈し、外底面には鎊軸が施される。47は硬質砂岩を利用した低石で、擦痕の上に更に筋状の使用痕を留める。48は側縁部及び基部で調整を加え、刃部を煮く仕上げの石砥で、石材は安山岩系である。49は加工の度合いが少ない砺器であり、端部に僅かな敲打痕が認められる。石材は青灰色を呈し、多孔質である。50は円形で扁平な安山岩系の敲き石である。

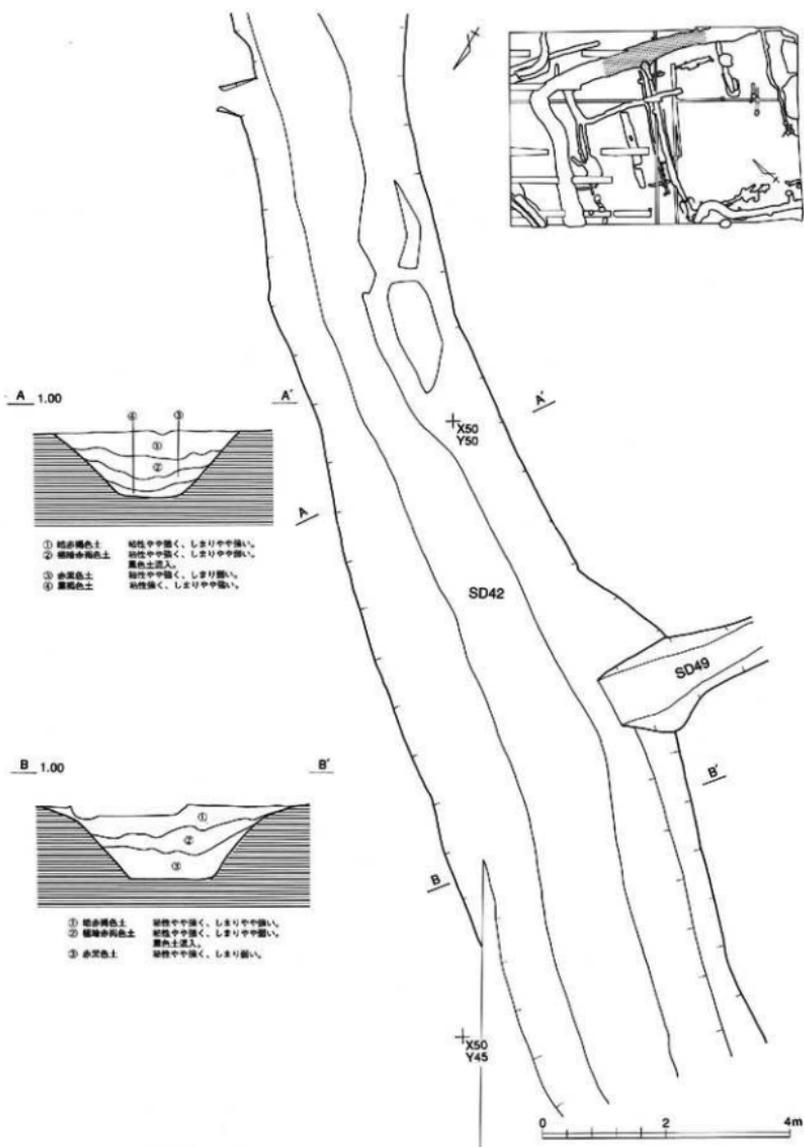
SD43 (第27図51、図版第8の3) 51は縄文時代晩期後半に属する鉢で、沈線は三条引かれ、沈線下には棒状のミガキが入る。

SD44 (第28図52、図版第8の6) 52は鉄製の鋤先で、身との装着溝の深さは3mm程度である。

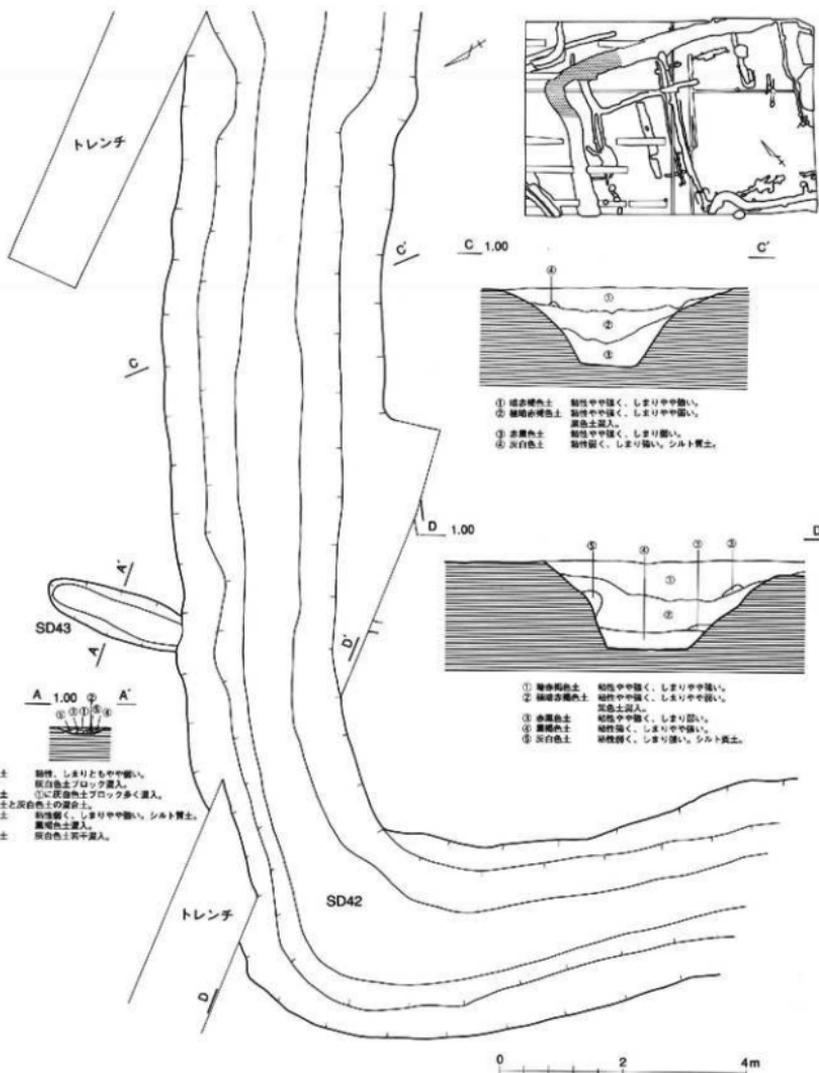
SD45 (第28図53、図版第8の4) 53は珠洲の甕で、口縁は端部を丸く納めた[く]の字状の円頭口縁である。3cm当たりの叩き条数は9条を数え、色調は青灰色を呈する。帰属年代は珠洲編年のⅢ期と思われる。

SD49 (第28図54、図版第8の5) 54は珠洲の甕で、口縁はほぼ水平に挽き出した先端を揃り状に仕上げる。色調は青灰色を呈し、帰属年代は珠洲編年のⅠ期と思われる。

SD51 (第28～30図55～77、図版第8の7・9の1・13の4) 55・56は縄文時代中期後半以降の深鉢で、55は単節のR L縄文を斜・横に施す。57～60は弥生時代後期後半の土器で、57は壺、58～60は高杯である。57は有段口縁を持ち、口縁部内外面に横ナデ調整、外面体外面にハケ目調整、内面にヘラケズリが施される。58は長く外反して伸びる

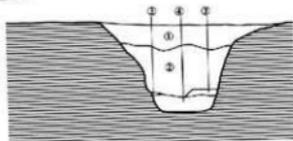


第 17 図 SD42遺構図 (1/80)



第18図 SD42・43遺構図(1/80)

E_ 1.00



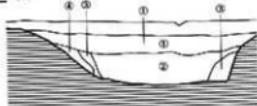
- ① 雑草腐成土 粘性やや強く、しまりやや強い。
 ② 雑草腐成土 粘性やや強く、しまりやや強い。
 ③ 灰白土 粘性弱く、しまり強い。シルト質土。
 ④ 灰褐色土 粘性弱く、しまりやや強い。

F_ 1.00

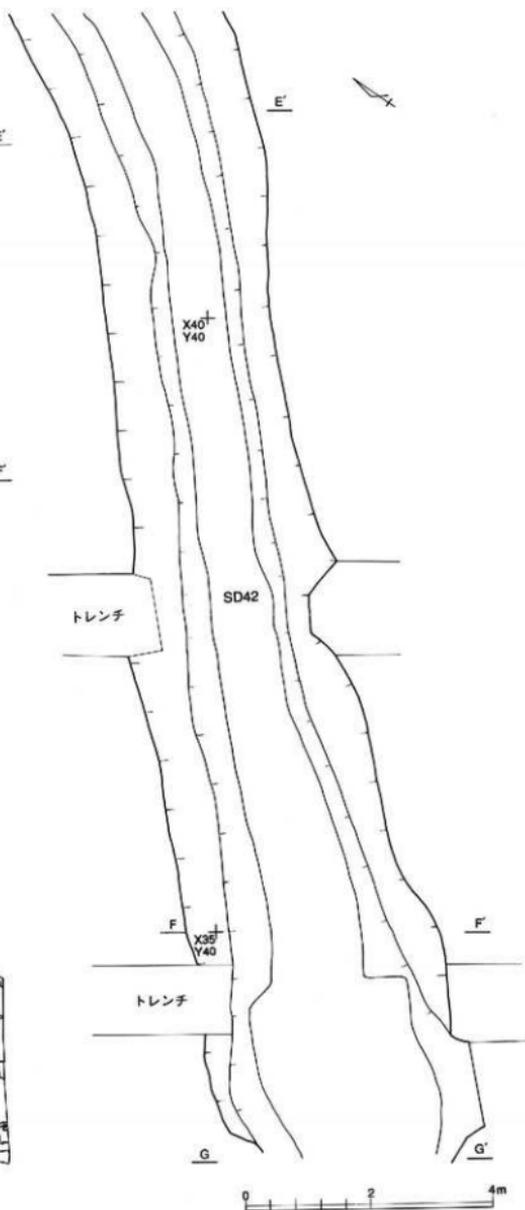
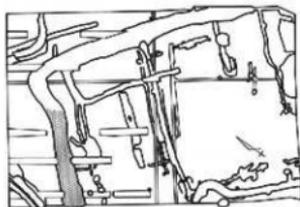


- ① 雑草腐成土 粘性やや強く、しまりやや強い。
 ② 雑草腐成土 粘性やや強く、しまりやや強い。
 灰色土混入。

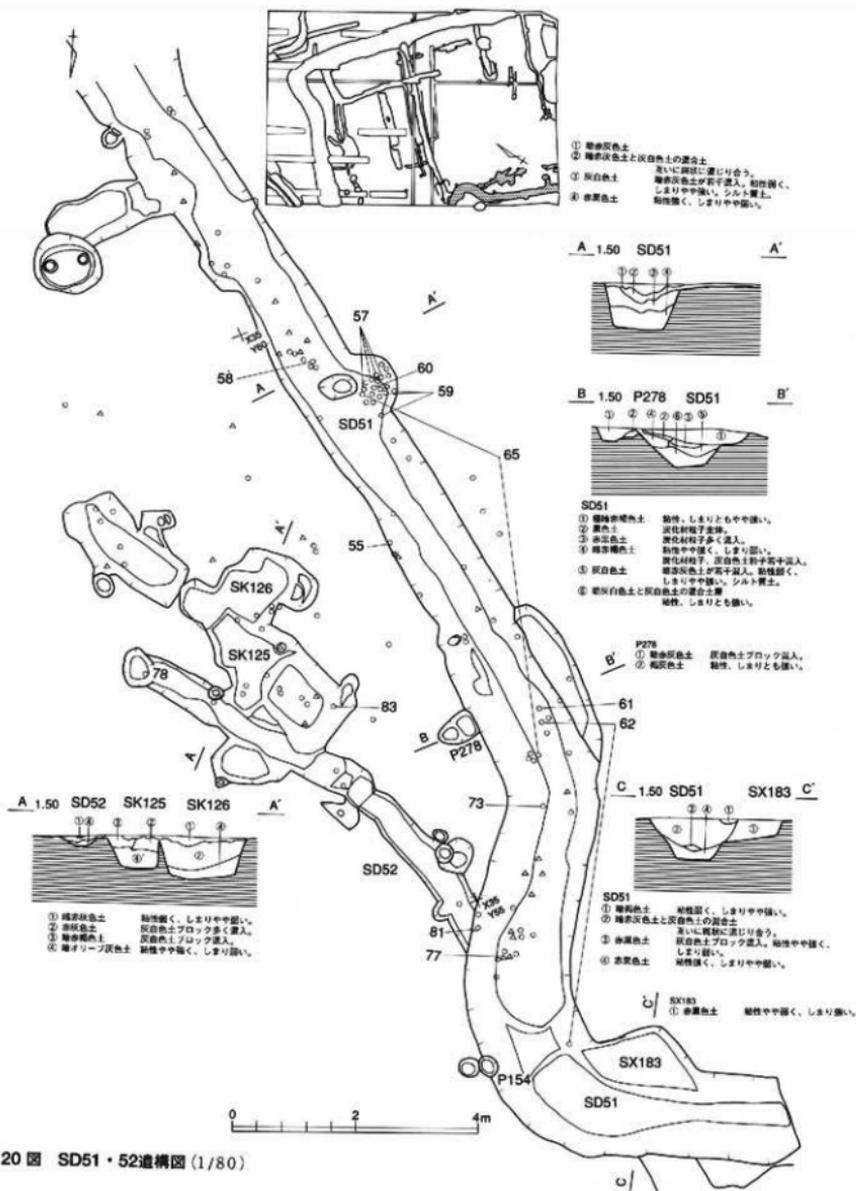
G_ 1.00



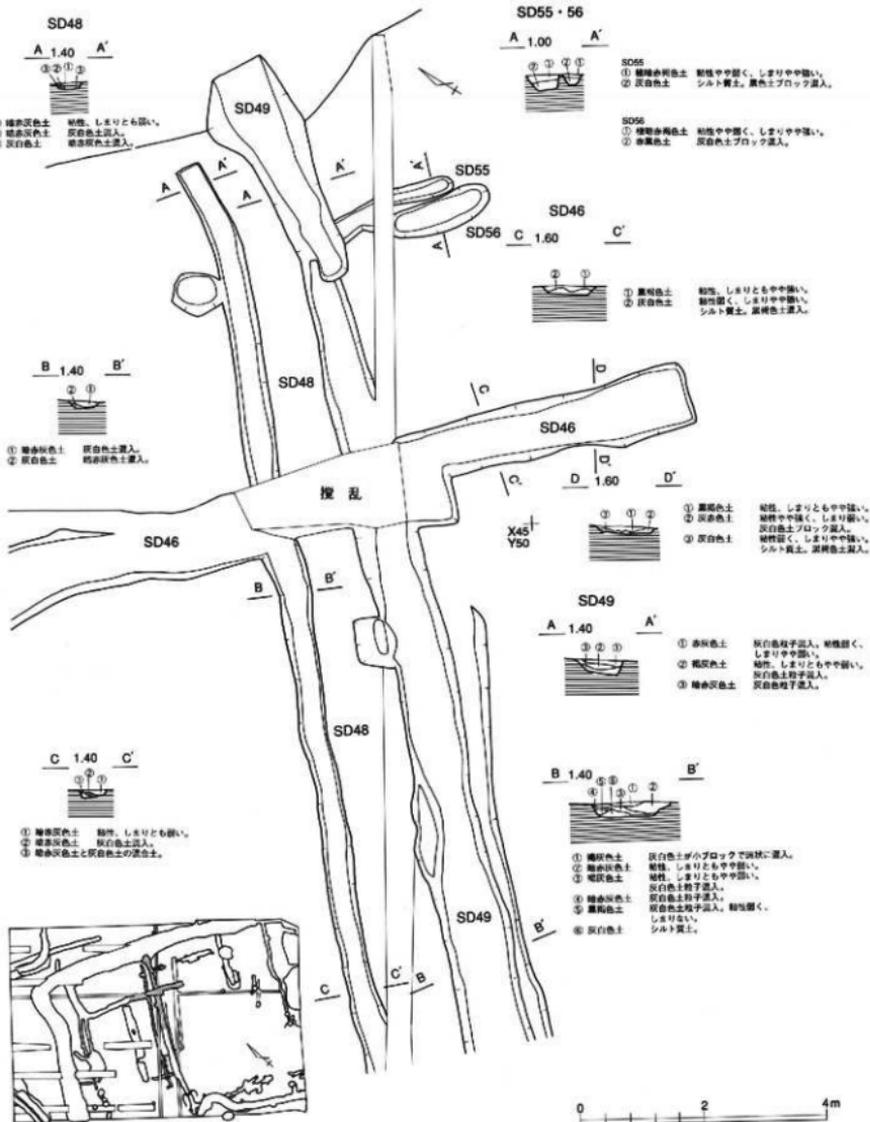
- ① 雑草腐成土 粘性やや強く、しまりやや強い。
 ② 雑草腐成土 粘性やや強く、しまりやや強い。
 ③ 灰褐色土 粘性弱く、しまりやや強い。
 ④ 灰白土 粘性弱く、しまり強い。シルト質土。



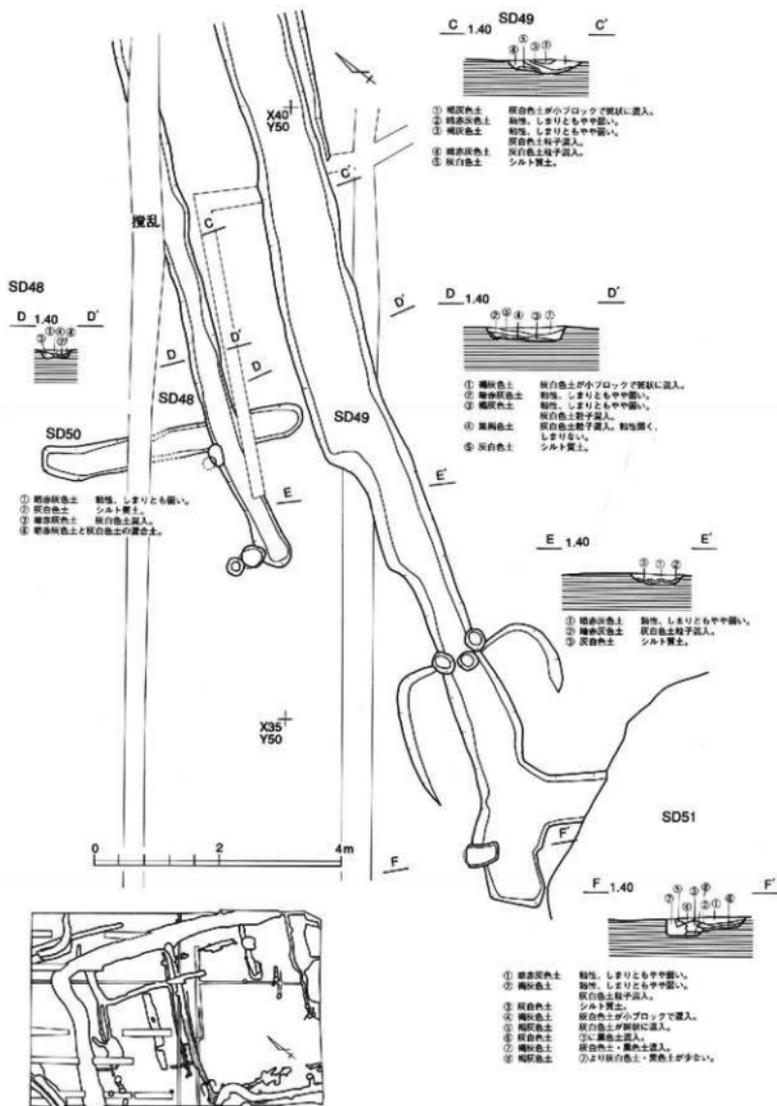
第19図 SD42遺構図 (1/80)

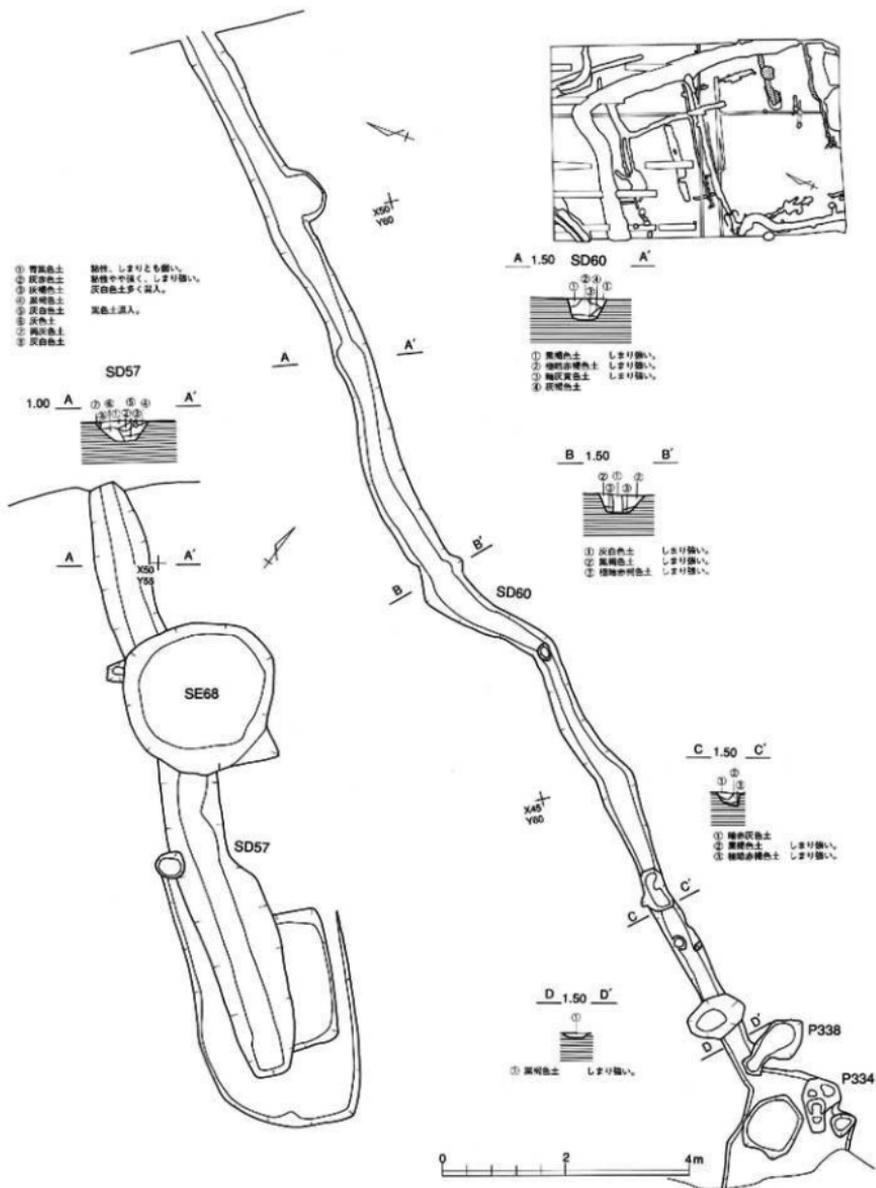


第20図 SD51・52遺構図(1/80)

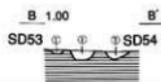
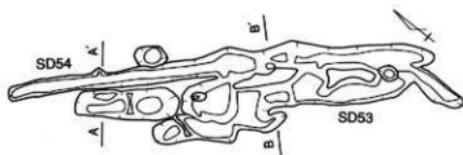


第 21 図 SD46・48・49・55・56遺構図 (1/80)



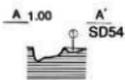


第 23 図 SD57・60遺構図 (1/80)

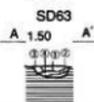
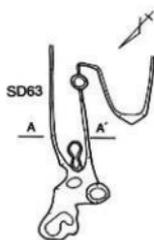


SD53
 ① 黄灰赤土 粘性やや強く、しまりやや強い。
 ② 黄赤土 黄赤土・灰白色土混入。

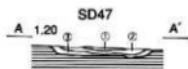
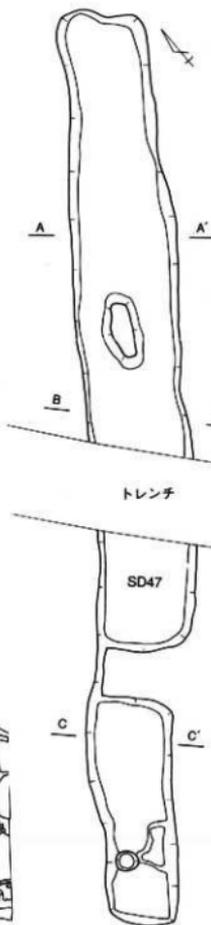
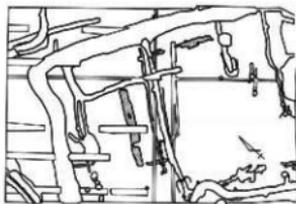
SD54
 ① 灰褐色土 粘性やや強く、しまりやや強い。



① 灰褐色土 粘性やや強く、しまりやや強い。



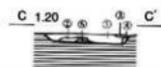
① 灰褐色土 しまりやや強い。
 ② 黄赤土 しまりやや強い。
 ③ 赤褐色土 しまりやや強い。
 ④ 黄赤土 しまりやや強い。



① 赤褐色土 粘性やや強く、しまりやや強い。
 ② 黄赤土 粘性やや強く、しまりやや強い。
 ③ 黄赤土 粘性、しまりともやや強い。
 灰白色シルト質土ブロック混入。



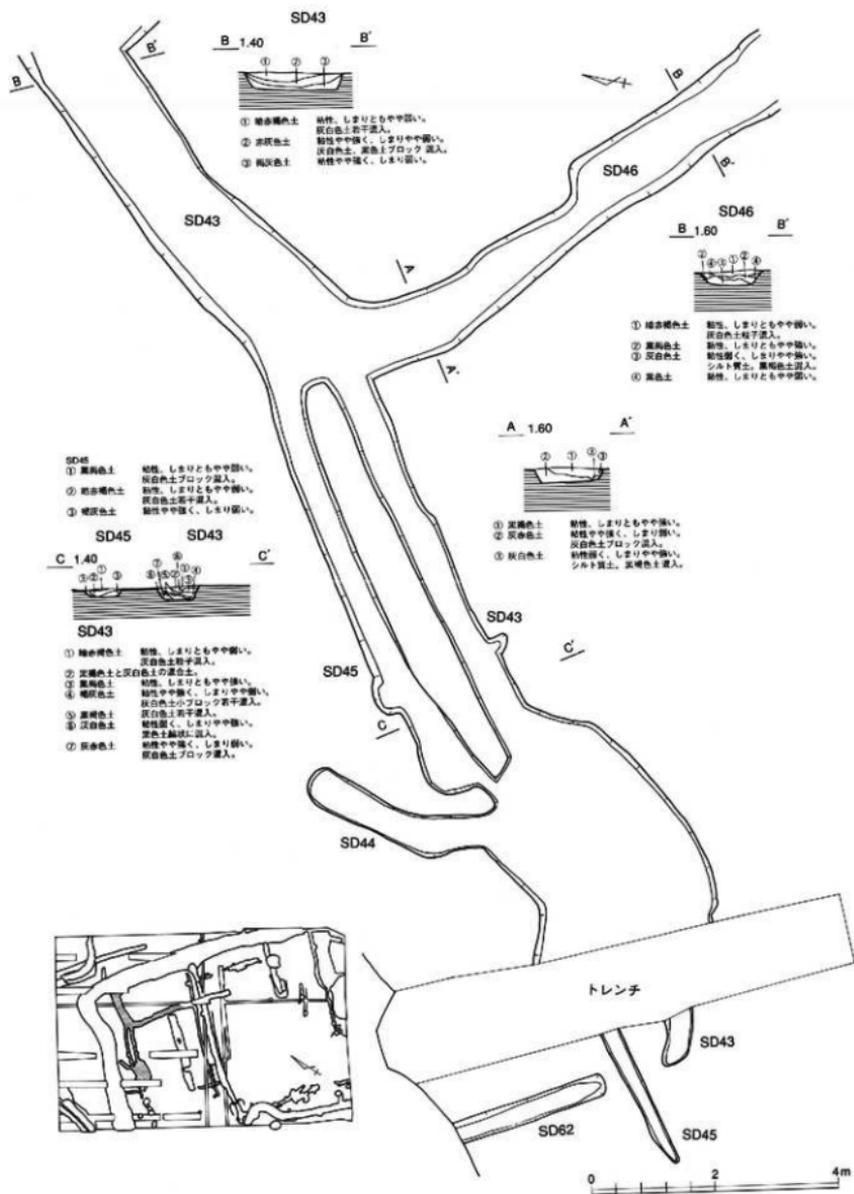
① 赤褐色土 粘性やや強く、しまりやや強い。
 ② 黄赤土 粘性、しまりともやや強い。
 灰白色シルト質土ブロック混入。
 ③ 黄赤土と灰白色土の混入。



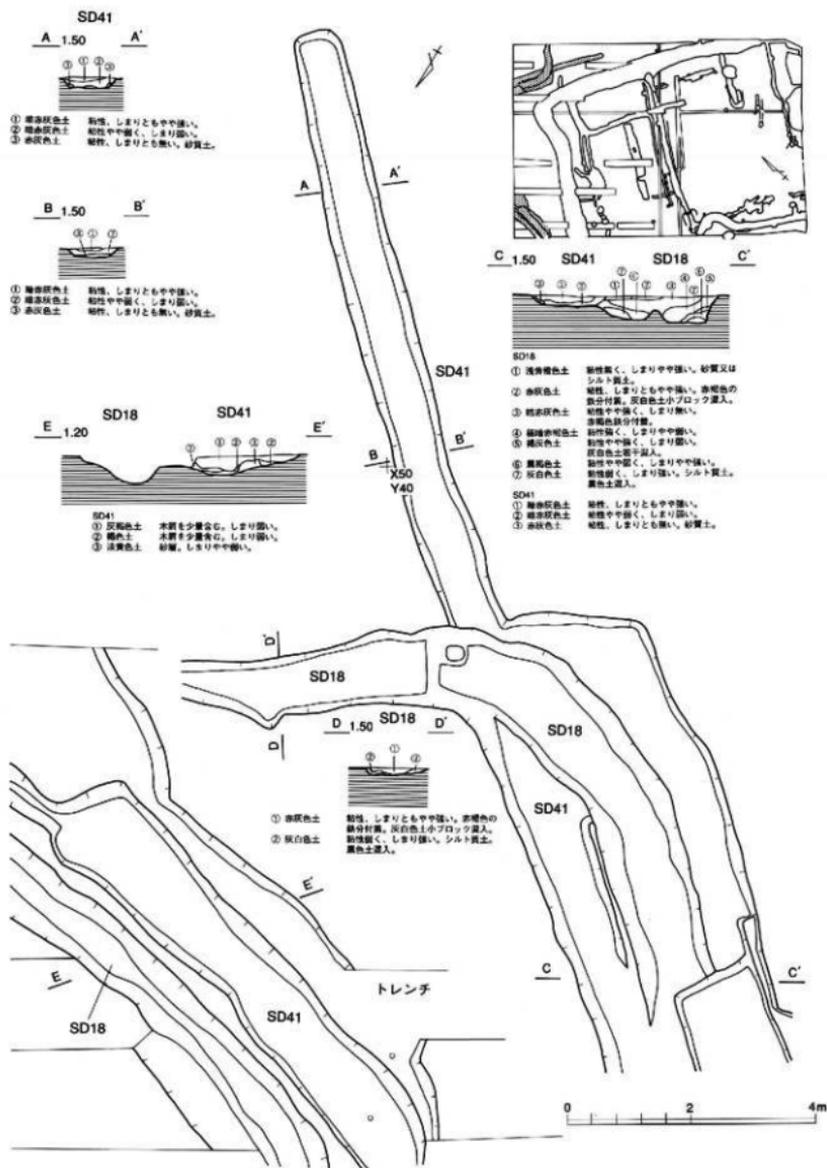
① 黄赤土 粘性やや強く、しまりやや強い。
 ② 黄赤土 粘性、しまりともやや強い。
 灰白色シルト質土ブロック混入。
 ③ 赤褐色土 粘性やや強く、しまりやや強い。
 ④ 黄赤土と灰白色土の混入。



第 24 図 SD47・53・54・63遺構図 (1/80)



第 25 図 SD43~46・62遺構図(1/80)



第26図 SD18・41遺構図(1/80)

SD41



36

SD42



37



38



39



40



41



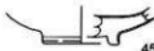
42



43



44



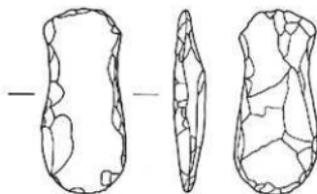
45



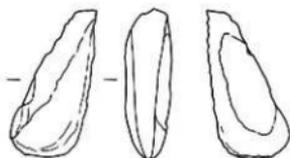
46



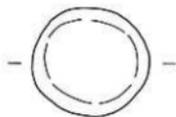
47



48



49

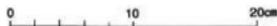


50

SD43

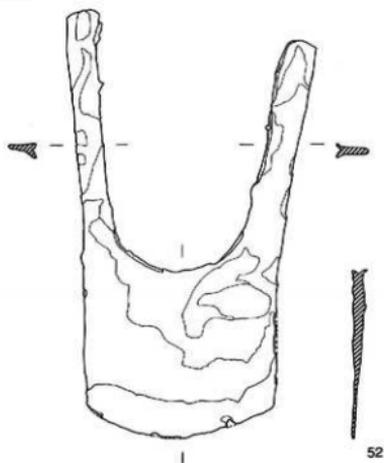


51



第 27 图 SD41~43 出土遺物 (1/4)

SD44



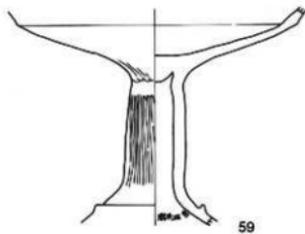
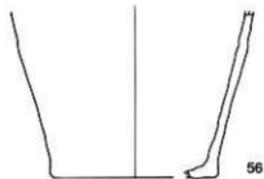
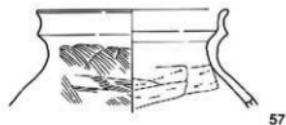
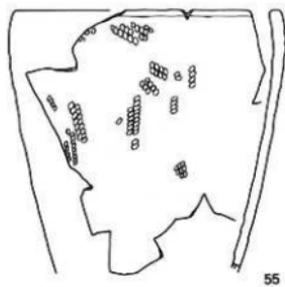
SD45



SD49



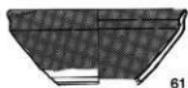
SD51



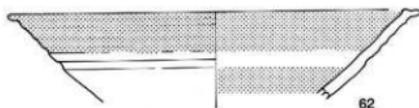
0 10 20cm

第 28 图 SD44・45・49・51出土遺物(1/4)

SD51



61



62



63



64



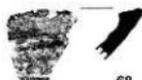
65



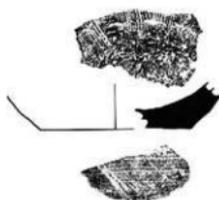
66



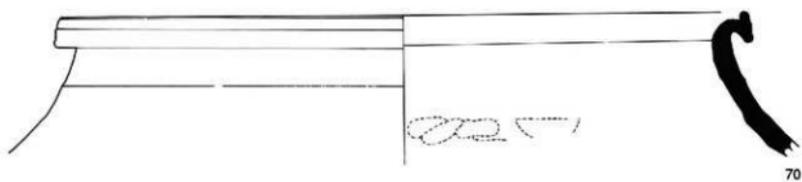
67



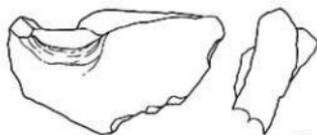
68



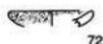
69



70



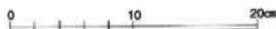
71



72

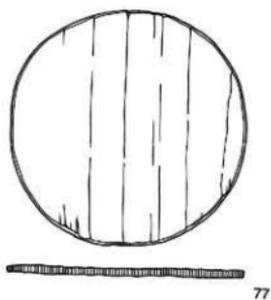
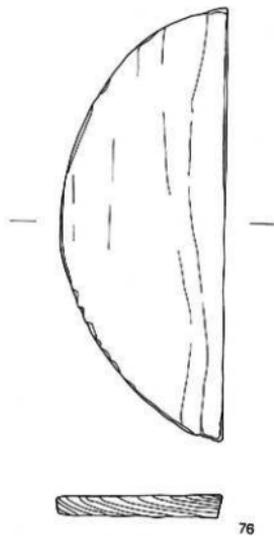
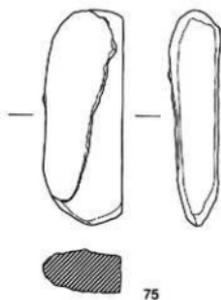
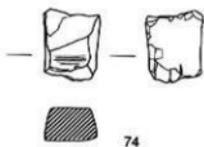


73

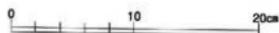


第29図 SD51 出土遺物 (1/4)

SD51

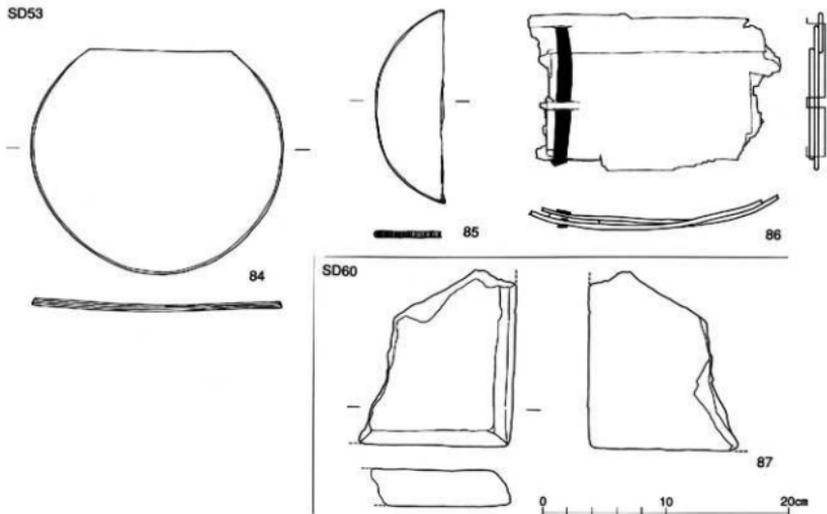


SD52



第30图 SD51・52 出土遺物 (1/4、76は1/2)

SD53

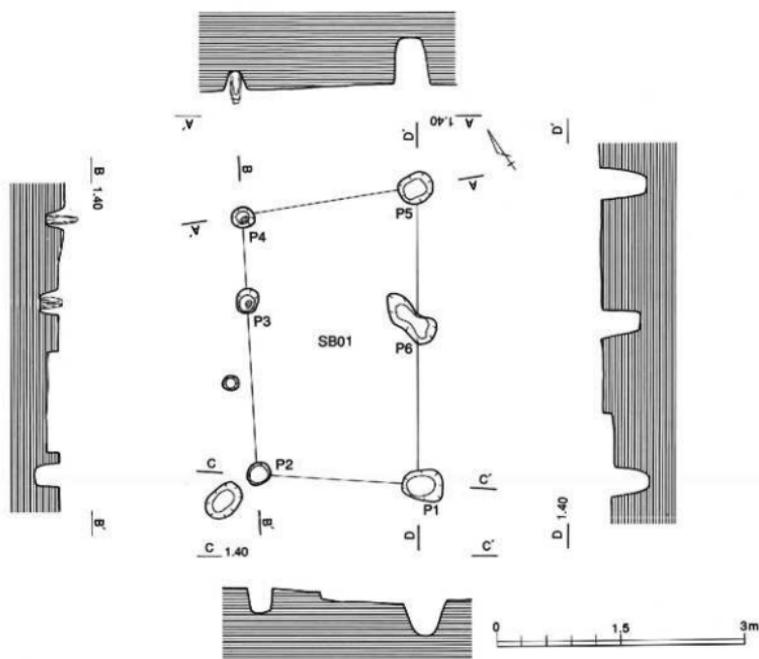


第31図 SD53・60 出土遺物 (1/4、85は1/6、86は1/2)

杯部で、内外面に棒状具によるヘラミガキ、赤彩が施される。59は棒状有段の脚部に有段の杯部を持ち、柱上部にはヘラミガキが施される。60は裾部が大きく開く脚部で、端部は小さく段を形成し先細る。61は15世紀末～16世紀前半代の天目茶碗であり、体部は直線的に立ち上がり、口縁部はくびれる。軸は茶褐色を基調とし、底部周辺は錆軸が施される。62～64は瀬戸・美濃の灰軸三足盤で、15世紀前半の所産である。軸はオーブ色を呈し、体部上半の内外面に薄く掛けられる。65～69は珠洲で、65は壺、66は甕、67～69は摺鉢である。65は細密な叩きが施され、手に持った感覚が軽い。66は短い口縁部が〔く〕の字状に外反し、端部は丸くおさめる。67は水平口縁で、端面外側を軽く面取る。68は肥厚した三角頭の内傾口縁端面に、櫛目波状紋体を加飾する。69は卸し目の原体幅は2cmを測り、条数は9条を数える。底部の切り離しは静止糸切りである。昇属年代は68が珠洲V期に比定される。70は14世紀代の加賀焼の壺であり、口縁形状はN字状を呈する。色調は灰色を呈し、器面には火彫れ状の亀裂が幾つも認められる。71は角礫岩の片口の鉢であり、角ばった礫が集合して固まった石材は非常に重い。72・73は非ロクロ系の土師質皿で、口縁内外面に油煙痕が付着し、色調は灰褐色を呈する。72は厚手の作りで、口径は6.9cmを測り、内面に横方向のナデを施す。73は体部と底部の境が不明瞭で、口縁端部は先細る。口径は10cmを測り、内面に一段の横方向のナデを施す。74は粘板岩系の四面を利用した砥石で、面には不定方向の擦痕をとどめる。75は重量950gを量る磨り石である。76・77は曲物箱の底板・蓋板である。木取りは76が板目、77は柾目である。

SD52 (第30図78～83、図版第9の1) 78は15世紀後半の天目碗であり、黒褐色を呈する鉄軸は薄く掛けられ、軸むらが著しい。79は15世紀前半の灰軸の卸し皿であり、口縁部内外面にオリブ色を呈する軸が薄く掛けられる。80は珠洲の壺R種であり、口縁形態が壺と同工である。81～83はロクロ使用の土師質皿で、81・82は口縁内外面に油煙痕が付着し、色調は赤褐色を呈する。81は底部を高台風に仕上げ、体部は直進し、口径7.5cm・底径4cmを測る。82は口縁部が肥厚し、口径7.5cm・底径4.5cmを測る。83は口縁部に強い横ナデ調整を施し、口径8.3cm・底径5cmを測り、焼きはあまい。

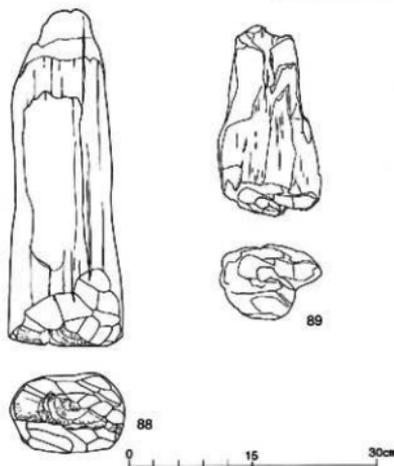
SD53 (第31図84～86、図版第14の1) 84・85は蓋板である。木取りは84が板目、85は柾目である。86は曲物の重ね部分であり、結合法は一列2段の榫綴じである。



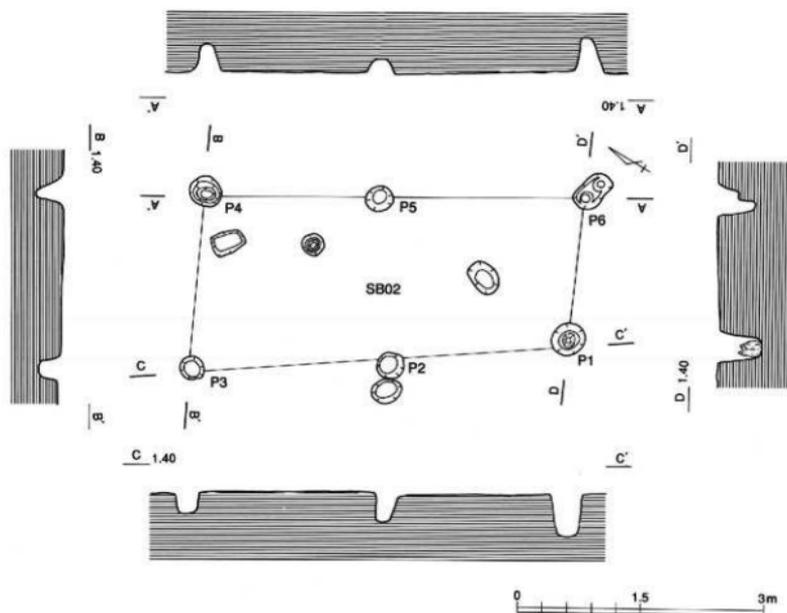
SD60 (第31図87、図版第9の3) 87は用途不明の瓦質陶器で、色調は黒色、胎土は暗灰色を呈し、現重量は600gを量る。

SB01 (第32図) X34~36Y46~48区に位置している。主軸を北東方向にとる南北棟の建物で、桁行2間・梁行1間の平面規格を持つ。桁・梁とも対応する各辺の寸法が一致せず、全体的には東辺の長い略台形状となっている。規模は桁行が全長3.2~3.6m(東辺1.7m・1.9m、西辺2.1m・1.1m間隔)梁行が全長1.9~2.1m(南辺1.9m、北辺2.1m間隔)を測る。掘り方は東辺中央部のも1本が弧状になるほかは円形となり、直径0.26~0.76m・深さ0.2~0.6mを測る。

遺物(第32図88・89、図版第14の2) 88はP3に遺存する柱根で、現存長24cm・根もとの太さ12cmを測り、側面にV字状の腐食痕をとどめる。底面は手斧によって整形され、手斧の刃幅は約4cmを測る。89はP4に遺存する柱根



第32図 SB01構構図(1/60)、出土遺物(1/6)



90

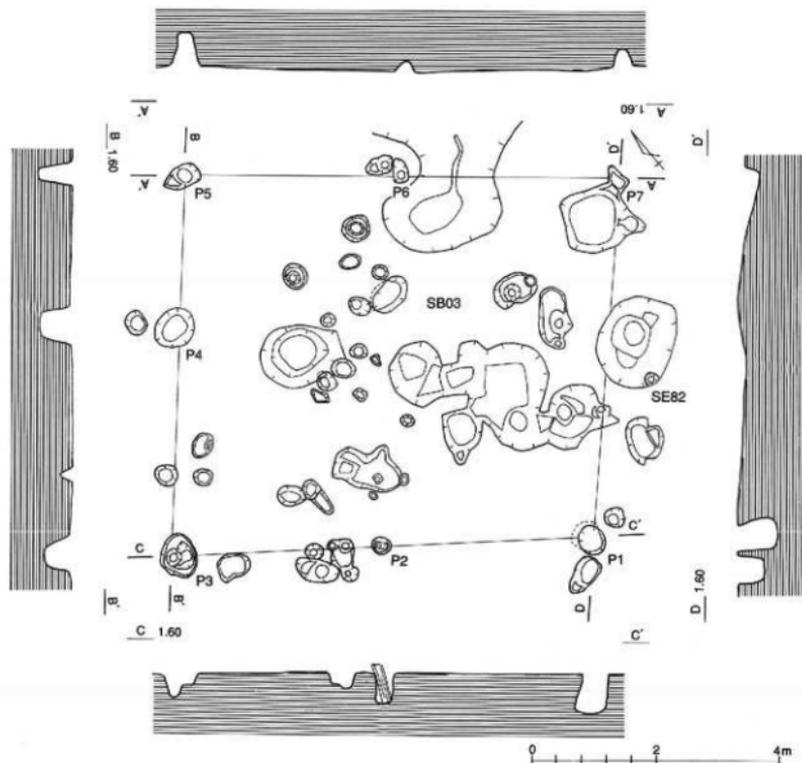
で、現存長42cm・根もとの太さ12cmを測り、側面を部分的に面取る。底面は手斧によって整形し、手斧の刃幅は約4cmを測る。

SB02 (第33図) X35・36Y52~55区に位置している。主軸を北西方向にとる南北棟の建物で、桁行2間・梁行1間の平面規格をもつ。桁は対応する2辺の長さは等しいが、梁は対応する2辺の寸法が約0.4mずれている。全体的には略長方形状となっている。規模は桁行が全長4.5m(東辺2.1m・2.4m、西辺2.1m・2.4m間隔)梁行が全長1.8~2.2m(南辺1.8m、北辺2.2m間隔)を測る。掘り方は南東隅の1本が長円形となり規模も大きいのが、残り5本は円形で直径0.32~0.4m・深さ0.3~0.5mを測る。

遺物(第33図90) 90はP1に遺存する柱根で、現存長30cm・根もとの太さ21cmを測る。底面は手斧によって整形され、腐食が著しい。



第33図 SB02遺構図(1/60)、出土遺物(1/6)

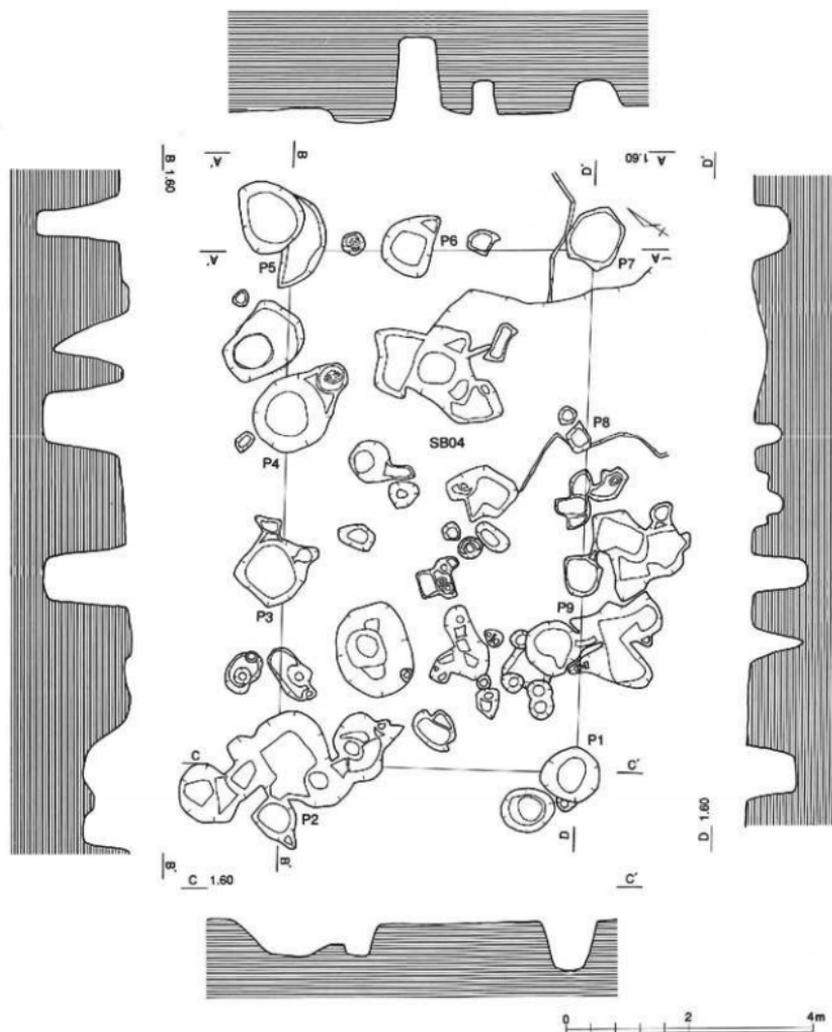


第34図 SB03遺構図(1/80)

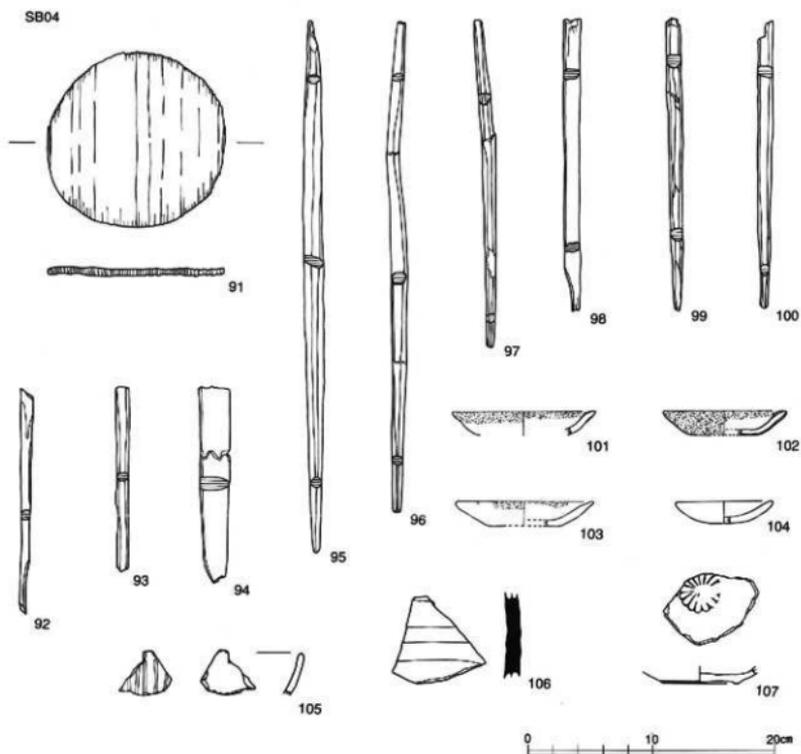
SB03 (第34図) X36~40Y54~58区に位置している。SB04と重複しているが、両者の前後関係ははっきりしていない。SE82により柱穴1本が削られたものと思われる。主軸を北西方向にとる東西棟の建物で、桁行2間・梁行2間と規模が大きい。桁・梁とも各辺の寸法は一致せず、全体的には東辺が短い方形となっている。規模は桁行が全長6.7~7.0m(南辺3.3m・3.4m、北辺3.5m・3.5m間隔)梁行が全長5.9~6.2m(東辺2.6m・3.3m、西辺3.7m・2.5m間隔)を測る。掘り方は北東隅の1本が方形で規模も大きい。また、桁行中央にある掘り方は円形で細い。このあり方は南北両辺とも同様である。直径は0.42~0.74m・深さ0.2~0.6mを測る。柱根の確認されたものはP2のみで、直径は22cmである。

SB04 (第35図) X37~42Y57~61区に位置している。SB03・SB05と重複しているが、3者の前後関係は明確ではない。各棟の配置状況からみれば、SB03とSB05の共存は可能性があるが、本SB04と他の2棟との共存は無理であることになる。主軸を東方向にとる東西棟の建物で、桁行3間・梁行2間と大規模である。平面規格上では桁・梁とも対応する2辺の寸法が一致していて、完全な長方形となっている。規模は桁行が全長8.5m(南辺3.1m・2.2m・3.2m、北辺3.2m・2.6m・2.7m間隔)梁行が全長4.8m(東辺1.8m・3.0m、西辺4.8m間隔)を測る。本来は梁行西辺の中央部に掘り方があるはずであるが、注意して調査したにもかかわらず確認できなかった。掘り方は北辺の3本の

規模が大きく、残りの6本は細い。直径は0.62~1.2m・深さは0.4~1.3mを測る。柱根の確認されたものはない。

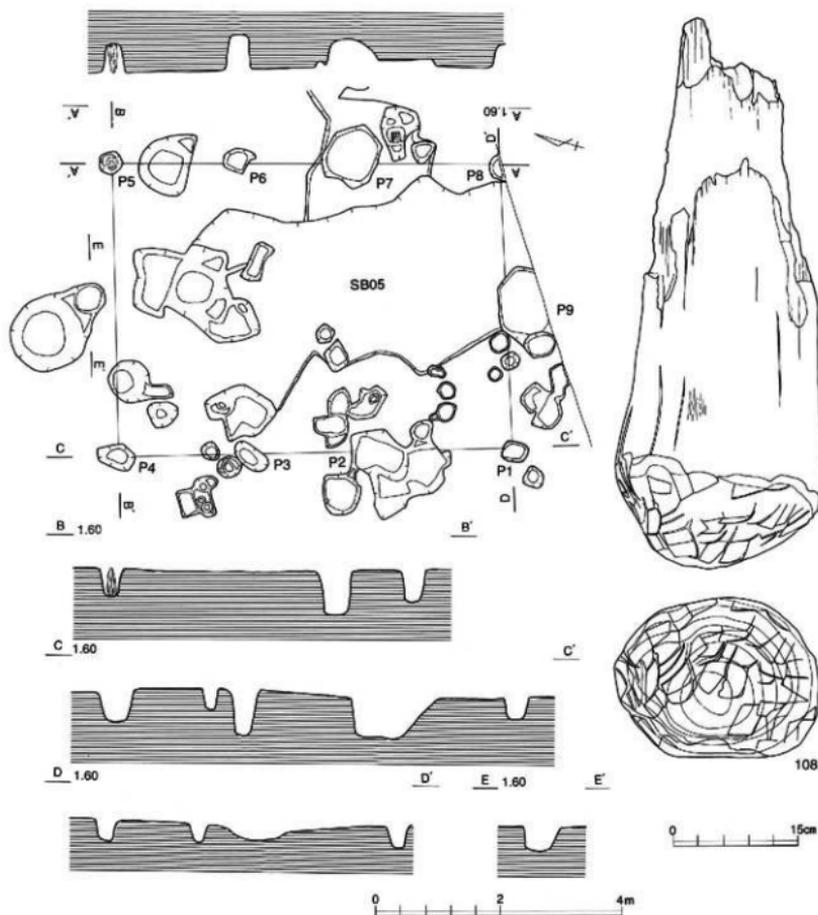


第35図 SB04遺構図(1/80)



第 36 図 SB04出土遺物 (1/4)

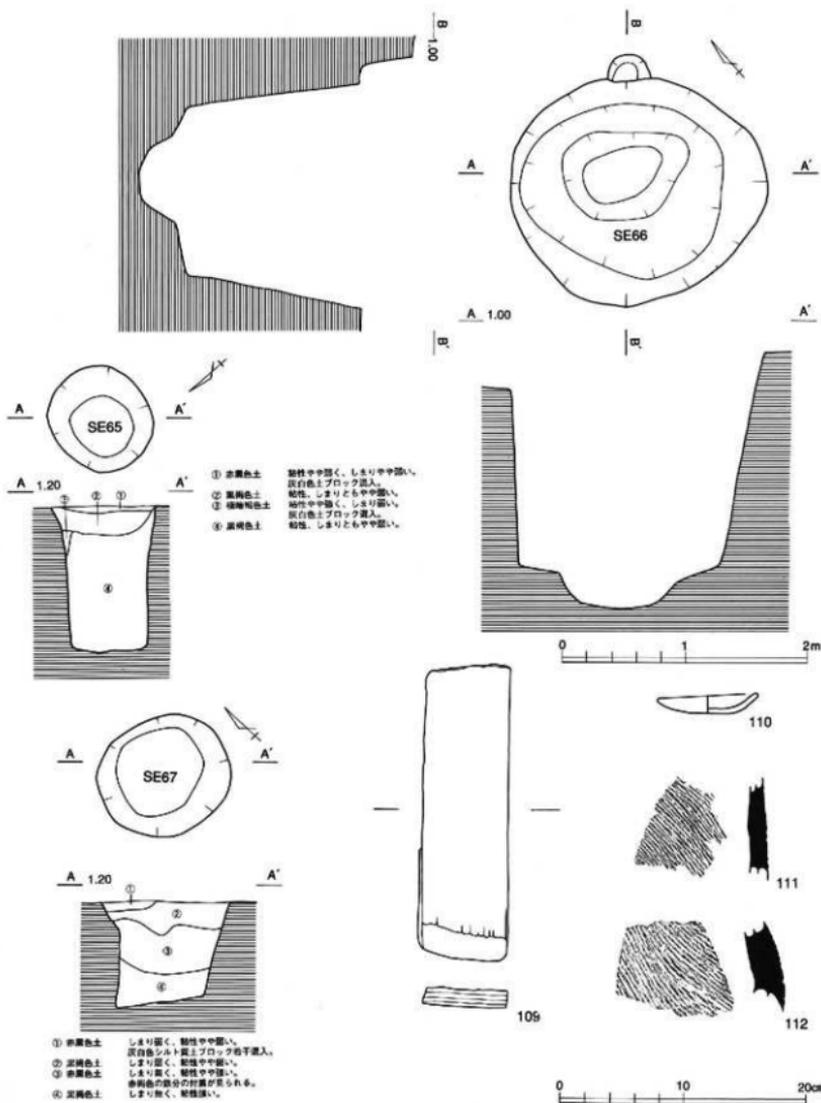
遺物(第36図91~107、図版第9の4・14の3) 91はP1より出土した蓋板で、木取りは柃目である。92~100はP5より出土した箸状の木製品で、いずれも粗雑に工作され本と末の区別はなく、規模はばらつく。101~104はP2より出土した土師質の皿で、101~103はロクロ系、104は非ロクロ系である。101・102は口縁部の内外面に油煙痕が付着し、その上に灰白色の顔料がのる。口縁は弱く外傾し、端部はやや先細る。103は口縁部内外面に横ナア調整をくわえる。104は厚手の作りで、底部と体部の境は不明瞭。105は16世紀代の灰釉の碗であり、外側面に線びきが施される。釉はオリーブ色を呈し、内外面に細かな貫入が入る。106は珠洲の密R種の体部片と思われる。107は16世紀前半の端反りの皿であり、見込みに菊花紋がスタンプされる。釉は洗みのあるオリーブ色を呈し、盪付けを除き薄く掛けられ、見込みに貫入が入る。



第37図 SB05遺構図(1/80)、出土遺物(1/6)

SB05(第37図) X39~42Y58~62区に位置する。SB04と重複しているが前後関係は不明である。主軸を北西方向にとる南北棟の建物で、桁行3間・梁行2間の平面規格をもつ。桁・梁とも対応する各辺の寸法は一致しないが、その差は0.1~0.2mと僅かであり、ほぼ完全な長方形形状となっている。規模は桁行が全長6.2~6.3m(東辺2.2m・2.1m・2.0m、西辺2.2m・2.0m・2.0m間隔)梁行が全長4.6~4.8m(南辺2.3m・2.3m、北辺4.8m間隔)を測る。北側梁行の中央部に掘り方は確認できず、SB04と同様な柱穴配置を示す。掘り方は直径0.4~0.96m・深さ0.4~0.7mを測る。

遺物(第37図108、図版第14の4) 108はP5に遺存する柱根で、現存長69cm・根もとの太さ24cmを測る。底面は手斧によって整形され、半球形に仕上げられる。手斧の刃幅は3cm前後である。



第38図 SE65~67遺構図(1/40)、SE66出土遺物(1/4)

SE65 (第38図) X34Y42区に位置する円筒形の素掘り井戸であり、開口部径0.8m・底部径0.6m・基底標高-0.3mを測る。埋土は4層に分かれる人為堆積で、出土遺物はなかった。

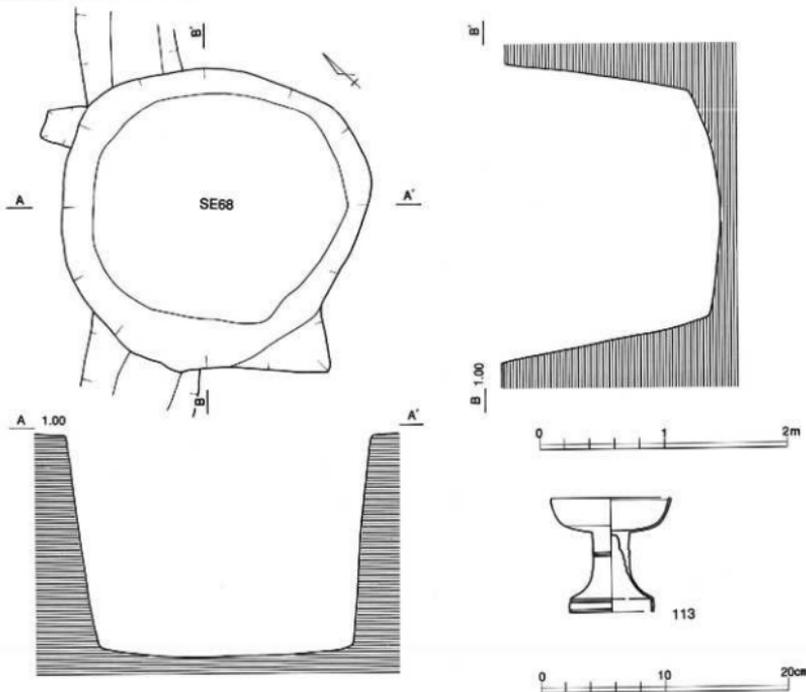
SE66 (第38図) X33Y55区に位置する円筒形の素掘り井戸であり、基底部中央の掘り込みは、水溜めの曲物桶を埋置した掘り方の可能性が高い。基底標高は-1.35mを測り、遺物は木製品・土師質皿・珠洲が出土する。

遺物 (第38図109~112、図版第10の1・14の5) 109は結桶の割板の一部であり、長さ12cm・幅3.5cm・厚さ6mmを測る。110は土師質皿で、底部と体部の境は不明瞭。口径は8cmを測り、色調は灰白色を呈し、焼きはあまい。111・112は珠洲の壺もしくは甕で、3cm当たりの叩き条数は111が10条、112は9条を数える。

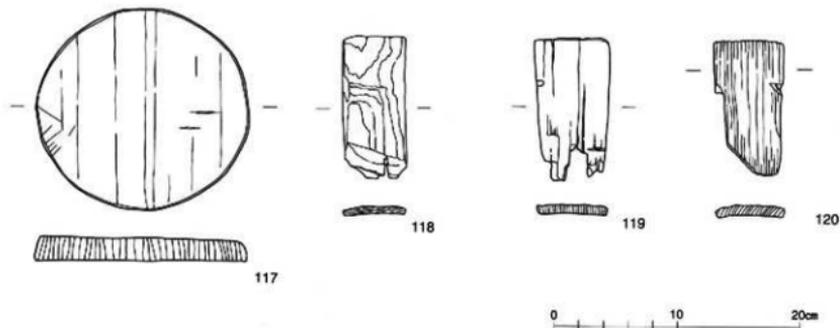
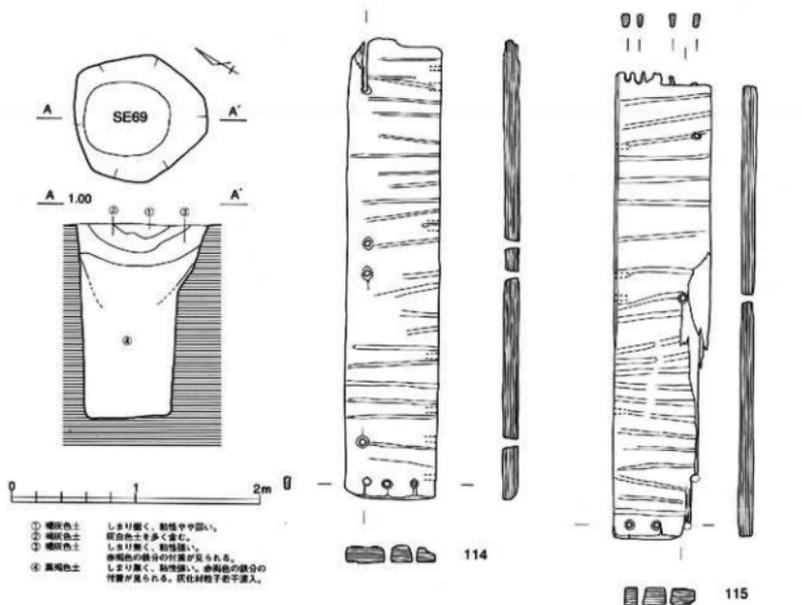
SE67 (第38図) X45Y54区に位置する素掘りの井戸であり、開口部径1.0m・底部径0.7m・基底標高0.25mを測る。埋土は4層に分かれる人為堆積で、出土遺物はなかった。

SE68 (第39図、図版第5の2) X48Y55区に位置する素掘りの井戸であり、開口部径2.45m・底部径2.0m・基底標高0.95mを測る。SD57と重複しているが新田関係は不明。遺物は仏具一点が出土。

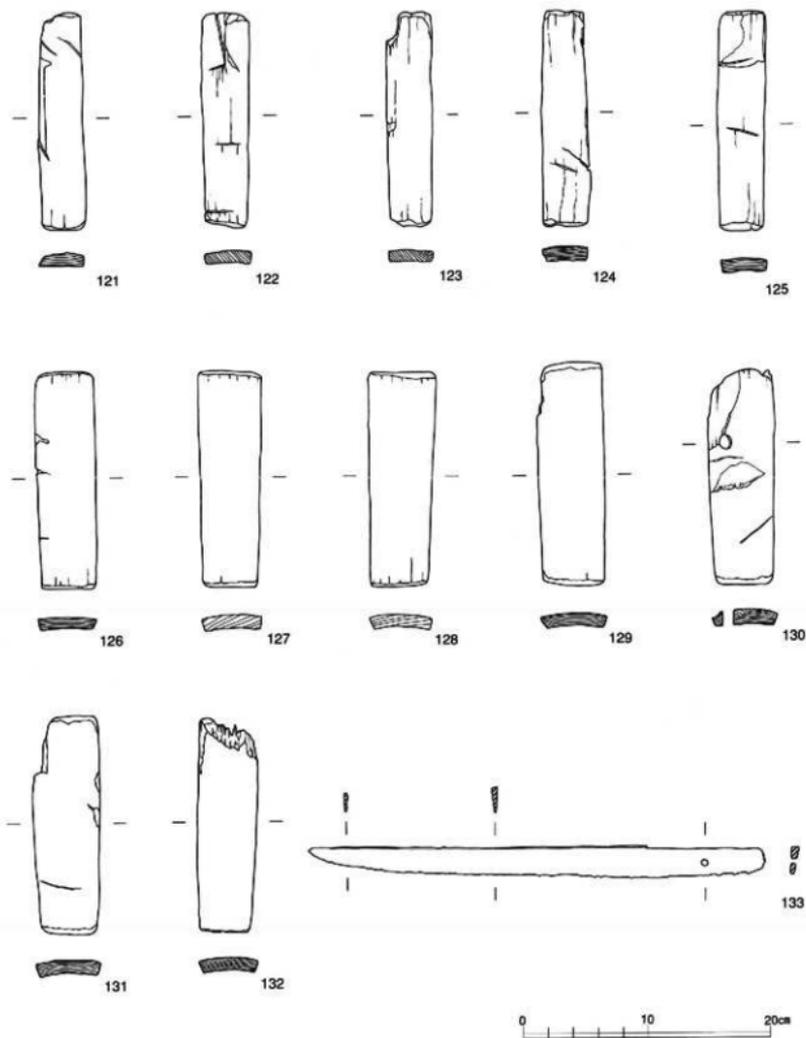
遺物 (第39図113、図版第10の2) 113は銅製の仏飯であり、器高9.5cm・口径9.5cm・底径6.5cmを測る。年代は戦国期以降の所産と思われる。



第39図 SE68遺構図(1/40)、出土遺物(1/4)



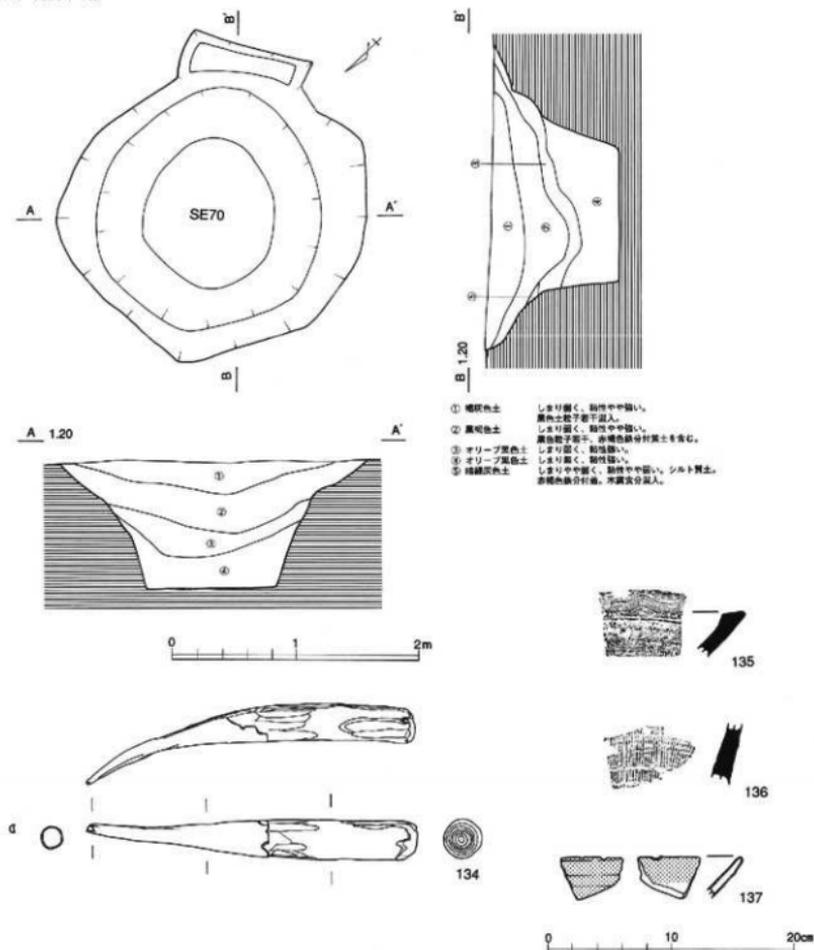
第40図 SE69遺構図(1/40)、出土遺物(1/4、114・115・116は1/2)



第41図 SE69出土遺物(1/4)

SE69(第40図、図版第5の3) X48Y56区に位置する円筒形の素掘り井戸であり、開口部径1.1m・底部径0.7m・底部標高-0.5mを測る。埋土は人為堆積であり、3層と4層の交わりより木製品・小刀が出土する。

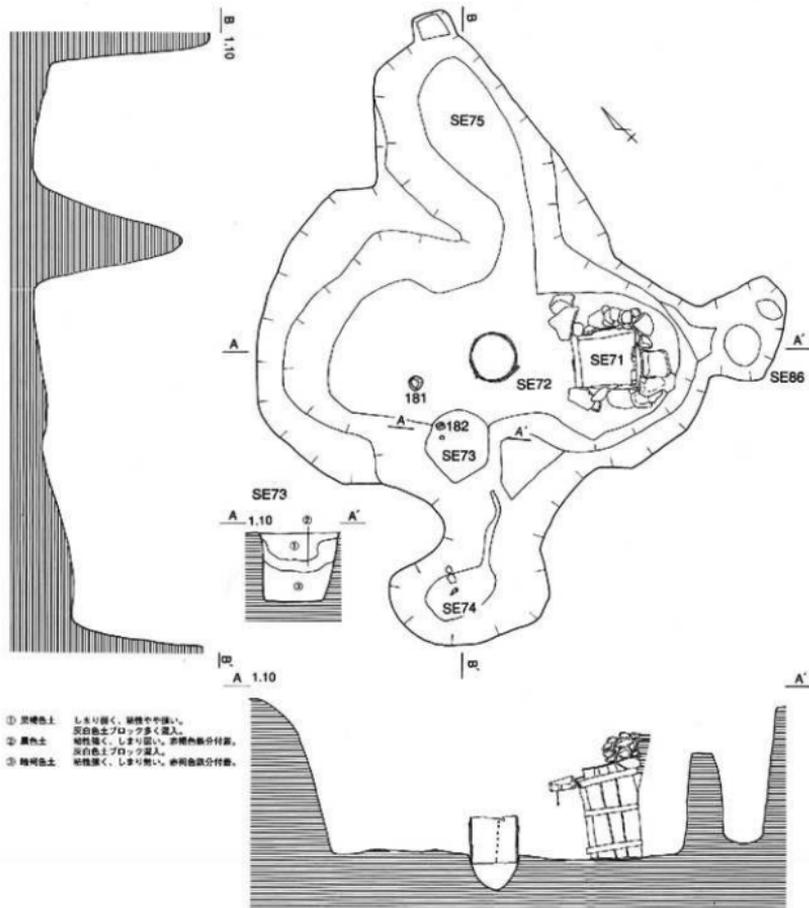
遺物（第40・41図114～133、図版第10の3・14の6・15の1） 114・115は曲物の底板の一部と思われる。平面縦・横に径3mm程の結束孔、側面縦・横に径3mm程の木釘孔を設け、115には木釘が遺存する。器面には平滑に仕上げるための調整痕が認められる。116は歯先を欠損した横櫛で、歯の引き出し位置を決める切通し線は、上縁に平行して曲線を描く。117は結桶の底板で118～132は結桶の側板と考えられる。規模は118～120が長さ12cm・幅5～6cm・厚さ4mm、121～125は長さ19cm・幅3.5cm・厚さ1cm、126～132は長さ18cm・幅4.5～5cm・厚さ1cmを測り、各々が規格制を有する。133は小刀で、全長36cm・棟区26.5cmを測り、刀区と中心の境は不明瞭。中心には文字が刻まれるが、判読不明。



第42図 SE70遺構図(1/40)、出土遺物(1/4)

SE70 (第42図、図版第5の4) X44Y56区に位置する素掘り井戸であり、開口部付近は摺鉢状に掘り込む。規模は、開口部径2.4m・基底部径1.0m・基底標高-0.1mを測り、埋土は5層に分かれる人為堆積である。遺物は3・4層より木工具・珠洲・瀬戸・美濃が出土する。

遺物 (第42図134~137、図版第10の4) 134は鉄身の先端部を欠損した鉋と思われる。柄は心持ち丸木を用い、表皮を剥ぐ程度に加工する。135・136は珠洲の摺鉢である。135は肥厚した口縁に節目波状紋体を加飾し、色調は青灰色を呈する。年代は珠洲V期である。136は卸し目の原体幅は3cmを測り、一帯当たりの叩き条数は14条を数え、色調は灰色を呈する。137は15世紀前半の灰釉の鉢で、釉はくすんだオリーブ色を呈し、粗雑に掛けられる。



第43図 SE71~75・86遺構図 (1/60)

SE71～75・86（第43・44図、図版第5の5～7・6の1～5） X39～42Y55～57区に位置し、6基以上の竪井が行なわれ、併存した井戸もあると考えられる。新旧関係はSE72が最も新しく、他は不明瞭である。

SE71は開口部付近は石組、それ以下は縦板組横棧どめにより構築され、一辺0.8m・基底標高-1.0mを測り、東西辺は概ね磁北に一致する。埋土は人為堆積であり、上部層には木製品、瀬戸・美濃が包蔵されていた。

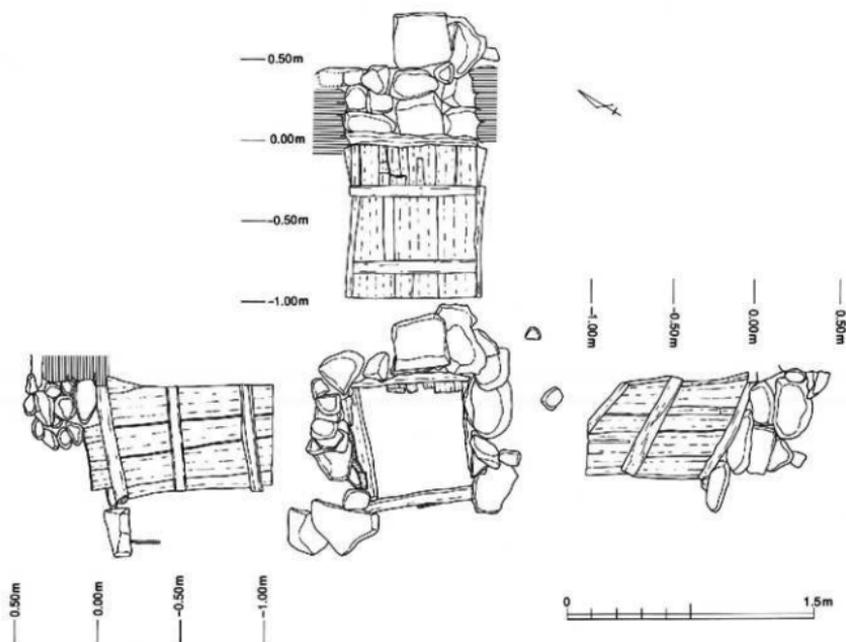
SE72は井戸群の中心的位置に竪井されており、他の井戸はそれを取り巻くように存在する。井戸型式及び規模は不明であり、井戸底には井壁保護を具備した水溜めの曲物が埋置される。

SE73は素掘りの井戸であり、開口部径1.0m・基底部径0.8m・基底標高0.1mを測る。埋土は3層に分かれる人為堆積であり、2・3層より曲物・土師質皿・珠洲が出土した。

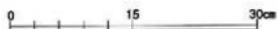
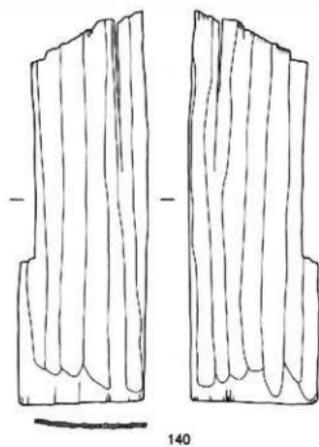
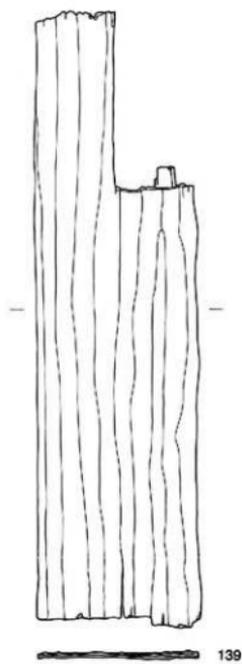
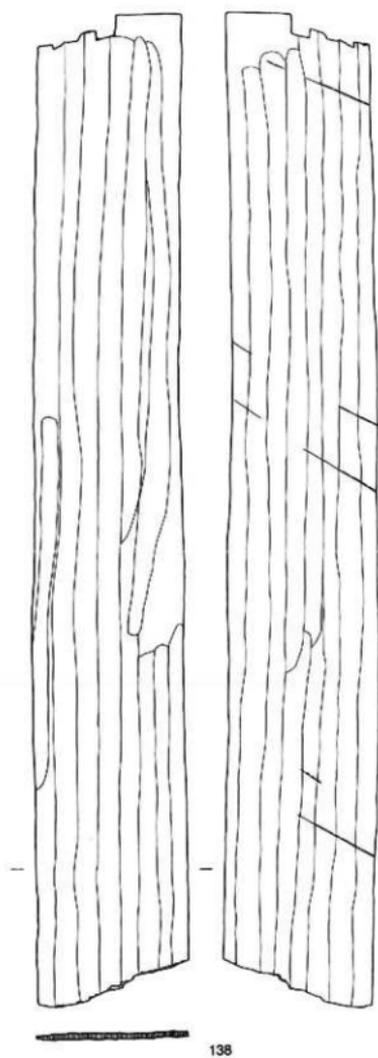
SE74は井戸群の南端に位置する。井戸型式は不明瞭であるが、開口部・基底部の平面形が方形を基調としていることより、SE71に近似した地下壁面の施設（井戸側）が存在した可能性があろう。遺物は珠洲・砥石が出土した。

SE75は井戸群の北端に位置する。平面形は不整楕円を呈し、南端部の掘り方はSE72に連絡する。井戸型式は不明であり、南北の基底部径1.6mを測る。遺物は木製品・珠洲が出土した。

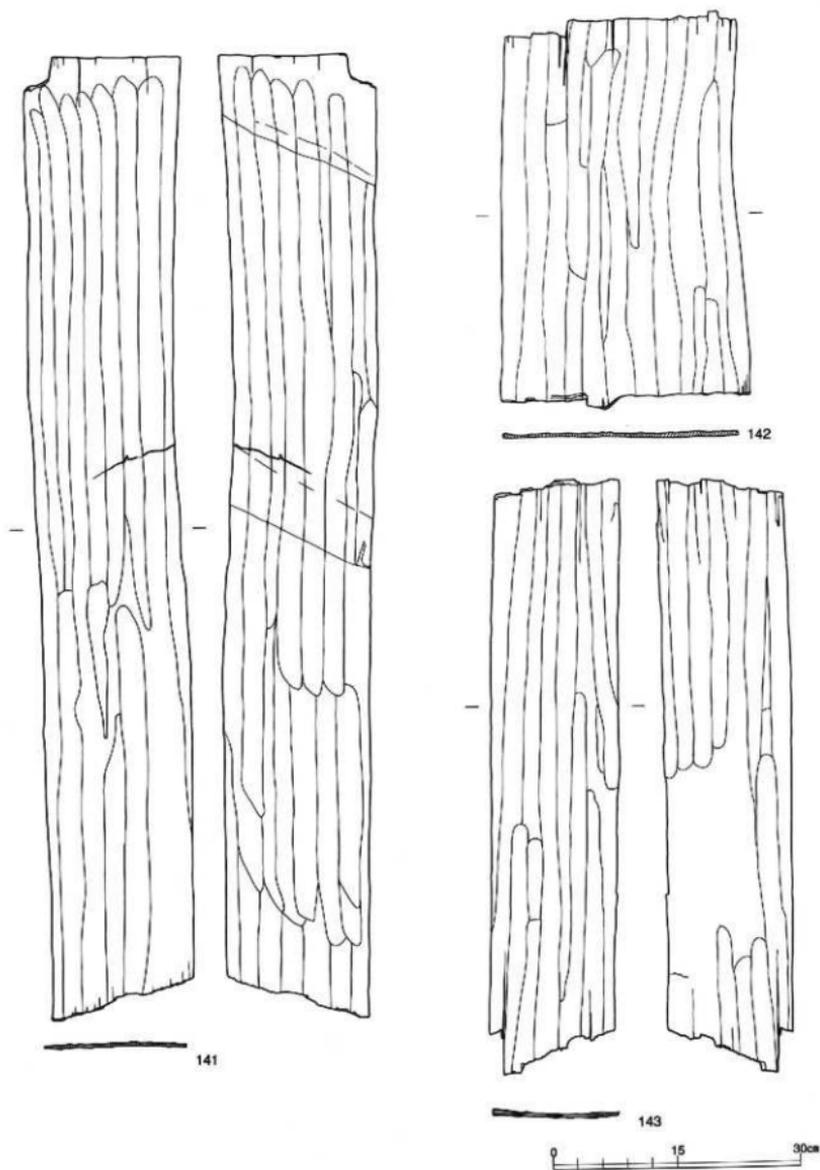
SE86は円筒形の素掘り井戸であり、基底部径1.0m・基底標高-0.8mを測る。遺物は珠洲が出土した。



第44図 SE71井戸側展開図(1/30)



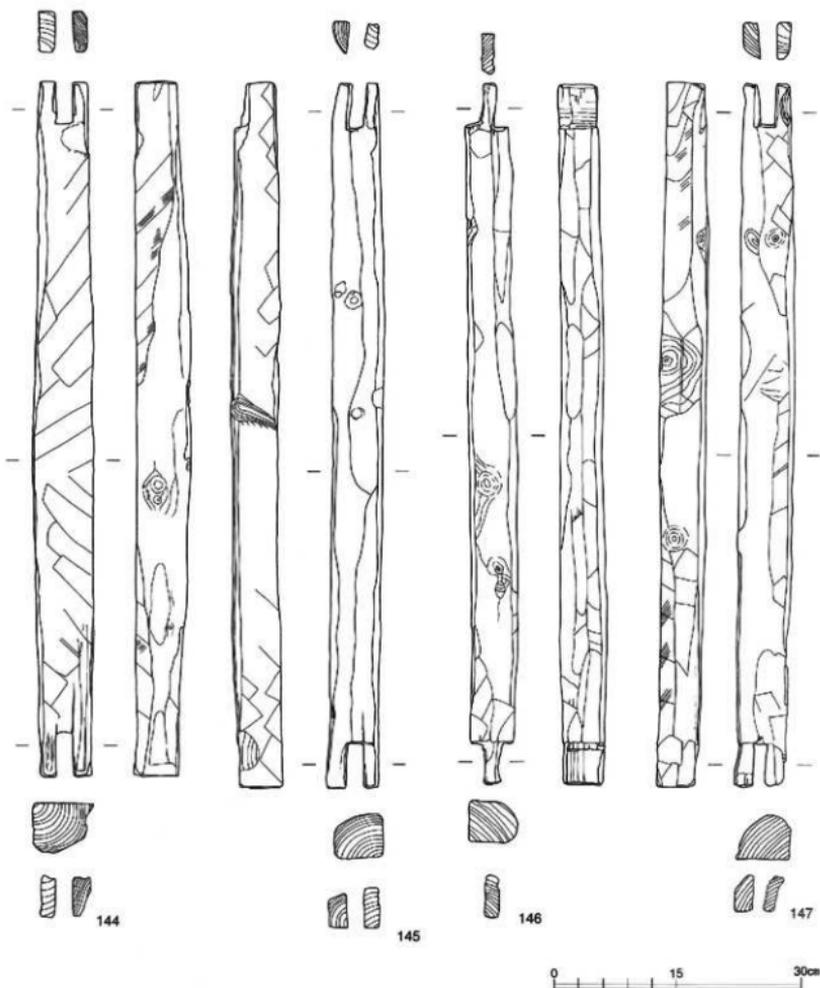
第45図 SE71出土遺物 (1/6)



第 46 図 SE71 出土遺物 (1/6)

出土遺物

SE71 (第45～51図138～166、図版第10の5・15の2・16の1) 138～143は井戸側の縦板である。縦板は割裂方により作り出され、手斧によって平滑に仕上げられる。手斧の刃幅は2.5～3cmと思われる。

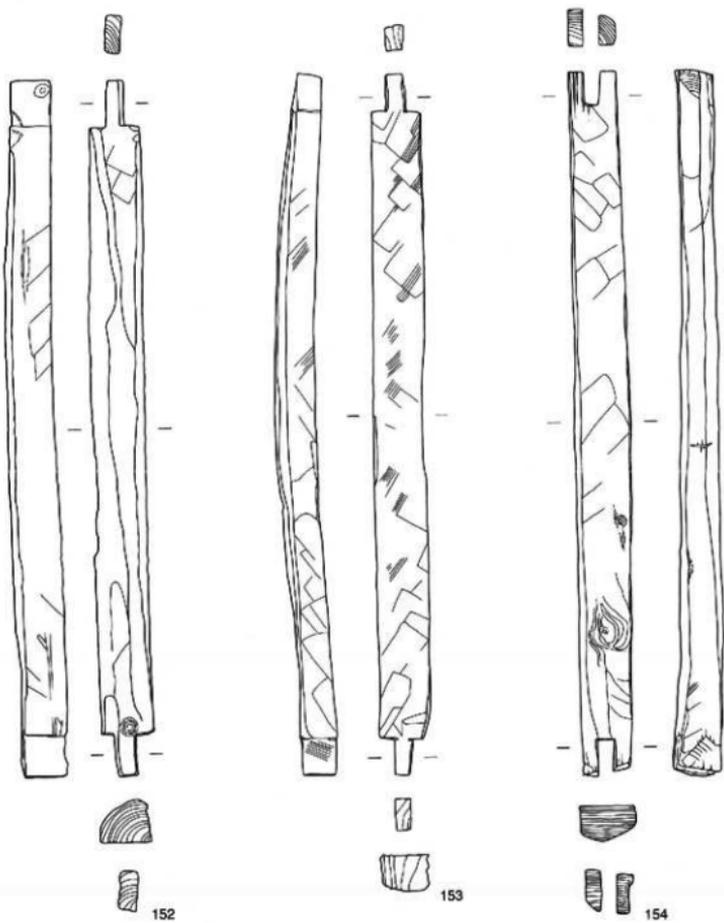


第47図 SE71出土遺物 (1/6)



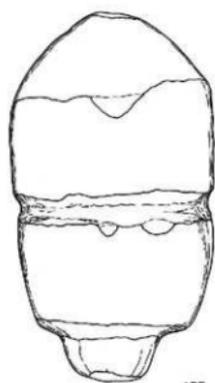
第48図 SE71出土遺物 (1/6)

144～151は井戸側の横棧で、仕口は目違い柄組みであり、柄形態は目地柄である。144～147は一段目、148～151は二段目、152～154は三段目に組まれる。各棧は基本的に、丸木を $\frac{1}{2}$ に割裂し、割れ面を手斧で調整する。

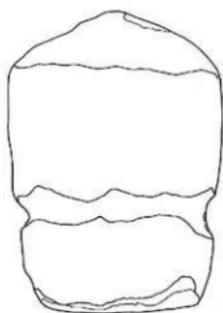


第49図 SE71出土遺物 (1/6)

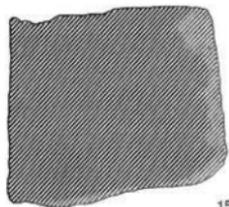
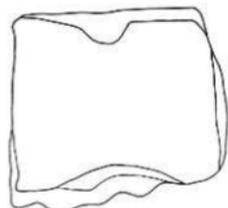
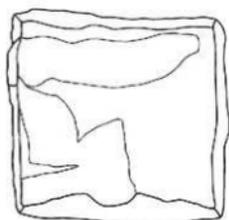
155~158は井戸構材として転用された五輪塔で、石材は軟質の砂岩である。155・156は空風輪部、157・158は地輪部である。



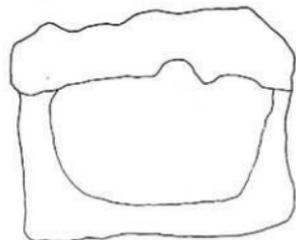
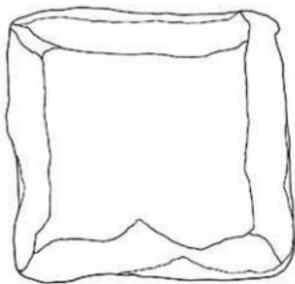
155



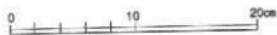
156



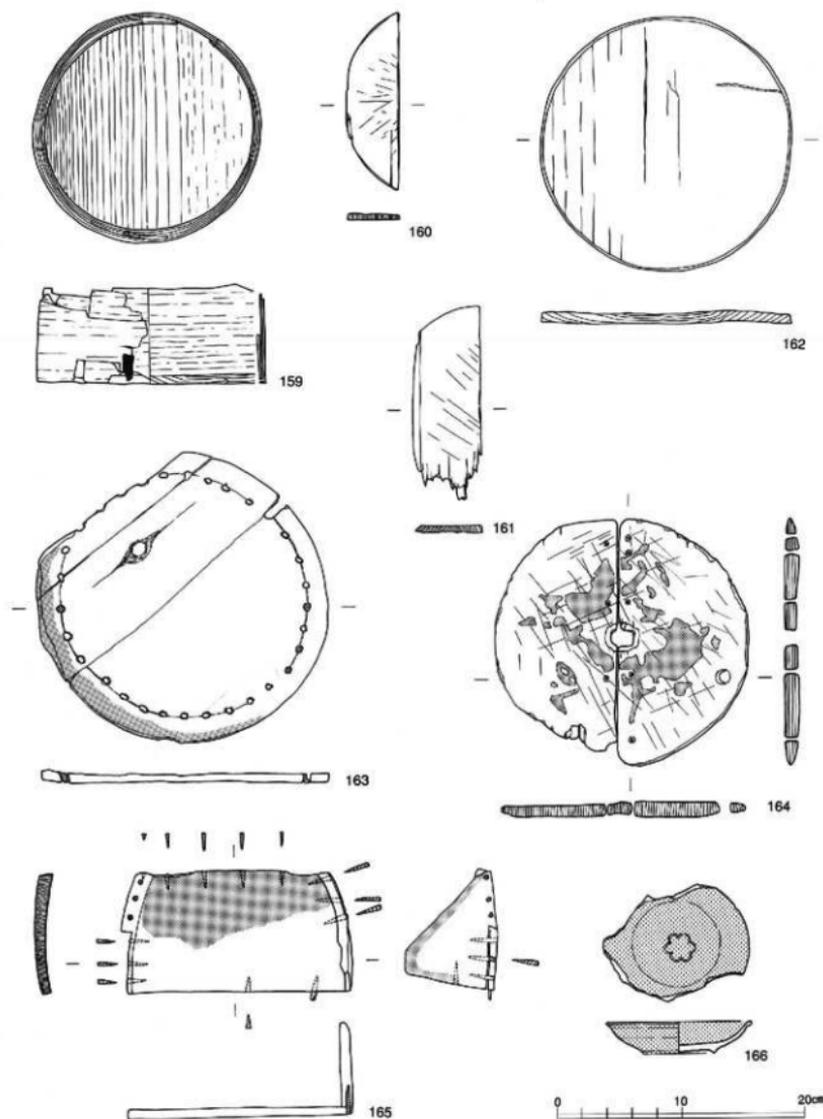
157



158

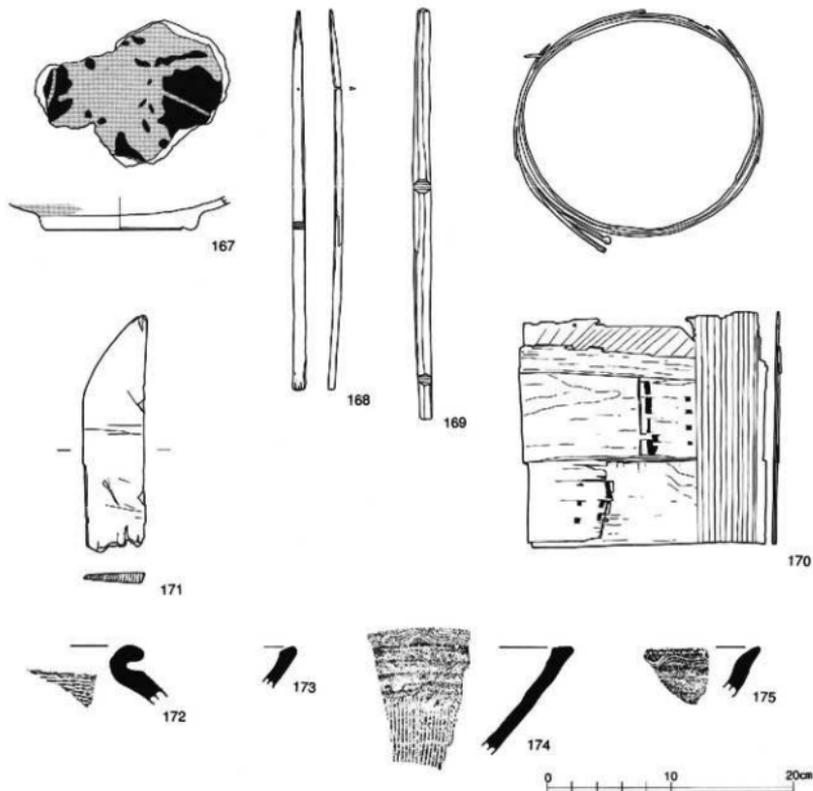


第50图 SE71出土遺物 (1/4、157・158は1/6)

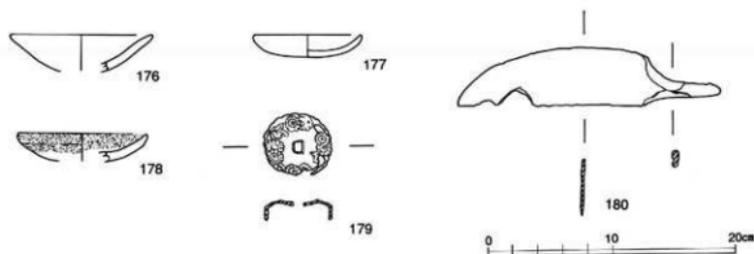


第51圖 SE71出土遺物 (1/4、160・161は1/6)

159は曲物の身と考えられ、径18cm・高さ8cmを測る。側板は樟皮の一行内三段綴じで二段に組まれ、側板と底板は木釘により結合する。160～163は曲物桶の底板・蓋板で、160・161は表面に刃痕が認められる。162は上面径19.5cm・底面径20cmを測り、径を違えて仕上げる。163は木釘結合曲物で、周縁より2.5cm奥まった箇所に、径6mmの木釘孔を31個穿ち、4箇所に木釘が遺存している。口径は35cmを測る。164は曲物桶の蓋板で、中央に大きな孔を開け、中心部にそって対になる小孔をあける。小孔は棒状のつまみを縛りつけた紐孔であろうか。面には煤が付着し、その上に刃痕をとどめる。径は30cmを測り、周縁は先細る。165は曲物桶の身であり、底板・側板の結合法は、木釘結合と欠き組を併用している。166は16世紀代の瀬戸・美濃の皿で、見込みに片喰がスタンプされる。軸は総軸で透明感のあるオリーブ色を呈し、内外面に貫入が入る。

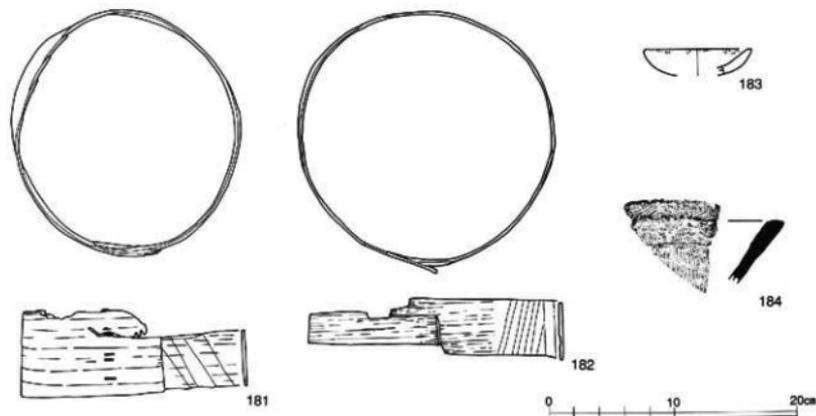


第52図 SE72出土遺物 (1/4、167・169は1/2、170は1/6)



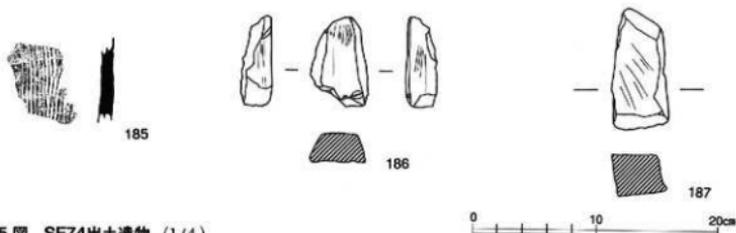
第53図 SE72出土遺物 (1/4)

SE72 (第52・53図167~180、図版第11の1・16の2) 167は漆器の椀であり、素地に黒漆を掛け朱漆により紋様を描くが、朱漆の剥落が著しく紋様構成は不明。木取は横木取り。168は曲物の柄杓の柄である。柄は割り材からつくる扁平な細棒で基部の先端をとがらせ、側板との固定用の木釘孔をあける。柄長は48cmを測る。169は箸状の木製品で、長さは17cmを測る。170は二段に組まれた曲物桶で、上段にはタガが取り巻く。上段の縦じ合わせは2列内4段の榫継ぎで、下段も同様と思われる。上段・タガには木釘孔が不均等に配される。上段は径60cm・高さ25cm、下段は径59.3cm・高さ57cmを測る。171は曲物桶の底板・蓋板と考えられる。172~175は珠洲であり、172は甕、173~175は樽鉢である。172は頸基部を強くで回し、しっかり肩を作る。口縁形態は[く]の字の円頭状を呈する。173・174の口縁形態は三角形の内傾口縁で、174の口端面には4条一単位の櫛目波状紋体を加飾する。175は口端面の拡張が進んだ無段の尖頭状口縁を有し、口端面には3条一単位の櫛目波状紋体を加飾する。帰属年代は172が珠洲Ⅲ期、173・174は珠洲Ⅴ期、175は珠洲Ⅵ期であろう。176~178は非ロクロ系の土師質皿で、178は口縁内外面に油煙痕が付着する。口径は176が11.2cm、177は8.5cm、178は10.5cmを測り、色調は176が褐色、177・178は暗灰色を呈する。179は銅版を加工した飾り金具と考えられるが使用されていた物の種類、部位は不明である。面には花紋が彫られ、径2.2cm・高さ8mmを測る。180は鉄包丁の身である。刃部長15cm・茎部長6cmを測る。



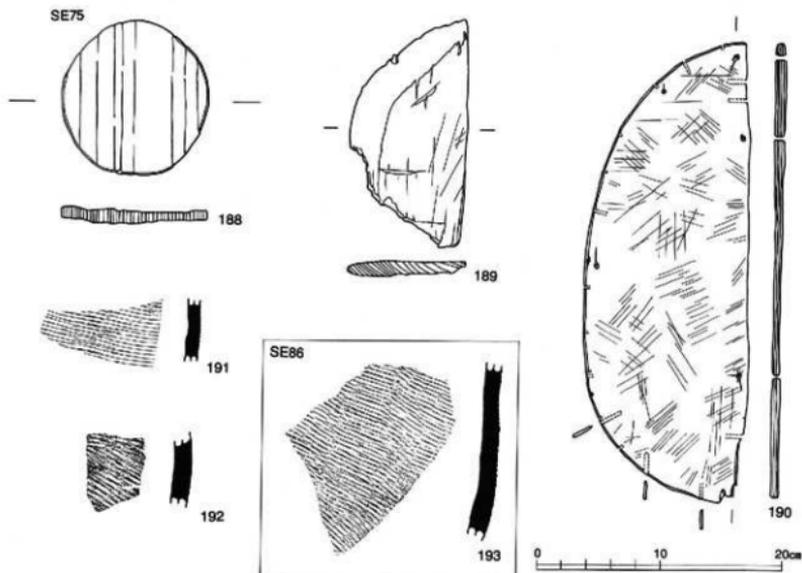
第54図 SE73出土遺物 (1/4、182は1/6)

SE73 (第54図181~184、図版第11図の2) 181・182は曲物の側板で、重ね合わせ部分は樺皮綴じであるが樺皮は遺存せず、木目に沿う横方向の切り目が認められる。口径は181が18cm、182は20cmを測り、内面にはケビキが施される。183は非ロクロ系の土師質の皿で、厚手に仕上げられ、口径は8.5cmを測る。色調は灰白色を呈し、焼成は良好。184は珠洲の摺鉢で、肥厚した口端面に4条一単位の櫛目波状紋帯を加飾する。年代は珠洲V期である。



第55図 SE74出土遺物 (1/4)

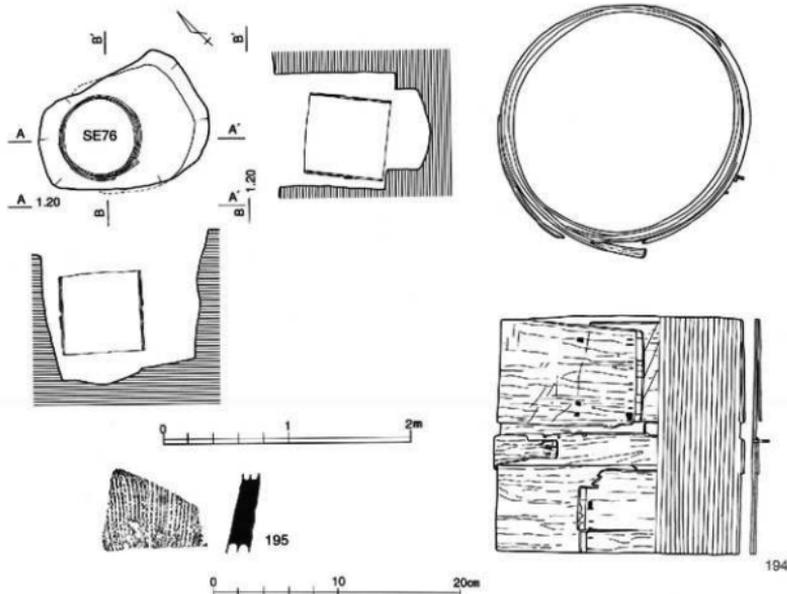
SE74 (第55図185~187、図版第11の3) 185は珠洲の摺鉢で、卸し目は稠密に施される。卸し目の原体幅は2.6cmを測り、一帯当たりの条数は7条である。色調は灰色。186・187は砥石であり、使用面には細かな擦痕が認められる。



第56図 SE75・86 出土遺物 (1/4、189・190は1/3)

SE75 (第56図188~192、図版第11の4) 188は土器類などの容器の蓋として想定した。加工は粗雑で表裏の区別はなく、周縁は整える程度にとどめる。径は6~7cm程で、木取りは柾目。189は曲物桶の一部の底板・蓋板で、面には刃痕が認められ、木取りは板目。190は折敷の底板の一部である。周縁には側板との結合のための木釘孔、長軸線上には木釘孔・結合孔を配する。面には不定方向の刃痕が多数認められ、鋸として二次転用されたと思われる。191・192は珠洲の壺もしくはは甕で、3cm当たりの叩き条数は191が10条、192は7条を数える。色調は191が暗灰色、192は青灰色を呈する。

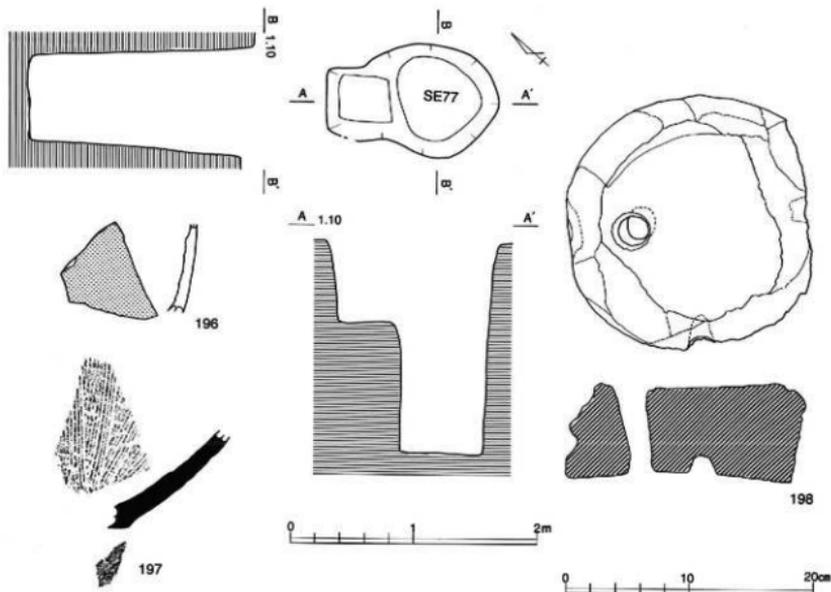
SE86 (第56図193、図版第11の5) 193は珠洲の壺もしくはは甕で、3cm当たりの叩き条数は9条を数える。色調は暗灰色を呈する。



第57図 SE76遺構図(1/40)、出土遺物(194は1/6、195は1/4)

SE76 (第57図、図版第6の2・3) X41Y58区に位置し、素掘り井戸に曲物を埋置する。埋置した曲物の底部下は更に0.2m程掘り込まれ、底面は血条を呈する。平面形は不整形円を呈し、開口口径 $1.0 \times 1.3\text{m}$ ・基底部径 $0.9 \times 1.0\text{m}$ ・基底部高 $\sim 0.2\text{m}$ を測る。遺物は珠洲が出土する。

遺物(第57図194・195、図版第11の6) 194は井戸側(水溜め)として使用された曲物桶で、三段のタガが取り巻く。身・タガとも重ね部分は榎皮紐で綴じ合わせ、中段の幅のないタガは身と木釘結合される。上段のタガの綴じ合わせは、2列前内5段後内3段綴じて、他は不明。規模は身が径 57.5cm ・高さ 58cm 、上段のタガは径 58cm ・高さ 25cm 、中段のタガは径 58.5cm ・高さ 9cm 、下段のタガは径 58cm ・高さ 21cm を測り、内面にケビキが施される。195は珠洲の摺鉢で、卸し目は稠密に施される。色調は灰色を呈する。



第58図 SE77遺構図 (1/40)、出土遺物 (1/4、198は1/6)

SE77 (第58図、図版第6の4) X42Y57区に位置する円筒形の素掘り井戸であり、土坑と重複しているが新旧関係は不明。規模は開口部径0.9m・基底部径0.65m・基底標高-0.75mを測る。遺物は瀬戸美濃・珠洲・石臼が出土。

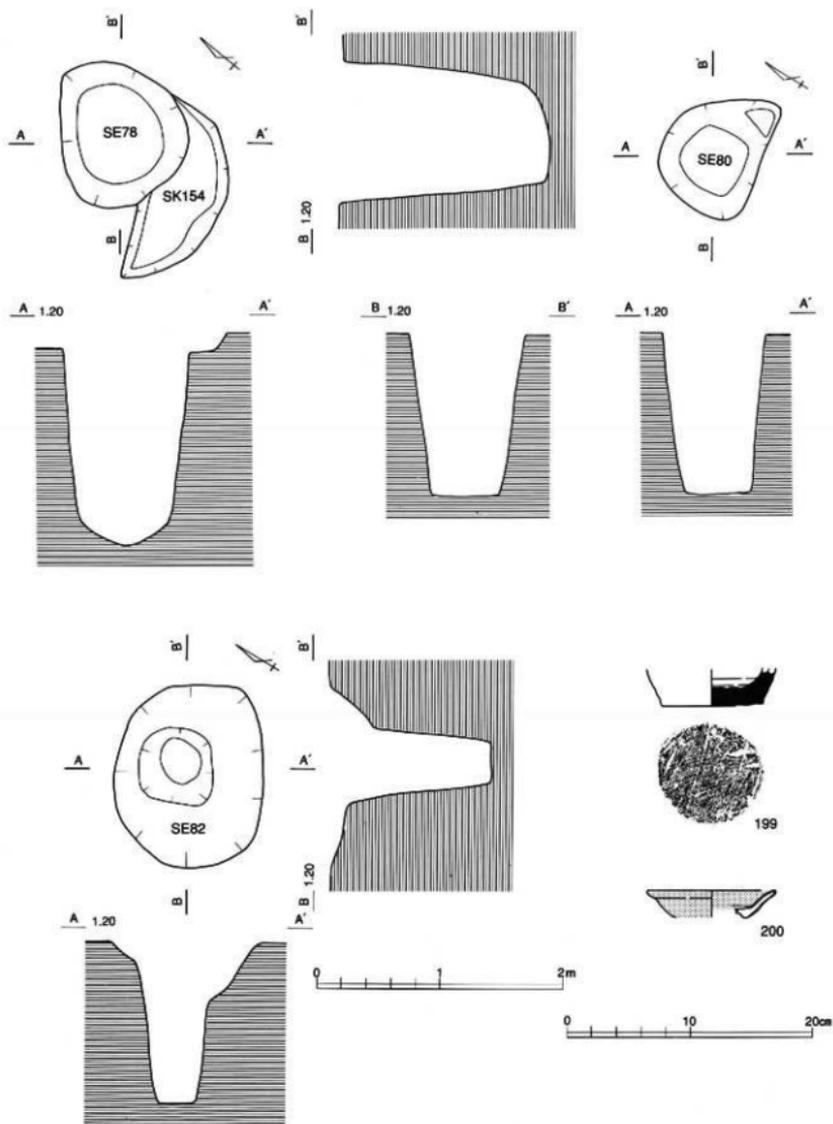
遺物(第58図196~198、図版第6の4) 196は瀬戸美濃の瓶類の体部片である。軸はくすんだオリーブ色を呈し、細かな貫入が入る。197は珠洲の摺鉢で、卸し目は内底より放射状に稠密に、左回りに施される。底部の切り離しは静止糸切りである。198は石臼〔粉挽き臼〕の上臼である。直径31cm・高さ11cmを測り、石材は安山岩である。

SE78 (第59図) X42Y58区に位置する円筒形の素掘り井戸であり、SB04のP5と重複しているが新旧関係は不明。規模は開口部径1.0m・基底部径0.75m・基底標高-0.7mを測る。出土遺物はない。

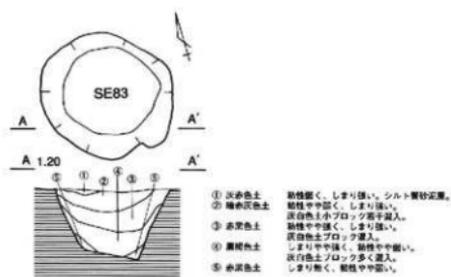
SE80 (第59図) X42Y59区に位置する円筒形の素掘り井戸であり、開口部径0.8m・基底部径0.6m・基底標高-0.3mを測る。出土遺物はない。

SE82 (第59図) X39Y58区に位置する所謂ルート式の素掘り井戸であり、開口部径1.2×1.5m・基底部径0.4m・基底標高-0.25mを測る。遺物は珠洲・越中瀬戸が出土する。

遺物(第59図199・200、図版第11の8) 199は珠洲の壺もしくは甕の底部で、底径は8.5cmを測り、底部の切り離しは静止糸切りである。200は16世紀末~17世紀前半の越中瀬戸の皿である。軸は紫味茶褐色・白濁色を呈し、総釉で掛け分けられる。

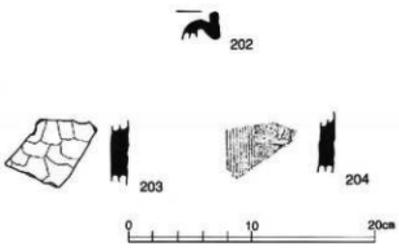
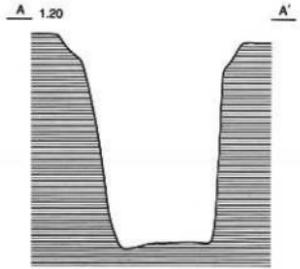
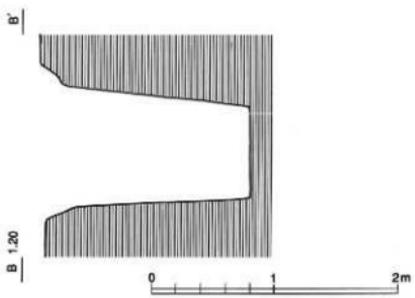
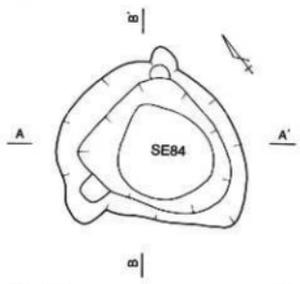
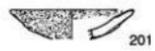


第 59 图 SE78・80・82遺構図 (1/40)、SE82出土遺物 (1/4)



SE83 (第60図) X35 Y58区に位置する素掘り井戸であり、開口部径1.1m・基底部径0.5m・基底標高0.5mを測る。埋土は5層に分かれる人為堆積である。遺物は土師質土器が出土する。

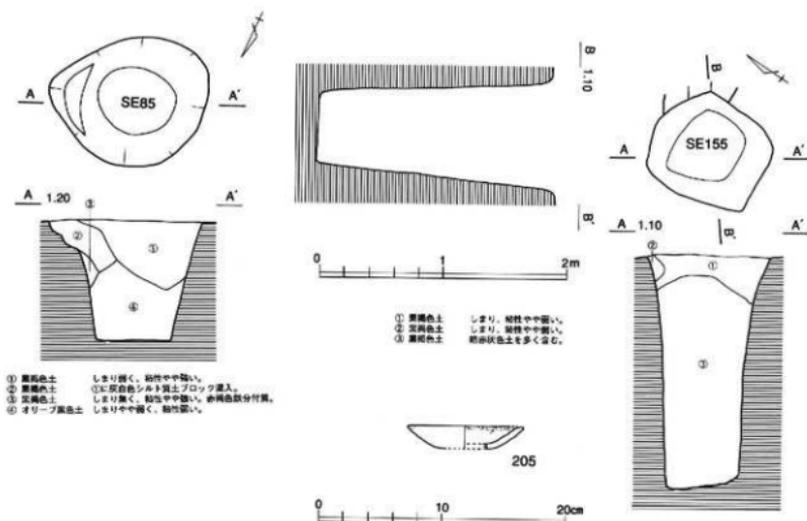
遺物 (第60図201、図版第11の9) 201は非クロコ系の土師質皿であり、灯明皿として使用した後に、全面に被熱し黒色に変色する。口径は10cmを測る。



第60図 SE83・84遺構図(1/40)、出土遺物(1/4)

SE84 (第60図) X37 Y60区に位置する素掘り井戸であり、開口部を弱く摺鉢状に掘り込む。規模は開口部径1.3×1.5m・基底部径0.7m・基底標高-0.6mを測る。遺物は加賀焼、珠洲が出土する。

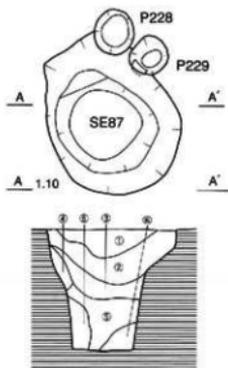
遺物 (第60図202~204、図版第11の10) 202・203は14世紀代の加賀焼の甕で、色調は灰色を呈する。204は珠洲の摺鉢であり、卸し目は3cm当たり10条を数える。色調は灰色を呈する。



- ① 黄褐色土 しまり強く、粘性やや強い。
 ② 黄褐色土 ①に灰白色シルト質土ブロック混入。
 ③ 黄褐色土 しまり無く、粘性やや強い。赤褐色鉄分付着。
 ④ オリーブ褐色土 しまりやや強く、粘性強い。

- ① 黄褐色土 しまり、粘性やや強い。
 ② 黄褐色土 しまり、粘性やや強い。
 ③ 黄褐色土 断面灰白色土を多く含む。

0 10 20cm



- ① 黄褐色土 粘性やや強く、しまりやや強い。
 ② 黄褐色土 粘性強く、しまりやや強い。
 ③ 黄褐色土 灰白色土ブロック混入。
 ④ 黄褐色土 粘性強く、しまり強い。シルト質土。
 ⑤ 黄褐色土 粘性やや強く、しまり強い。
 ⑥ オリーブ褐色土

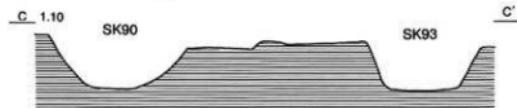
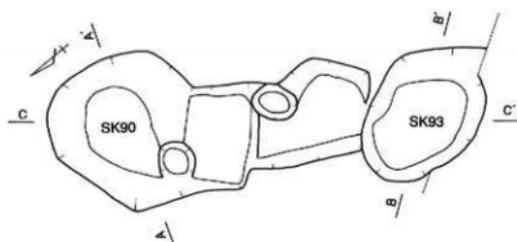
SE85 (第61図) X39Y52区に位置する素掘りの井戸であり、開口部の一部を摺鉢状に掘り込む。規模は開口部径1.05×1.25m・基底部径0.6m・基底標高0.1mを測る。埋土は4層に分かれる人為堆積である。遺物はない。

SE87 (第61図) X38Y55区に位置するロート状の素掘り井戸であり、開口部径1.0×1.2m・基底部径0.5m・基底標高-0.2mを測る。埋土は6層に分かれる人為堆積である。遺物はない。

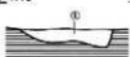
SE155 (第61図) X45Y57区に位置する円筒形の素掘り井戸であり、開口部径1.1m・基底部径0.6m・基底部標高-1.1mを測る。埋土は3層に分かれる人為堆積である。遺物は土師質土器が出土。

遺物(第61図205、図版第11の11) 205は土師質の皿で、口縁内外面に横ナデ調整を施し、色調は灰白色を呈する。口径は9cmを測る。

第61図 SE85・87・155遺構図(1/40)、SE155出土遺物(1/4)



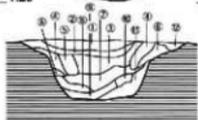
A 1.10



① 赤黒色土 粘性、しまりともや中強い。



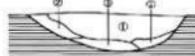
A 1.20



- ① 暗赤褐色土 粘性、しまりともや中強い。
- ② 暗赤褐色土 灰白色土の小ブロック混入。
- ③ 暗赤褐色土 粘性弱く、しまり強い。
- ④ 黄褐色土 シルト質砂混入。
- ⑤ 黄褐色土 粘性弱く、しまり強い。シルト質土。灰白色土が混入。
- ⑥ 褐色土 粘性弱く、しまり強い。
- ⑦ 灰白色土 粘性弱く、しまり強い。
- ⑧ オリーブ灰色土 粘性弱く、しまり強い。砂質土。
- ⑨ 灰褐色土 しまり弱く、粘性やや強い。

- ① 暗赤褐色土 粘性、しまりともや中強い。
- ② 暗赤褐色土 灰白色土の小ブロックが混入。
- ③ 暗赤褐色土 粘性やや強く、しまりやや強い。
- ④ 暗赤褐色土 粘性弱く、しまりやや強い。シルト質土。
- ⑤ 暗赤褐色土 粘性弱く、しまりやや強い。
- ⑥ 黄褐色土 粘性弱く、しまりやや強い。シルト質土。
- ⑦ 褐色土 粘性弱く、しまりやや強い。
- ⑧ オリーブ灰色土 灰白色土の小ブロック混入。
- ⑨ 赤褐色土 しまり弱く、粘性やや強い。
- ⑩ 灰褐色土 しまり弱く、粘性やや強い。

A 1.10



- ① 暗赤褐色土 灰白色土が少量混入。
- ② 暗赤土 しまりやや強い。
- ③ 暗赤褐色土 しまりやや強い。

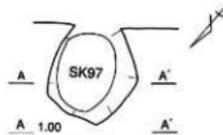
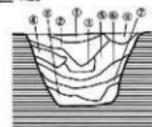
B 1.10



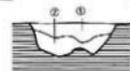
- ① 暗赤褐色土 灰白色土が少量混入。
- ② 暗赤土 しまりやや強い。
- ③ 暗赤褐色土 しまりやや強い。



A 1.20



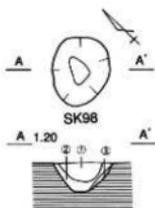
A 1.00



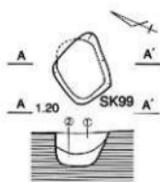
- ① 暗赤褐色土 粘性やや強く、しまりやや強い。
- ② 赤褐色土 灰白色土が塊状に混入。



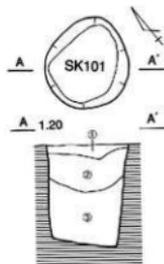
第 62 図 SK90・93～97 遺構図 (1/40)



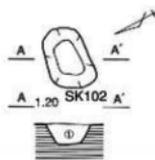
- ① 礫状色土 粘性、しまりとも弱い、灰白色シルト質土の小ブロックを若干混入。
 ② 深褐色土 粘性やや強く、しまりやや弱い、灰白色シルト質土ブロック混入。
 ③ 礫状色土 灰白色シルト質土ブロック多く混入。



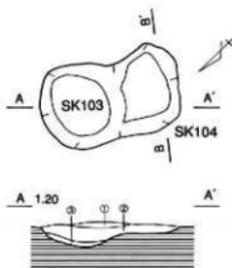
- ① 礫状色土 粘性、しまりとも弱い、灰白色シルト質土の小ブロックを若干混入。
 ② 礫状色土 灰白色シルト質土ブロック多く混入。



- ① 黄褐色土 粘性、しまりとも弱い、シルト質土、黄褐色土、灰白色シルト質土ブロックに混入。
 ② 相沢色土 粘性やや強く、しまり弱い、灰白色シルト質土ブロックに混入。赤褐色砂付層、灰褐色砂付層、灰褐色砂付層、赤褐色砂付層、赤褐色砂付層、赤褐色砂付層。
 ③ 灰黒褐色土 粘性、しまりとも弱い、赤褐色砂付層、赤褐色砂付層、赤褐色砂付層、赤褐色砂付層、赤褐色砂付層、赤褐色砂付層。

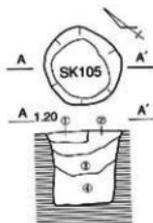


- ① 相沢色土 粘性、しまりとも弱い、灰白色シルト質土の小ブロックを若干混入。

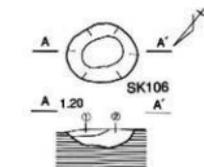


- SK103
 ① 礫状色土 粘性、しまりとも弱い、灰白色シルト質土の小ブロックを若干混入。
 ② 相沢色土 灰白色シルト質土ブロック多く混入。しまりやや強く、粘性やや弱い。
 ③ 深褐色土 粘性、しまりとも弱い、シルト質土。

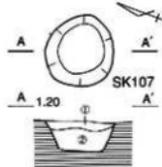
- SK104
 ① 灰白色土 粘性強く、しまりやや強い、粘土やや強いシルト質土。
 ② 礫状色土 粘性、しまりとも弱い、シルト質土。
 ③ 礫状色土 灰白色シルト質土ブロック多く混入。



- ① 灰白色土 しまり強く、粘性弱い。シルト質土、礫状土が若干混入。
 ② 礫状色土 粘性、しまりともやや弱い。
 ③ 礫状色土と灰白色土の混生土 粘性強く、しまりやや弱い。
 ④ 礫状色土 しまり強く、粘性強い。



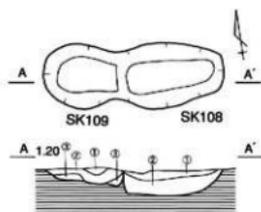
- ① 礫状色土 粘性、しまりとも弱い、灰白色シルト質土の小ブロックを若干混入。
 ② 礫状色土 粘性、しまりとも弱い、シルト質土。



- ① 黄褐色土 灰白色シルト質土ブロック多く混入。
 ② 相沢色土 粘性、しまりともやや強い、灰白色シルト質土ブロック多く混入。



第 63 図 SK98・99・101～107 遺構図 (1/40)

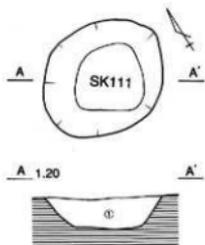


SK108

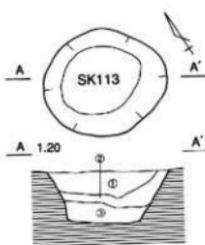
- ① 黒褐色土 粘性やや強く、しまりや中強い、灰白色シルト質土の小ブロックを若干混入。
 ② 褐色土 粘性、しまりとも中強い、灰白色シルト質土ブロック多く混入。

SK109

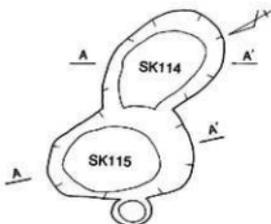
- ① 褐色土 粘性、しまりとも強い、灰白色シルト質土の小ブロックを若干混入。
 ② 褐色土 灰白色シルト質土ブロック多く混入。
 ③ 褐色褐色粘質土



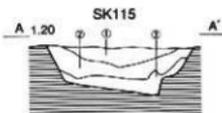
- ① 褐色土 灰白色シルト質土ブロック多く混入。



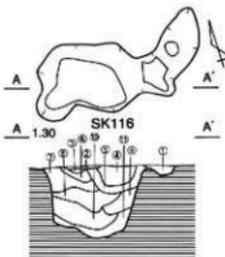
- ① 褐色土 粘性、しまりとも強い、灰白色シルト質土の小ブロックを若干混入。
 ② 褐色土 灰白色シルト質土ブロック多く混入、粘性、しまりとも強い、シルト質土。
 ③ 褐色土



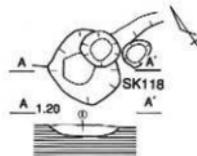
- ① 褐色土 粘性、しまりとも強い、灰白色シルト質土の小ブロックを若干混入。
 ② 褐色土 灰白色シルト質土ブロック多く混入。
 ③ 褐色土 粘性、しまりとも強い、シルト質土。



- ① 褐色土 粘性、しまりとも強い、灰白色シルト質土の小ブロックを若干混入。
 ② 褐色土 灰白色シルト質土ブロック多く混入。
 ③ 褐色土 粘性、しまりとも強い、シルト質土。



- ① 褐色土 粘性弱く、しまり強い、シルト質土、褐色土ブロック混入。
 ② 赤褐色土 粘性弱く、しまり強い、土の混入。
 ③ 赤褐色土と灰白色土の混入。粘性弱く、しまり強い、灰白色土混入。
 ④ 灰白色土 粘性弱く、しまり強い、灰白色土混入。
 ⑤ 黒褐色土 粘性弱く、しまり強い、粘性やや強く、しまりや中強い、灰白色土ブロック混入。
 ⑥ 褐色土 粘性弱く、しまり強い、粘性やや強く、しまりや中強い、灰白色土混入。
 ⑦ 褐色土と灰白色土の混入。粘性弱く、しまり強い、灰白色土混入。
 ⑧ 褐色土と黒褐色土の混入。粘性弱く、しまり強い。
 ⑨ 褐色土と黒褐色土の混入。しまり強く、粘性強い。
 ⑩ 褐色土 しまり、粘性とも強い。



- ① 褐色土 粘性、しまりとも強い、灰白色シルト質土の小ブロックを若干混入。



- ① 褐色土 粘性、しまりとも強い、灰白色シルト質土の小ブロックを若干混入。

0 1 2m

第 64 図 SK108・109・111・113~116・118・129遺構図 (1/40)

SK90 (第62図) X36Y43区に位置する。上面径1.3m・深さ0.3mの円形で付属ビットがある。埋土は暗赤褐色を基調とし、炭化粒子を微量に含む。

SK93 (第62図) X34Y43区に位置する。上面径1.1m・下面径0.7m・深さ0.3mで円形をなす。埋土は暗赤褐色を基調とし、炭化粒子を微量に含む。

SK94 (第62図) X33Y43区に位置する。上面径0.7m・下面径0.4m・深さ0.1mと浅く長円形をなす。付属ビットをもち、埋土は粘性のある赤黒色である。

SK95 (第62図) X34Y49区に位置する。上面径0.9m・下面径0.5m・深さ0.6mの円形で埋土は暗赤灰色を基調に9層に分けることができる。出土遺物は、磁石が1点出土している。

SK96 (第62図) X34Y49区に位置する。上面径1.3m・下面径0.5m・深さ0.5mで円形をなす。埋土は暗赤灰色を基調とし、壁は2段掘りになっている。

SK97 (第62図) X46Y47区に位置する。上面径0.7m・下面径0.5m・深さ0.3mで円形をなす。

SK98 (第63図) X45Y52区に位置する。上面径0.5m・下面径0.1m・深さ0.3mで円形をなす。埋土には灰白色シルト質土ブロックが多く混入している。

SK99 (第63図) X46Y53区に位置する。上面径0.4m・下面径0.2m・深さ0.3mである。平面形は円形をなし、側壁に張り出し部が見られる。埋土は、褐灰色を基調とする。

SK101 (第63図) X43Y52区に位置する。上面径0.7m・下面径0.5m・深さ0.8mで円形をなす。埋土はやや粘性のあるしまりのない土で赤褐色鉄分が付着していた。

SK102 (第63図) X42Y53区に位置する。上面径0.4m・下面径0.2m・深さ0.2mで方形をなす。埋土は褐灰色を基調とする。

SK103 (第63図) X44Y54区に位置する。上面径0.6m・下面径0.4m・深さ0.2mで円形をなす。SK104を切る。埋土は褐灰色を基調とする。

SK104 (第63図) X44Y54区に位置する。上面径0.5m・下面径0.3m・深さ0.1mと浅く不整形をなす。SK103に切られる。

SK105 (第63図) X44Y54区に位置する。上面径0.6m・下面径0.5m・深さ0.6mで円形をなす。埋土は褐灰色を基調とする4層に分けることができる。

SK106 (第63図) X44Y54区に位置する。上面径0.6m・下面径0.3m・深さ0.2mと浅く円形をなす。埋土は褐灰色を基調とし、粘性しまりともに弱い。

SK107 (第63図) X43Y54区に位置する。上面径0.6m・下面径0.4m・深さ0.3mで円形をなす。埋土は褐灰色でシルト質土ブロックが多く混入している。

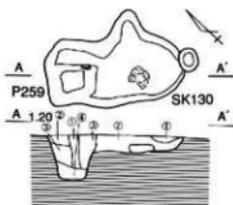
SK108 (第64図) X41Y53区に位置する。上面径0.8m・下面径0.7m・深さ0.2mで長円形をなす。SK109とお互いに切り合う。

SK109 (第64図) X41Y53区に位置する。上面径0.6m・下面径0.5m・深さ0.1mと浅く、SK108とお互いに切り合う。

SK111 (第64図) X38Y51区に位置する。上面径0.9m・下面径0.5m・深さ0.3mで円形をなす。埋土にはシルト質土ブロックが多く混入する。

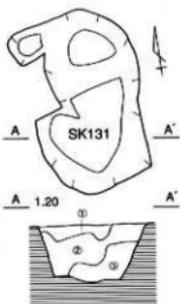
SK113 (第64図、図版6の6) X37Y51区に位置する。上面径1.0m・下面径0.6m・深さ0.4mで円形をなす。埋土は褐灰色を基調とし、3層に分けられる。

- SK114 (第64区) X37Y54区に位置する。上面径0.9m・下面径0.6m・深さ0.2mで円形をなす。SK115に切られる。埋土は褐灰色で粘性しまりともに弱い。
- SK115 (第64区) X37Y54区に位置する。上面径1.2m・下面径0.7m・深さ0.4mで円形をなす。SK114を切り、付属ビットがある。埋土は褐灰色で粘性しまりともに弱い。
- SK116 (第64区) X34Y58区に位置する。上面径1.1m・下面径0.6m・深さ0.6mで不整形をなす。付属ビットをもち、暗赤灰色上を基調に1層に分けることができる。
- SK118 (第64区) X35Y55区に位置する。上面径0.6m・下面径0.3m・深さ0.1mと浅く円形をなす。付属ビットを2本もつ。
- SK129 (第64区) X36Y55区に位置する。上面径0.5m・下面径0.4m・深さ0.1mと浅く不整形をなす。埋土は褐灰色土である。
- SK130 (第65区) X37Y56区に位置する。上面径1.1m・下面径1.0m・深さ0.1mと浅く不整形をなす。付属ビットを2本もち、遺物は弥生土器を1点出土している。
- SK131 (第65区) X35Y59区に位置する。上面径0.9m・下面径0.5m・深さ0.5mで不整形をなす。埋土は赤黒色を基調に灰白色土ブロックが混入し、粘性弱くしまり強い。
- SK132 (第65区) X39Y56区に位置する。上面径0.7m・下面径0.5m・深さ0.5mで側壁に張り出し部が見られ、長円形をなす。遺物は、珠洲片が1点出土している。
- SK133 (第65区) X38Y56区に位置する。上面径0.8m・下面径0.4m・深さ0.5mでSK134と切り合って不整形をなす。埋土は褐灰色を基調に炭化粒子、木屑を少量含む。
- SK134 (第65区) X38Y57区に位置する。上面径0.8m・下面径0.6m・深さ0.5mでSK133とSB04と切りあって不整形をなす。埋土には少量の炭化粒子を含む。
- SK136 (第65区) X38Y57区に位置する。上面径0.8m・下面径0.4m・深さ0.7mでSB04と切りあって不整形をなす。暗灰黄色上を基調とし、炭化粒子を少量含む。
- SK137 (第66区) X38Y58区に位置する。上面径0.8m・下面径0.3m・深さ0.6mで不整形をなす。埋土は黒褐色を基調に粘性やや強くしまりがない。
- SK139 (第66区) X37Y59区に位置する。上面径0.8m・下面径0.3m・深さ0.5m、壁は2段掘りで円形をなす。埋土は褐灰色を基調とし、シルト質土である。
- SK141 (第66区) X38Y59区に位置する。上面径0.7m・下面径0.4m・深さ0.1mと浅くSK142に切られ不整形をなす。埋土は褐灰色を基調とする。
- SK142 (第66区) X39Y59区に位置する。上面径0.8m・下面径0.4m・深さ0.7mでSK141を切り円形をなす。埋土は褐灰色を基調とし、3層に分けることができる。
- SK148 (第66区) X40Y58区に位置する。上面径1.0m・下面径0.3m・深さ0.4mで不整形をなす。埋土は褐灰色を基調とし、灰白色シルト質土ブロックを多く含んでいる。
- SK149 (第66区) X40Y59区に位置する。上面径1.1m・下面径0.6m・深さ0.5mで不整形をなす。埋土は褐灰色を基調とし4層に分けることができる。遺物は、珠洲片が1点出土している。
- SK150 (第66区) X43Y55区に位置する。上面径1.6m・下面径1.2m・深さ0.4mで不整形をなす。埋土は黒褐色を基調に5層に分けることができる。
- SK156 (第67区) X46Y57区に位置する。上面径1.0m・下面径0.5m・深さ0.9mで方形をなす。埋土中に赤褐色鉄分が少量付着していた。

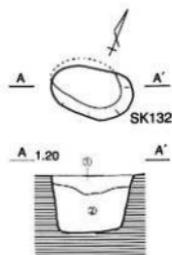


- SK130
 ① 焼灰色土 軽微、しまりとも弱い。灰白色シルト質土の小ブロックを若干混入。
 ② 焼灰色土 灰白色シルト質土ブロック多く混入。

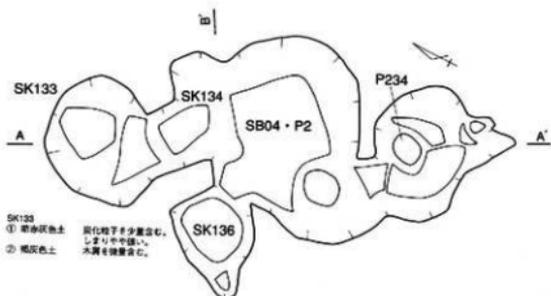
- P259
 ① 焼灰色土 軽微、しまりとも弱い。灰白色シルト質土の小ブロックを若干混入。
 ② 焼灰色土 軽微、しまりとも弱い。灰白色シルト質土ブロック多く混入。
 ③ 灰白色土 軽微、しまりとも弱い。灰白色シルト質土ブロック多く混入。
 ④ 焼灰色土 軽微、しまりとも弱い。灰白色シルト質土ブロック多く混入。



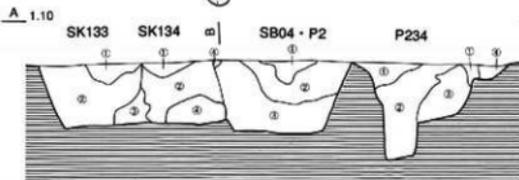
- ① 灰赤色土 軽微細く、しまり弱い。シルト質砂状層。
 ② 赤褐色土 灰白色土ブロック少量混入。
 ③ 黒オリーブ灰赤土 灰白色土ブロック混入。しまり強く、軽微や中強い。シルト質土。



- ① 焼灰色土 灰白色シルト質土ブロック多く混入。軽微、しまりとも中強い。
 ② 焼灰色土 灰白色シルト質土ブロック多く混入。



- SK133
 ① 赤赤灰赤土 炭化粒子を少量含む。しまりや中強い。
 ② 焼灰色土 木屑を微量含む。



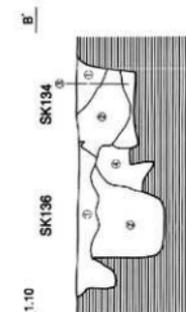
- SK133
 ① 赤赤灰赤土 炭化粒子を少量含む。
 ② 赤赤灰赤土 炭化粒子、ローム。
 ③ 焼灰色土
 ④ 黒褐色土

SB04-P2

- ① 赤赤灰赤土 炭化粒子、炭化材を含む。
 ② 焼灰色土 炭化粒子、ローム。
 ③ 赤赤灰赤土 ローム粒子、炭化粒子を少量含む。しまり強い。
 ④ 赤赤灰赤土

P234

- ① 赤赤灰赤土 灰赤色土を含む。しまりや中強い。
 ② 赤赤土
 ③ 灰白色土
 ④ 灰赤土 炭化粒子を微量含む。



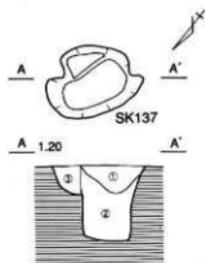
- SK134
 ① 赤赤灰赤土 ローム粒子、炭化粒子を少量含む。しまり強い。
 ② 赤赤灰赤土 炭化粒子、ローム。
 ③ 赤赤灰赤土
 ④ 灰白色土

SK136

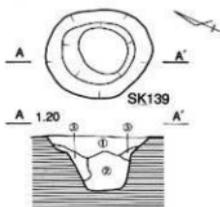
- ① 赤赤灰赤土 ローム粒子、炭化粒子を少量含む。しまり強い。
 ② 赤赤灰赤土 炭化粒子、ローム。



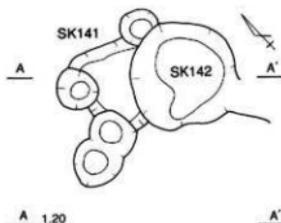
第 65 図 SK130~134・136、SB04、P2・234・259 遺構図 (1/40)



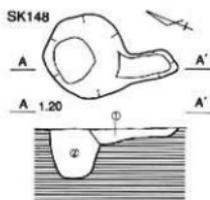
- ① 黒色土 粘地や中堅く、しまり強い。
 ② 褐色土 粘地や中堅く、しまり強い。
 ③ 赤褐色土 粘地や中堅く、しまり強い。



- ① 褐色土 粘地、しまりとも強い。灰白色シルト質土の小ブロックを若干混入。
 ② 褐色土 粘地、しまりとも強い。シルト質土。
 ③ 灰白色土 粘地、しまりや中堅い。粘土や中堅いシルト質土。



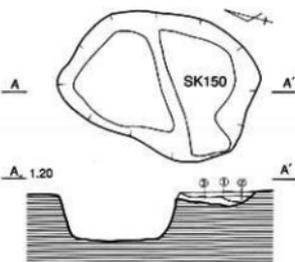
- ① 褐色土 粘地、しまりとも強い。灰白色シルト質土の小ブロックを若干混入。
 ② 褐色土 粘地、しまりとも強い。灰白色シルト質土の小ブロックを多く混入。
 ③ 灰白色土 粘地、しまりや中堅い。粘土や中堅いシルト質土。



- ① 褐色土 粘地、しまりとも強い。灰白色シルト質土の小ブロックを若干混入。
 ② 褐色土 粘地、しまりとも強い。灰白色シルト質土の小ブロックを多く混入。



- ① 褐色土 粘地、しまりとも強い。灰白色シルト質土の小ブロックを若干混入。
 ② 褐色土 粘地、しまりとも強い。灰白色シルト質土の小ブロックを多く混入。
 ③ 褐色土 粘地、しまりや中堅い。灰白色シルト質土の小ブロック混入。



- ① 黒色土 粘地、しまりとも強い。
 ② 黒褐色土 粘地や中堅く、しまりや中堅い。
 ③ 赤褐色土 粘地、しまりともやや強い。

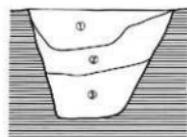


第 66 図 SK137・139・141・142・148~150遺構図(1/40)

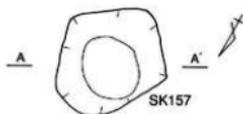


A 1.20

A'

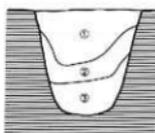


- ① 赤褐色土 灰白色土ブロック混入。粘性
や中強。しまりや中強い。
② 灰白色土 灰白色土ブロック若干混入。
粘性や中強。しまりや中強い。
③ 赤褐色土 粘性や中強。しまり強い。
赤褐色鉄骨付層。

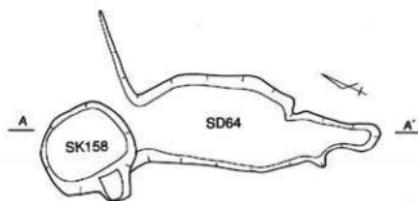


A 1.20

A'

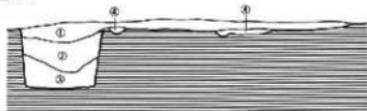


- ① 暗赤褐色土 粘性。しまりともや中強い。
粘性や中強。しまりや中強い。
② 暗赤褐色土 灰白色土ブロック混入。
粘性や中強。しまりや中強い。
③ 灰白色土 粘性や中強。しまり強い。
赤褐色鉄骨付層。暗赤褐色土
ブロック混入。



A 1.20

A'

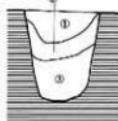


- SK158、SD64
① 暗赤褐色土 粘性弱く、しまりや中強い。
② 灰白色土 粘性や中強。しまりや中強い。
③ 赤褐色土 粘性や中強。しまり強い。
④ 赤褐色土と黄褐色土の混在土。

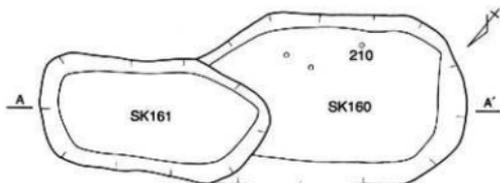


A 1.20

A'



- ① 暗赤褐色土 粘性。しまりともや中強い。
粘性や中強。しまりや中強い。
② 暗赤褐色土 灰白色土ブロック混入。
粘性や中強。しまりや中強い。
③ 赤褐色土 粘性や中強。しまりや中強い。



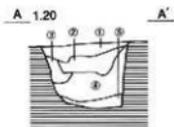
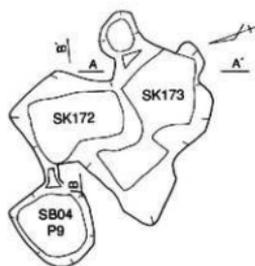
A 1.00

A'

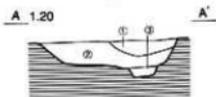
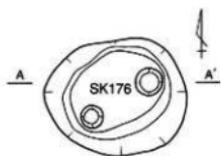
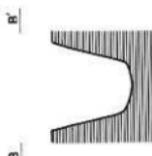


0 1 2m

第 67 図 SK156~161、SD64遺構図 (1/40)



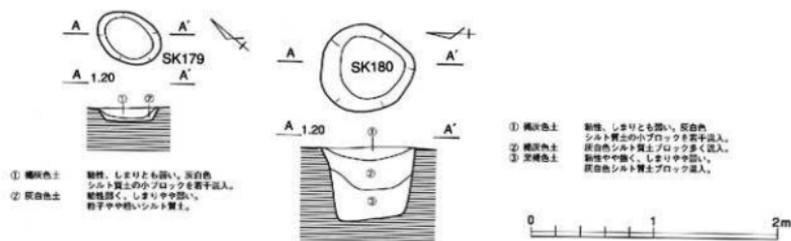
- ① 焼灰色土 粘性やや強く、しまりやや弱い。灰白色土の小ブロック混入。
 ② 焼灰色土 灰白色土ブロック多く混入。
 ③ 赤褐色土 粘性強く、しまりやや強い。
 ④ 赤褐色土と灰白色土の混合土 粘性やや強く、しまり強い。
 ⑤ 焼オーリーブ灰色土



- ① 焼灰色土 粘性、しまりとも強い。灰白色シルト質土の小ブロックを若干混入。
 ② 焼灰色土 灰白色シルト質土ブロック多く混入。粘性やや強く、しまりやや弱い。
 ③ 黄褐色土 粘性やや強く、しまりやや弱い。灰白色シルト質土ブロック混入。



第 68 図 SK165・168・172・173・175・176遺構図 (1/40)



第 69 図 SK179・180 構図 (1/40)

SK157 (第67図) X46Y58区に位置する。上面径0.9m・下面径0.4m・深さ0.8mで方形をなす。埋土中に赤褐色鉄分が少量付着し、暗青灰色土のブロックが混入する。

SK158 (第67図) X45Y58区に位置する。上面径0.7m・下面径0.5m・深さ0.5mでSD64を切り円形をなす。付属ビットをもち埋土は黒褐色土を基調とし、3層に分けることができる。

SK159 (第67図) X46Y59区に位置する。上面径0.6m・下面径0.4m・深さ0.7mで円形をなす。埋土は赤黒色土を基調に3層に分けることができる。

SK160 (第67図) X49Y58区に位置する。上面径1.6m・下面径1.4m・深さ0.2mでSK161に切られ長円形をなす。遺物は、珠洲片が1点出土している。

SK161 (第67図) X50Y57区に位置する。上面径1.8m・下面径1.5m・深さ0.2mでSK160を切る。平面形は長円形をなす。

SK165 (第68図) X42Y60区に位置する。上面径0.6m・下面径0.4m・深さ0.6mで不整形をなす。埋土は褐色・黒褐色で灰白色シルト質土ブロックが多く混入している。

SK168 (第68図) X41Y60区に位置する。上面径0.6m・下面径0.5m・深さ0.4mで長円形をなす。埋土は褐色・赤褐色の2層に分かれる。

SK172 (第68図) X39Y60区に位置する。上面径0.7m・下面径0.4m・深さ0.6mでSK173と互いに切り合い不整形をなす。

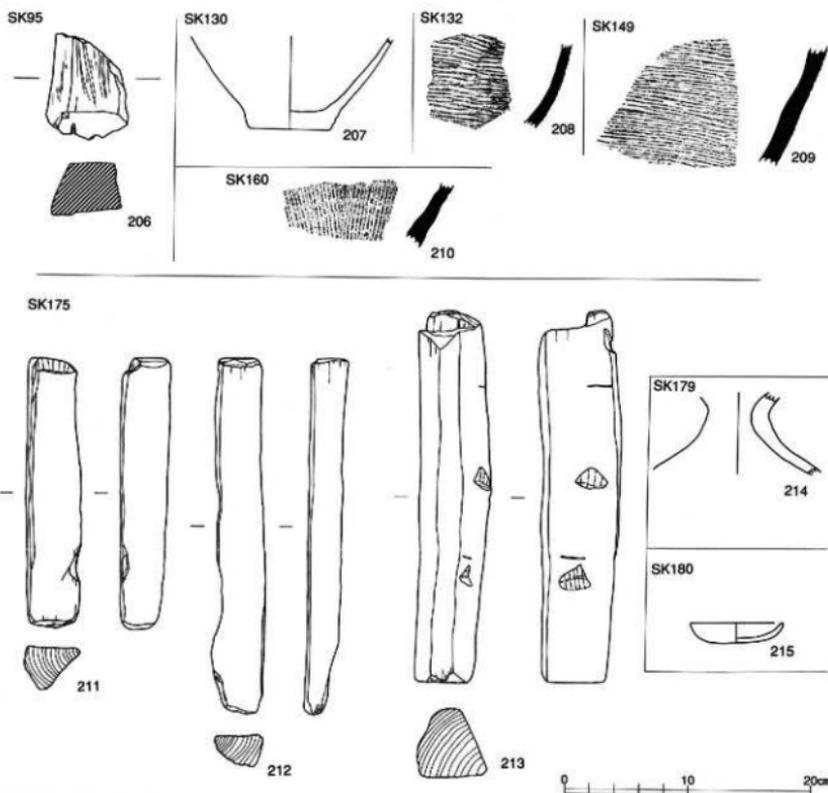
SK173 (第68図) X39Y60区に位置する。上面径0.7m・下面径0.5m・深さ0.5mでSK172と互いに切り合い、付属ビットをもち、不整形をなす。埋土は暗赤褐色・黒褐色を基調に5層に分けることができる。

SK175 (第68図) X38Y61区に位置する。上面径0.6m・下面径0.4m・深さ0.5mで付属ビットをもち長円形をなす。埋土は暗赤灰色を基調とし、3層に分けることができる。遺物は、木製品が3点出土している。

SK176 (第68図) X36Y61区に位置する。上面径1.1m・下面径0.8m・深さ0.2mで円形をなす。底にビットをもち、埋土は褐色を基調とする。

SK179 (第69図、図版第6の7) X34Y60区に位置する。上面径0.5m・下面径0.4m・深さ0.1mと浅く円形をなす。遺物は、弥生土器片が1点出土している。

SK180 (第69図、図版第6の8) X36Y61区に位置する。上面径0.8m・下面径0.5m・深さ0.6mで円形をなす。埋土は褐色を基調に3層に分けることができる。遺物は、土師質皿が1点出土している。



第70図 SK95・130・132・149・160・175・179・180出土遺物

(1/4, 211・212は1/6)

出土遺物

SK95 (第70図206、図版第12の1) 206は粘板岩の砥石で、使用面には細かな擦痕をとどめる。

SK130 (第70図207、図版第12の2) 207は弥生時代後期後半の甕で、底径は6.5cmを測り、色調は明褐色。

SK132 (第70図208、図版第12の3) 208は珠洲の甕で、3cm当たりの叩き条数は8条を数える。

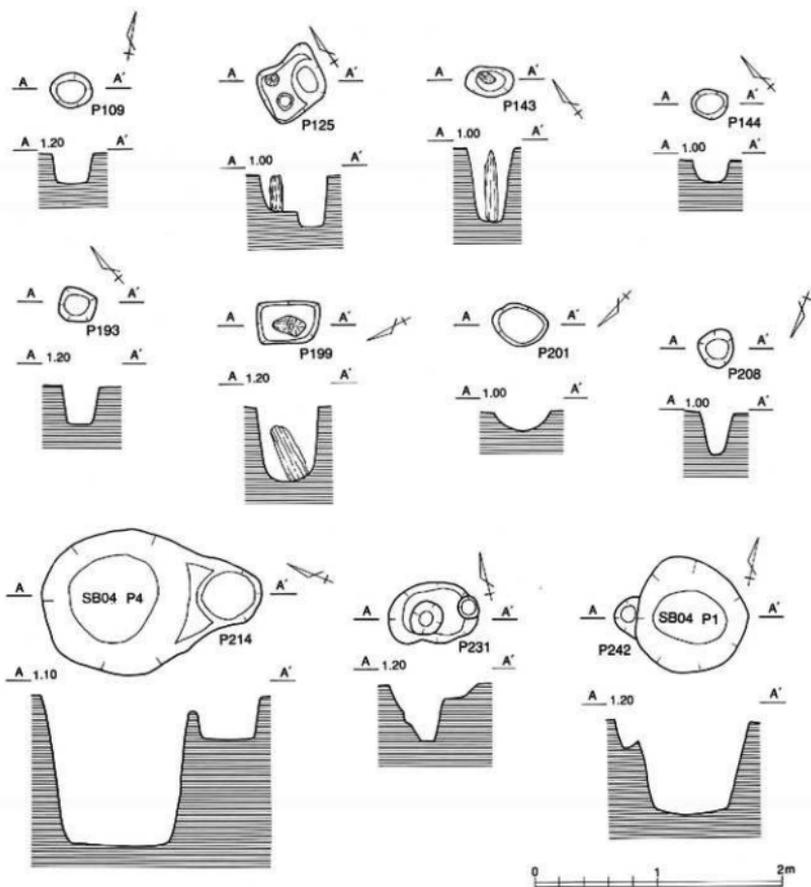
SK149 (第70図209、図版第12の4) 209は珠洲の甕もしくは甕で、叩きは稠密に施される。色調は灰色。

SK160 (第70図210、図版第12の5) 210は珠洲の槽鉢で、3cm当たりの卸し目は10条を数える。

SK175 (第70図211～213) 211～213は部材であるが詳細は不明。211・212は丸木を $\frac{1}{8}$ 程に割裂し、長さは211が33cm、212は43cmを測る。213は丸木を $\frac{1}{5}$ 程に割裂し、上部の木口には出柄を作り出す。天板を支える支脚であろうか。長さは30cmを測る。

SK179 (第70図214) 214は弥生時代後期後半の器台で、色調は灰白色を呈し、胎土には粗砂を多く含む。

SK180 (第70図215、図版第12の6) 215は非ロクロ系の土師質皿で、口径は7.3cmを測り、色調は灰白色を呈する。



第71図 P109・125・143・144・193・199・201・208・214・231・242遺構図(1/40)

P109(第71図) X36Y44区に位置する。円形で上面径0.36m・下面径0.24m・底面までの深さは0.27mである。

P125(第71図) X35Y49区に位置する。方形で土坑状の遺構と重複しており、短軸0.46m・長軸0.53m・底面までの深さは0.34mである。内部に柱根が残っている。

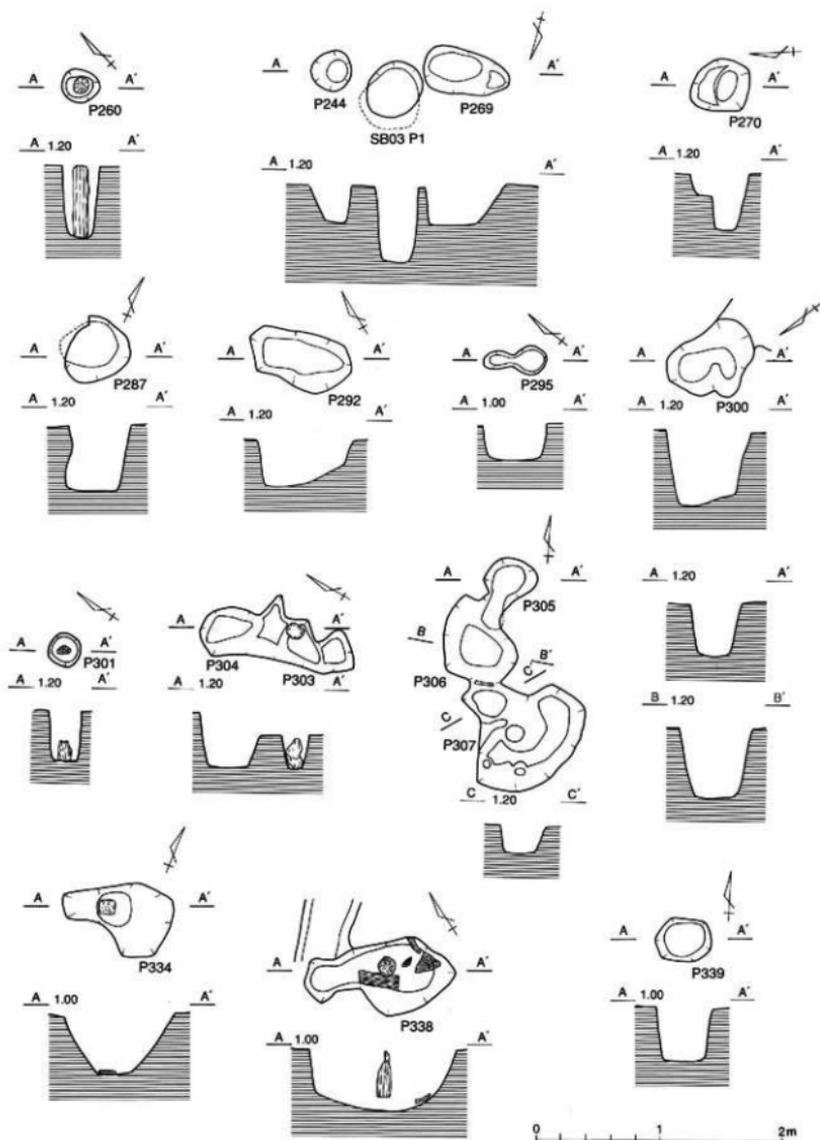
P143(第71図) X33Y50区に位置する。円形で上面径0.36m・下面径0.2m・底面までの深さは0.58mである。内部に柱根が残っている。

P144(第71図) X33Y50区に位置する。円形で上面径0.27m・下面径0.2m・底面までの深さは0.17mである。

P193(第71図) X48Y53区に位置する。方形で短軸0.28m・長軸0.29m・底面までの深さは0.31mである。

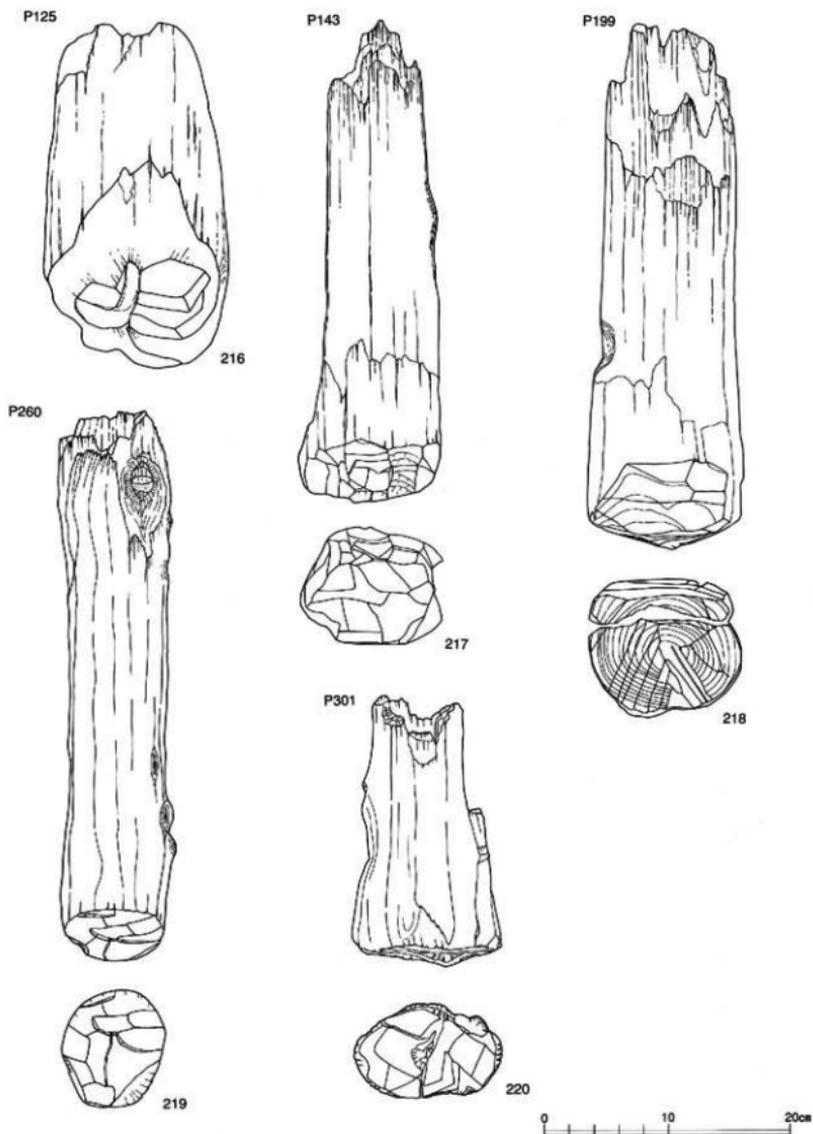
P199(第71図) X45Y57区に位置する。方形で短軸0.36m・長軸0.48m・底面までの深さは0.61mである。内部に斜めになった柱根が残っている。

P201(第71図) X45Y57区に位置する。円形で上面径0.43m・下面径0.34m・底面までの深さは0.15mである。



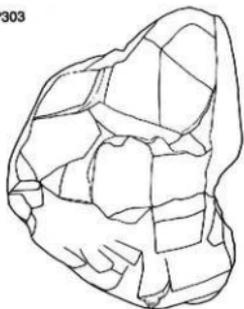
第 72 图 P244 · 260 · 269 · 270 · 287 · 292 · 295 · 300 · 301 · 303~307 · 334 · 338 · 339 遺構圖 (1/40)

- P208 (第71図) X43Y58区に位置する。円形で上面径0.25m・下面径0.11m・底面までの深さは0.34mである。
- P214 (第71図) X41Y58区に位置する。円形で上坑と重複している。上面径0.5m・下面径0.41m・底面までの深さは0.28mである。
- P231 (第71図) X39Y57区に位置する。長円形で小型のピットと重複している。上面径0.7m・下面径0.11m・底面までの深さは0.45mである。
- P234 (第65図) X38Y58区に位置し、SB04のP2と近接する。不定形で上面径1.2m・下面径0.2m・底面までの深さは0.75mである。
- P242 (第71図) X37Y59区に位置する。円形で大型の土坑と重複している。上面径0.2m・下面径0.12m・底面までの深さは0.23mである。
- P244 (第72図) X37Y58区に位置する。円形で上面径0.33m・下面径0.17m・底面までの深さは0.29mである。
- P259 (第65図) X37Y56区に位置し、SK130を切り込む不整形で、上面径0.35m・下面径0.2m・底面までの深さは0.35mである。
- P260 (第72図) X37Y56区に位置する。円形で上面径0.29m・下面径0.19m・底面までの深さは0.58mである。内部に垂直状態の柱根が残っている。
- P269 (第72図) X37Y58区に位置する。長円形で短軸0.36m・長軸0.64m・下面径0.38m・底面までの深さは0.31mである。
- P270 (第72図) X37Y59区に位置する。円形で上面径0.46m・下面径0.17m・底面までの深さは0.45mである。
- P287 (第72図) X35Y60区に位置する。円形で上面径0.49m・下面径0.49m・底面までの深さは0.54mである。壁の一部が外側に張り出す。
- P292 (第72図) X36Y61区に位置する。長円形で短軸0.42m・長軸0.76m・下面径0.36m・底面までの深さは0.38mである。
- P295 (第72図) X36Y61区に位置する。橢円で短軸0.12m・長軸0.5m・底面までの深さは0.29mである。
- P300 (第72図) X37Y60区に位置する。不整形で短軸0.66m・長軸0.77m・底面までの深さは0.61mである。
- P301 (第72図) X37Y60区に位置する。円形で上面径0.26m・下面径0.21m・底面までの深さは0.4mである。内部に垂直状態の柱根の一部が残っている。
- P303 (第72図) X37Y60区に位置する。不整形で短軸0.18m・長軸0.26m・底面までの深さは0.26mである。内部に柱根が残っている。
- P304 (第72図) X37Y60区に位置する。不整形で短軸0.22m・長軸0.48m・底面までの深さは0.36mである。
- P305 (第72図) X38Y60区に位置する。橢円で短軸0.4m・長軸0.6m・底面までの深さは0.42mである。壁の一部が外側に張り出す。
- P306 (第72図) X37Y60区に位置する。円形でP305と重複する。上面径0.49m・下面径0.32m・底面までの深さは0.57mである。
- P307 (第72図) X37Y60区に位置する。円形で上面径0.35m・下面径0.25m・底面までの深さは0.22mである。
- P334 (第72図) X42Y61区に位置する。不整形で短軸0.62m・長軸0.85m・下面径0.31m・底面までの深さは0.48mである。底面に礎石と思われる方形の木片が残っている。
- P338 (第72図) X42Y61区に位置する。橢円で短軸0.34m・長軸1.16m・底面までの深さは0.49mである。内部に柱根と根じり用と思われる木材、土器片が残っている。
- P339 (第72図) X44Y60区に位置する。円形で上面径0.46m・下面径0.34m・底面までの深さは0.43mである。

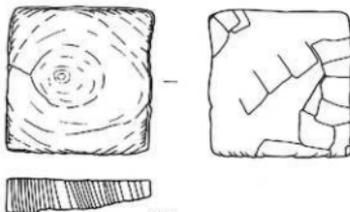


第73图 P125・143・199・260・301出土遺物 (1/6、216は1/4)

P303



P334

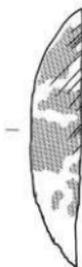


222



221

P338



224

P193



225



223

P339



229

P231



226

P270



227

P300



228

0 10 20cm

第74図 P193・231・270・300・303・334・338・339出土遺物(1/4, 223は1/6)

出土遺物

P125 (第73図216) 216は柱根で、現存長28cm・根もとの太さ15cmを測る。底面は手斧ではつられる。

P143 (第73図217、図版第17の1) 217は柱根で、現存長54cm・根もとの太さ15cmを測る。底面は手斧ではつられ、周縁は面取りされる。

P193 (第74図225、図版第12の7) 225は珠洲の摺鉢で、体部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部で面を取る。色調は青灰色を呈する。

P199 (第73図218、図版第17の2) 218は柱根で、現存長65cm・根もとの太さ19cmを測る。底面は全体に凸状をなし、木目方向に手斧ではつられる。手斧の刃幅は10cmと幅広い。

P231 (第74図226、図版第12の8) 226は珠洲の摺鉢で、口縁は面取りが痕跡化し、端部を尖頭状に仕上げ、端面に柵目波状紋帯を加飾する。色調は灰色を呈し、帰属年代は珠洲VI期である。

P260 (第73図219、図版第17の3) 219は柱根で、現存長69cm・根もとの太さ13cmを測る。底面は手斧ではつられ、手斧の刃幅は3.5cm前後である。

P270 (第74図227、図版第12の9) 227は16世紀前半の灰釉の碗で、釉は透明感のある淡いオリーブ色。

P300 (第74図228、図版第12の10) 228は16世紀前半の瀬戸・美濃の天目碗で、釉は黄褐色を呈する。

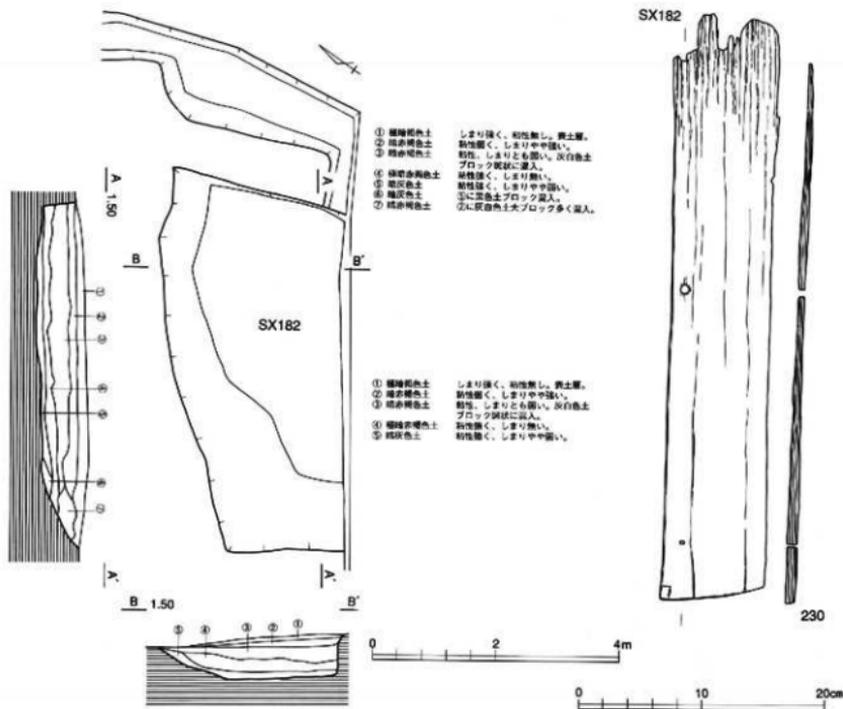
P301 (第73図220、図版第17の4) 220は柱根で、現存長32cm・根もとの太さ18cmを測る。底面は手斧ではつられ、中央部は凸状をなし、側面にV字状の腐食痕をとどめる。

P303 (第74図221、図版第17の5) 221は木面全体に手斧で調整を加えた不定形な木製品で、詳細は不明。

P334 (第74図222、図版第17の6) 222は一辺12cm・厚さ1.5~3.1cmを測る木製礎盤で、底面は手斧ではつられる。

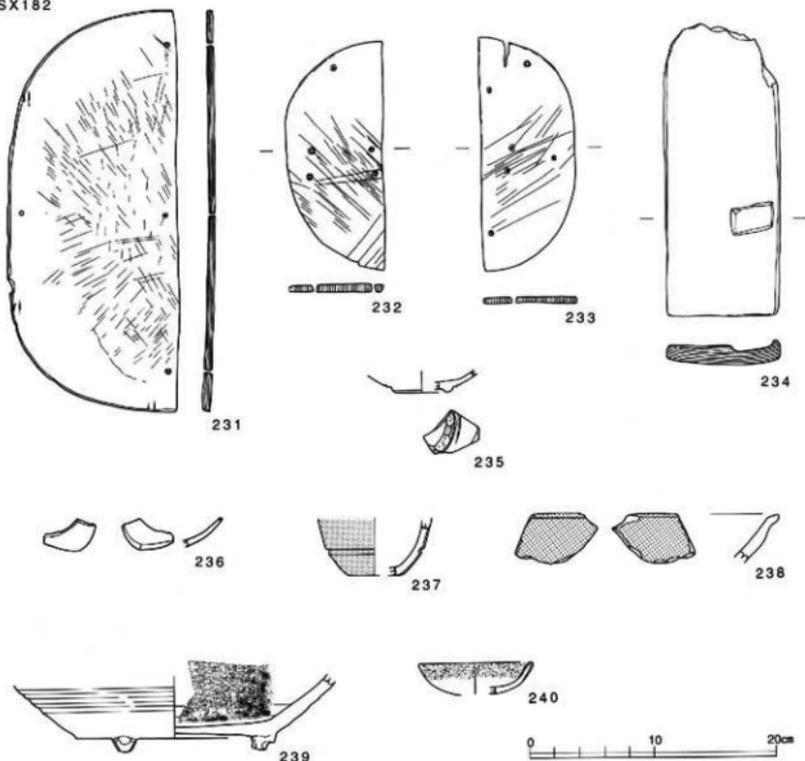
P338 (第74図223・224) 223は柱根で、現存長30cm・根もとの太さ15cmを測る。底面は手斧で調整され、全体に凸状に仕上げる。側面には深いV字状の腐食痕をとどめる224は曲物桶の底板・蓋板で、面には煤が付着し、その上に刃痕をとどめる。木取りは柁目。

P339 (第74図229、図版第12の11) 229は珠洲の甕で、3cm当たりの叩き条数は8条、色調は鼠黒色。



第75図 SX182遺構図(1/80)、出土遺物(1/4)

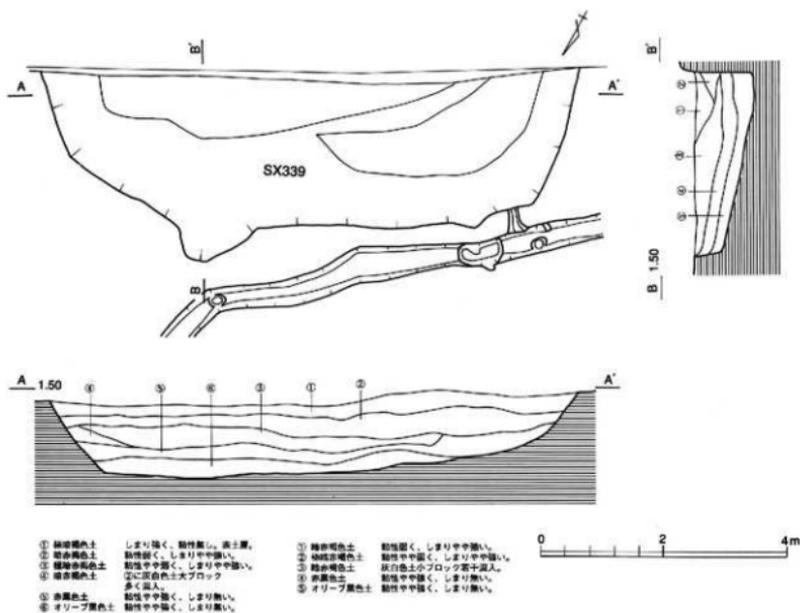
SX182



第76図 SX182出土遺物 (1/4、231は1/6)

SX182 (第75図、図版第6の9) X47~50 Y60~62区に位置し、調査区南東方向に更に延びる。底面は平坦であり、壁は東側では垂直に近く、他は緩やかに立ち上がる。埋土は7層に分かれる人為堆積で、平面形状は不明。遺物は木製品、白磁、瀬戸・美濃、土師質土器が出土する。

遺物 (第75・76図230~240、図版12の12・18の1) 230・231はいわゆる折敷、折櫃と呼ばれる曲物の底板片と思われる。中央部・周縁部には結合孔を穿つ。231は木面に無数の刃痕をとどめ、俎として転用している。232・233は蓋板と考えた。円盤に対になる孔をあり、紐ないし棒を固定して把手としたのであろうか。木面には刃痕をとどめる。234は結桶の側板と思われる。内面には彫り込みの浅い柄穴が設けられ、建築部材の転用であらうか。235・236は14世紀代の白磁の皿であり、235は高台をアーチ状に扶る。軸は235が黄味白濁色、236は灰白色を呈し、細かな貫入が入る。237は瀬戸の肩衝きの茶入れであり、軸は鉄軸が施される。238・239は瀬戸・美濃の製品で、238は端反の碗、239は三足盤である。240は非ロクロ系の土師質皿で、口縁内外面に油煙痕が付着する。口径は9cmを測り、色調は灰褐色を呈する。



SX339



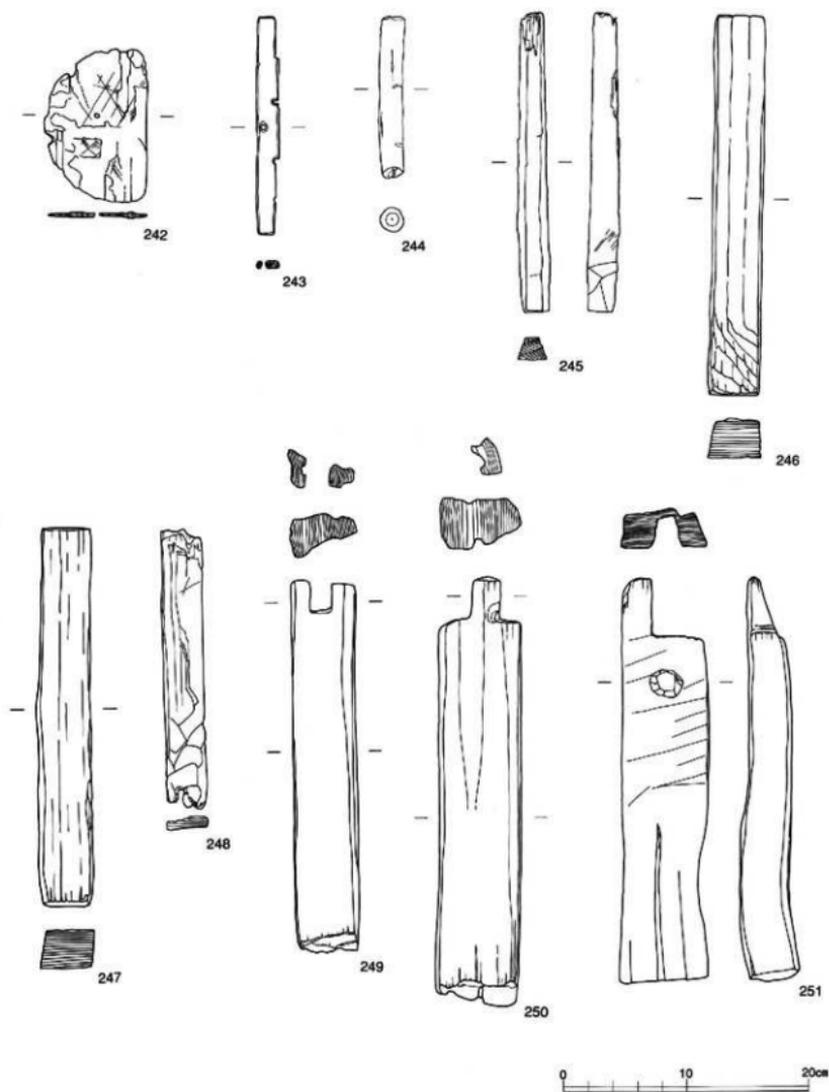
241



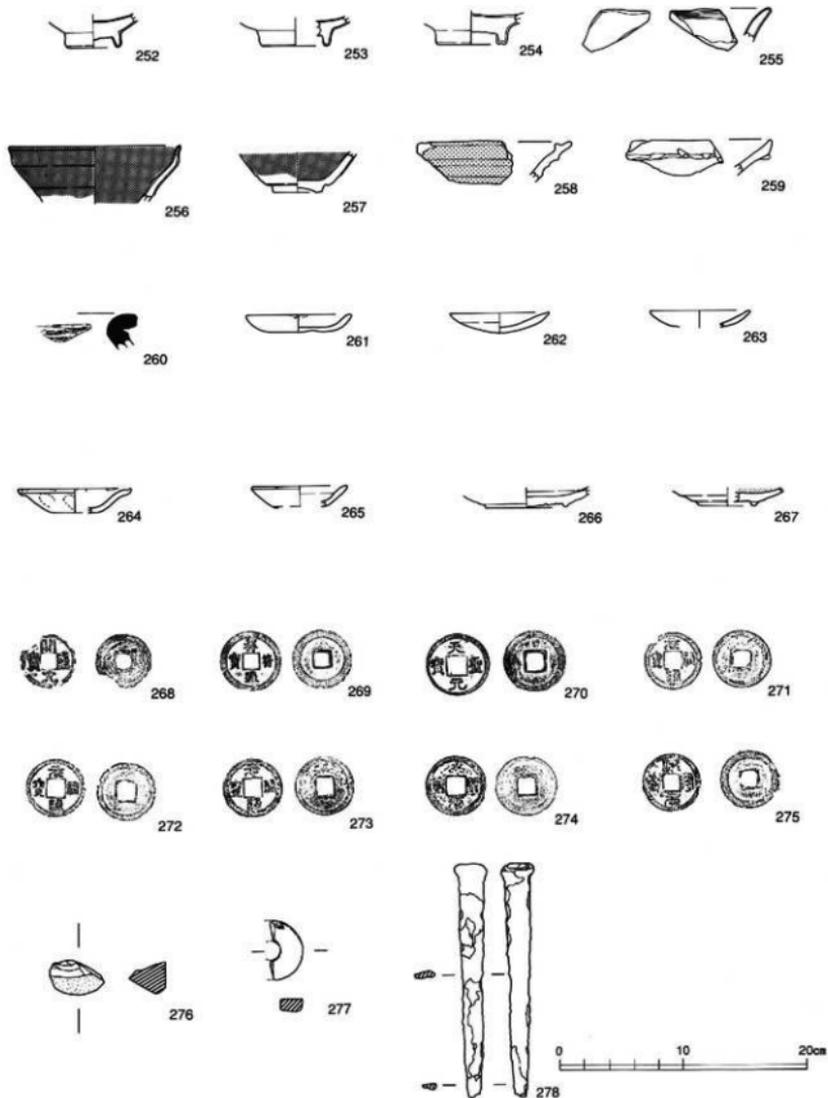
第77図 SX339遺構図(1/80)、出土遺物(1/4)

SX339(第77図、図版第6の9) X43~47Y60~62区に位置し、SX182に近接する。西側にはSD60が南北に走り、部分的に接続する。遺構の大半は調査区南東側に延びており、平面形状は不明。底面は平坦であり、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は6層に分かれる人為堆積で、SX182に近似する。遺物は漆器一点が出土する。

遺物(第77図241、図版第18の2) 241は漆器の高台付きの碗で、木取りは木心をさけた堅木取り。漆は全体に黒漆が施されるが剥落が著しい。口径17cm・器高9.8cmを測る。



第78図 遺構外出土遺物 (1/6、243・250は1/4)



第79図 遺構外出土遺物 (1/4、268~275は1/2)

X33～52Y35～62区の遺構外の出土遺物（第78・79図242～278、図版12の13・18の3）

木製品 242は曲物桶の底板・蓋板で多少程度を欠損している。円盤には径3mm程の結合孔が穿たれ、表面には刃痕をとどめる。口径は18cmを測り、木取りは柾目。243は火鑽板と考えた。細く長い角棒の側面に、一定の間隔をおいて切り欠きをいれ、火鑽杵を回転させた火鑽円をとどめる。火鑽円の断面形は、半球形を呈する。244は表皮を除去した用途不明の丸木であり、現存長は20cmを測る。245～248の角材は部材と組み合わせ、一つの製品を構成すると思われるが用途は不明である。249・250は井戸構材として使用された棧であり、一端を欠損している。249は相欠き、250は柄の止口を施す。251は机などの天板を支える支脚を想定した。一木口には柄を作りだし、その下に六角の柄穴を設ける。長さ50cm・幅10cm・厚さ8cmを測り、全体に工作は粗雑。

輸入陶磁器 252・253は青磁碗、254は青磁碗であり、帰属年代は14世紀末～15世紀前半代に比定される。釉は252・253が洗みのあるオリブ色、254は灰味が強いオリブ色を呈し、胎上は252・253が灰色、254は灰白色を呈する。255は15世紀後半～16世紀前半代の青磁花瓶で、釉は透明感のあるオリブ色を呈する。

瀬戸・美濃 256・257は15世紀末～16世紀前半の天目碗であり、釉は艶のない茶褐色を基調とし、底部周辺は減釉である。256は体部が直線的に立ち上がり、口縁部は強くくびれる。257は底部の削り出し高台が腰との境で線を描き、底裏が内返りに削られる。258は15世紀代の灰釉三足盤であり、内端面には緑帯が形成される。釉は淡いオリブ色を呈する。259は17世紀前半の掬鉢、口縁外面に凸帯を形成する。釉は鉄釉で軸むらが著しい。

珠洲 260は甕の口縁部で、短めの方頭状口縁は強く外反する。色調は青灰色を呈する。

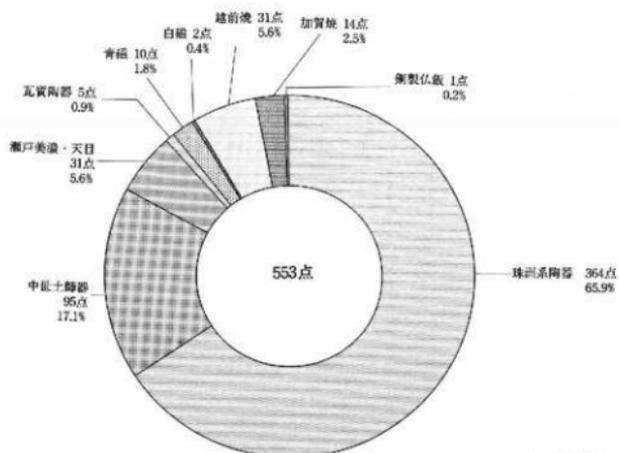
中世土師質皿 261～265はいずれも非クロコ系であり、帰属年代は15世紀後半～16世紀前半代と思われる。261は底径5.5cm・口径8.5cmを測り、色調は灰白色を呈し、口縁部に油煙痕が付着する。262は厚手の作りで、底部と体部の境は不明瞭。口縁端部は先細り、口縁内外面に横ナデ調整を施す。口径は8cmを測り、色調は灰白色。263は口径8.2cmを測り、色調は褐色を呈する。264は口縁部を水平近くに折り曲げ、端部を軽く捻み上げる。体部外面には指圧痕が連続し、口縁部には油煙痕が付着する。口径は9cmを測り、色調は灰白色を呈する。265は口径7.8cmを測り、口縁端部を軽く面取る。色調は褐色を呈する。

越中瀬戸 266・267は皿であり、高台は削りだしによって成形される。釉は艶のない茶褐色の鉄釉で、外面底部と見込みには施釉されない。

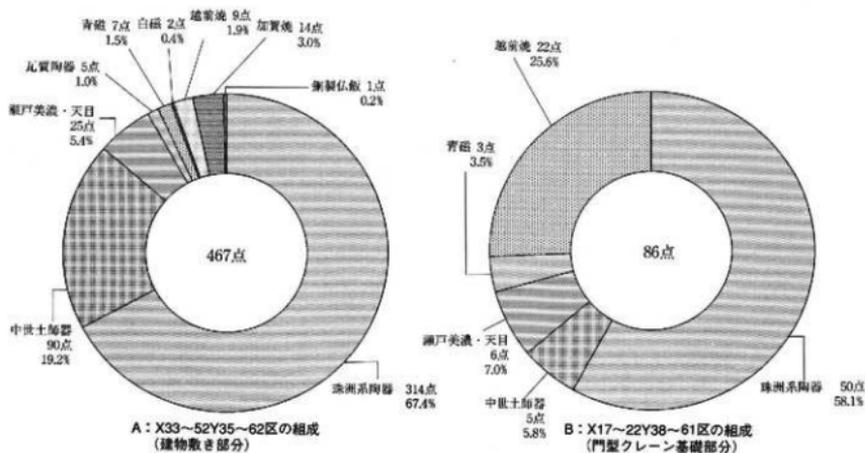
輸入銭 268は唐銭、269～273は北宋銭であり、274・275は判読不明。各々の名称・初鋳年代・重さは、順に以下の通りである。268は開元通宝（621年）・2g、269は祥符通宝（1009年）・2.9g、270は天聖元宝（1023年）・重さ2.9g、271～273は元祐通宝（1086年）重さは順に3.1g・1.9g・3.2g、274は2.9g、275は4gである。

石製品 276は用途不明の石製品で、重さは20gを量り、石材はヒスイである。断面は略梯形を呈し、多面体は磨き込まれる。277は径5cmを測る有孔の円盤で、石材は滑石である。

鉄製品 278はへら状の鉄製品で、先端部を欠損している。長さ19.5cm・厚さ4mmを測り、表裏には顔料風の物質が1mm程の厚さで付着している。



A+B : X17~22Y38~61区・X33~52Y35~62区の組成



A : X33~52Y35~62区の組成
(建物敷き部分)

B : X17~22Y38~61区の組成
(門型クレーン基礎部分)

第 80 図 中世陶磁器組成表

IV ま と め

1. 遺構

今回の調査によってX17～22Y38～61区、X33～52Y35～62区から発見された遺構は溝32条・掘立柱建物跡5棟・井戸跡23基・土坑61基・ピット44基である。このうち時期不明の溝を除いた残りの遺構は、そのほとんどが中世の所産と考えられるものである。このことは出土遺物からも裏付けることが可能であり、特にX33～52Y35～62区南東側付近に中世遺構の集中が認められた。遺構の中心となるものは掘立柱建物群とそれに伴う各種の施設群であり、低湿地であったことも幸いして木製品を含む多くの遺物を確認することができた。

遺跡全体の遺構分布状況を知るために、平成3年度に実施した調査成果も含めて検討を加えることにする。遺跡内で基幹となるものはSB01～05の5棟の掘立柱建物跡である。このうちSB01のみがY46付近に位置し、残りの4棟はY52～62付近に集中している。建物は2間×1間、2間×2間、3間×2間の規模のものであり、建物相互の配置、溝との方向的関連性、柱間寸法、柱穴形態は規則性に乏しい。いずれも割柱式で庇や縁束をもち、平面積が45㎡以下を測り、雑沓的様相を呈している。Y52～62付近では互いに重複しており、1～3棟が同時併存していたものと考えられる。機能期間は、柱掘り方や周辺よりの出土遺物により15世紀後半～16世紀前半代と考えられる。

井戸は1基を除きX33～49Y52～61区に分布し、遺跡全体としてはY57軸付近を東西方向に走るように整井されている。このような分布状況は掘り抜き井戸であるため、地下水との深淺により決定されたと考えられる。また、大方は円筒形の案振り井戸であるが、SE71のように開口部を石組、それ以下は縦板組横棧どめにより構築されたものもあり、使用目的別に整井がなされた事も予想される。確認された23基の井戸は同一時期に板敷基の使用が考えられるものの、SB03とSF82、SB05とSF80のように建物の壁部分に井戸が位置する例やX39～42Y55～57区集中整井されるものは同一時期の使用は考えられない。

土坑はY43付近に少数みられるが、多くなるのは溝SD49を越えてY52から南東に向かった区域であり、この傾向はX17～22Y38～61区でも同様である。また、分布状況からみると、X33～52Y35～62区では井戸と重複はあまりせず、井戸の周辺に数基がグループを作る傾向があるように思われる。井戸との関連性の強い遺構であると判断される。

ピット群はX35～45Y53～62区の建物群重複地区内に集中する傾向がみられる。木部の残されているものもあり、柱ないしは杭として機能していたものと考えられる。これらすべてを掘立柱建物にあてるとは無理であるが、数棟ほどの増加は可能性があろう。

主な溝には建物群と付属遺構の外側をL字に圍繞するSD42、内部中央を北東に走り広場状の空間と遺構集中地区を区画するSD49、遺構集中地区の南側を東西に走るSD51がある。更に区画内にはSD43～47・57・60が東西・南北に規格的に走り小区画を構成している。また、規模・方向性よりSD42はSD203に、SD49はSD202・205に接続する可能性がある。いずれの溝も灌溉・排水を兼ね備えた区画溝と考えられる。

以上のように遺構群は、一定の企画のもとに計画された方形区画内遺構であり、帰属年代は出土遺物より15世紀後半～16世紀代にすえて大過ないと思われる。遺跡の性格は定かではないものの、SE71の井戸構材に転用されていた五輪塔、SE68より出土した立派な銅製の仏飯、調査区西側に遺存する略台形の方形卑部遺構（SD15、平成3年度実施）が性格の一端を示唆している。

2. 陶磁器の組成（第80図）

本遺跡の組成は、簡便で一般的破片数を用いた。陶磁器の種類は、中国製磁器・珠洲系陶器・土師質土器・瀬戸美濃・越前焼・加賀焼・瓦質土器があり、これらの破片数と比率は、中国製磁器12点（2.2%）、珠洲系陶器364点（65.9%）、土師質土器95点（17.1%）、瀬戸美濃31点（5.6%）、越前焼31点（5.6%）、加賀焼14点（2.5%）、瓦質陶器5点（0.9%）となる。

（桐谷）

参考・引用文献

- | | |
|-----------------|------------------------|
| *石井 進・萩原 三雄 | 1991 中世の城と考古学 |
| *若林 喜三郎・里瀬 七郎 | 1976 珠洲史市 第一巻 |
| *亀井 明徳 | 1986 日本貿易陶磁史の研究 |
| *手塚 直樹・齊木 秀雄 | 1982 千歳地遺跡 |
| *中山 修一先生古希記念事業会 | 1982 長岡京古文化論叢 |
| *富山大学人文学部考古学研究所 | 1993 珠洲人鳥窯 |
| 石川考古学研究会 | |
| *旧芝離宮庭園調査団 | 1988 旧芝離宮庭園 |
| *加古 千恵子・岸本 一宏 | 1990 山岡遺跡 |
| 平田 博幸 | |
| *奈良国立文化財研究所 | 1985 木器集成図録〔近畿古代編〕 |
| *吉岡 康暢 | 1994 中世須恵器の研究 |
| *松島 吉信・山本 正敏 | 1985 じょうべのま遺跡 C・K地区の調査 |
| *北陸中世土器研究会 | 1989 北陸における越前陶の諸問題 |
| *石川県立埋蔵文化財センター | 1988 寺家遺跡発掘調査報告Ⅱ |
| *愛知県埋蔵文化財センター | 1992 清洲城下町遺跡(Ⅱ) |
| *橋本 久和 | 1992 中世土器研究序論 |
| *上野 章・原田 義範 | 1992 小杉町伊勢領遺跡発掘調査概要 |
| *上野 章 | 1992 小杉町白石遺跡発掘調査概要 |
| *上野 章 | 1992 小杉町戸破若宮遺跡発掘調査概要 |

附章 自然科学的調査

白石遺跡から出土した木製品の樹種

パリオ・サーヴェイ株式会社

はじめに

白石遺跡が位置する射水平野では、これまでに大門町小泉遺跡や大門町布日沢東遺跡において古環境復元を目的とした自然科学分析（林・島地，1982；パリオ・サーヴェイ株式会社，1991）、また小杉町針原東遺跡で出土した木製品などの樹種同定が行われている。また、平野南部の丘陵地では、太閤山遺跡を中心として、炭窯や製鉄炉から検出された炭化材の樹種同定が行われている（島地ほか，1982；島地・林，1983a，1983b，1984；林，1988）。これらの調査により、本地域における古植生と木材利用の実態が明らかになりつつある。とくに、木製品等の樹種同定では、スギが大量に使用されていたことが明らかとなっている。これは、福井県等で行われている調査例と調和的であり、北陸地方でスギ材が広く利用されていたことが推定される。

本報告では、白石遺跡から出土した中世の木製品について樹種同定を実施し、周辺地域の調査例とあわせて当該期の木材利用について検討する。

1. 試料

試料は、各遺構から出土した箸、鉢、柱根等の木製品17点（試料番号1～17）である。各試料の詳細については、樹種同定結果とともに表1に示した。

2. 方法

剃刀の刃を用いて、試料の木口（横断面）・柀目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を複製し、ガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製した。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定した。

3. 結果

同定結果を表1に示す。17点の試料は、試料番号7および13は試料の保存が良好でなく、樹種の特定にいたらず、それぞれの木材組織の形態を記した。その他の試料は5種類（スギ、ヒノキ属の一種、コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種、コナラ属アカガシ亜属の一種、トネリコ属の一種）に同定された。各種類の主な解剖学的特徴および現世種の一般的性質を以下に記す。なお、学名・和名は「原色日本植物図鑑 木本編 I・II」（北村・村田，1971，1979）にしたがひ、一般的性質については「木の事典 第2巻～第6巻」（平井，1979-1980）も参考にした。

・スギ (*Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don) スギ科

早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広く、年輪界は明瞭。樹脂細胞はほぼ晩材部に限って認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、細胞壁は滑らか、分界壁孔はスギ型で2～4個。放射組織は単列、1～15細胞高。

スギは、本州・四国・九州に自生する常緑高木で、また各地で植栽・植林される。材は軽軟で割裂性は大きく、加工は容易、保存性は中程度である。建築・土木・樽桶類・舟材など各種の用途がある。

・ヒノキ属の一種 (*Chamaecyparis* sp.) ヒノキ科

早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭く、年輪界は明瞭。樹脂細胞は晩材部に限って認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、細胞壁は滑らか、分界壁孔はヒノキ型で1～4個。放射組織は単列、

表1 樹種同定結果

番号	検出遺構など	用途	樹種名
1	SD1B区	田下駄の未製品?	スギ
2	SD1B区	鋸	コナラ属アカガシ亜属の一種
3	SD202・203	下駄	トネリコ属の一種
4	SB01	柱根	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
5	SB01	柱根	トネリコ属の一種
6	SB04	箸	スギ
7	SE69	櫛	広葉樹(散孔材)
8	SE69	曲物(桶底)	スギ
9	SE69	曲物の側板	スギ
10	SE69	曲物の側板	スギ
11	SF70	ヤリガンナの柄	スギ
12	SE71	井戸側の縦板	スギ
13	SE71	井戸側(棧)	針葉樹
14	SE71	曲物底板	ヒノキ属の一種
15	SE71	曲物の差し蓋(?)一まな板に転用	ヒノキ属の一種
16	SE71	曲物	ヒノキ属の一種
17	SE75・86	折敷(まな板に転用)	スギ

1~15細胞高。

ヒノキ属には、ヒノキ (*Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.) Endlicher) とサワラ (*C. pisifera* (Sieb. et Zucc.) Endlicher) の2種がある。ヒノキは本州(福島県以南)・四国・九州に分布し、また各地で植栽される。材はやや軽軟で加工は容易、割裂性は大きい、強度・保存性は高い。建築・器具材など各種の用途が知られている。サワラは本州(岩手県以南)・九州に自生し、多くの園芸品種がある。材は軽軟で割裂性は大きく、加工も容易、強度的にはヒノキに劣るが耐水性が高いため、樽や桶にするほか各種の用途がある。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種 (*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Prinus* sp.) ブナ科

環孔材で孔部は1~2列、孔間外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1~20細胞高のものと複合放射組織とがある。年輪界は明瞭。

コナラ節は、コナラ亜属(落葉ナラ類)の中で、果実(いわゆるドングリ)が1年目に熟するグループで、モンゴリナラ (*Quercus mongolica* Fischer ex Turcz.) とその変種ミズナラ (*Q. mongolica* Fischer ex Turcz. var. *grosseserrata* (Bl.) Rehder et Wilson)、コナラ (*Q. serrata* Murray)、ナラガシワ (*Q. aliena* Blume)、カシワ (*Q. dentata* Thunberg) といくつかの変・品種を含む。モンゴリナラは北海道・本州(丹波地方以北)にミズナラ・カシワは北海道・本州・四国・九州に、ナラガシワは本州(岩手・秋田県以南)・四国・九州に分布する。コナラは樹高20mになる高木で、古くから薪炭材として利用され、植栽されることも多かった。材は重硬で、加工は困難、器具・機械・構材などの用途が知られ、薪炭材としてはクヌギ (*Q. acutissima* Carruthers) に次ぐ優良材である。

・コナラ属アカガシ亜属の一種 (*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* sp.) ブナ科

放射孔材で、管壁厚は中薄~厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1~15細胞高のものと複合放射組織とがある。年輪界は不明瞭。

アカガシ亜属(カシ類)には、アカガシ (*Quercus acuta* Thunberg)、イチイガシ (*Q. gilva* Blume)、アラカシ (*Q. glauca* Thunberg) など7種があるが、果実の構造からコナラ亜属に分類される常緑低木~高木のワメガシ (*Q. phylliraoides* Asa Gray) も、材構造上はカシ類と類似する。カシ類は、暖温帯常緑広葉樹林(いわゆる照葉

樹材)の主要な構成種であり、主として西南日本に分布する。このうち最も高緯度地域にまで分布するのがアカガシで、宮城・新潟県が北限である。材は重硬・強靱で、器具・機械・建築・薪炭材などに用いられる。

・トネリコ属の一種 (*Fraxinus* sp.) モクセイ科

環孔材で孔圍部は2~3孔、孔圍外で急激に管径を減じたのち漸減する。道管は単穿孔を有し、壁孔は小型で密に交互状に配列する。放射組織は同性(〜異性Ⅲ型)、1~3細胞幅、1~40細胞高であるが、20細胞高前後のものが多い。年輪界は明瞭。

トネリコ属には、シオジ (*Fraxinus spaethiana* Lingelsh.)、トネリコ (*F. japonica* Blume)、アオダモ (*F. serrata* (Nakai) Murata) など約8種が自生する。このうちヤマトアオダモ (*F. longicuspis* Sieb. et Zucc.)・マルバアオダモ (*F. sieboldiana* Blume)・アオダモは北海道・本州・四国・九州に、ヤチダモ (*F. mandshurica* Rupr. var. *japonica* Maxim.) は北海道・本州(中部地方以北)に、トネリコは本州(中部地方以北)に、シオジは本州(関東地方以西)・四国・九州に分布する。いずれも落葉高木である。材の性質は種によって異なるが、一般には中庸〜やや重硬で、靱性があり、加工は容易で、建築・器具・家具・旋作・薪炭材などの用途が知られる。

4. 考察

木製品には、スギ、ヒノキ属、コナラ節、アカガシ亜属、トネリコ属、不明針葉樹、広葉樹(散孔材)が使用されていることが明らかとなった。このうち、不明針葉樹については、観察できた範囲の木材組織の特徴から、スギもしくはヒノキ属の可能性があるが、特定に至らなかった。また、広葉樹(散孔材)についても、樹種特定に至らなかったが、今回同定された広葉樹3種類の中には散孔材の形態を有する種類はないことから、別の種類であることは明らかである。

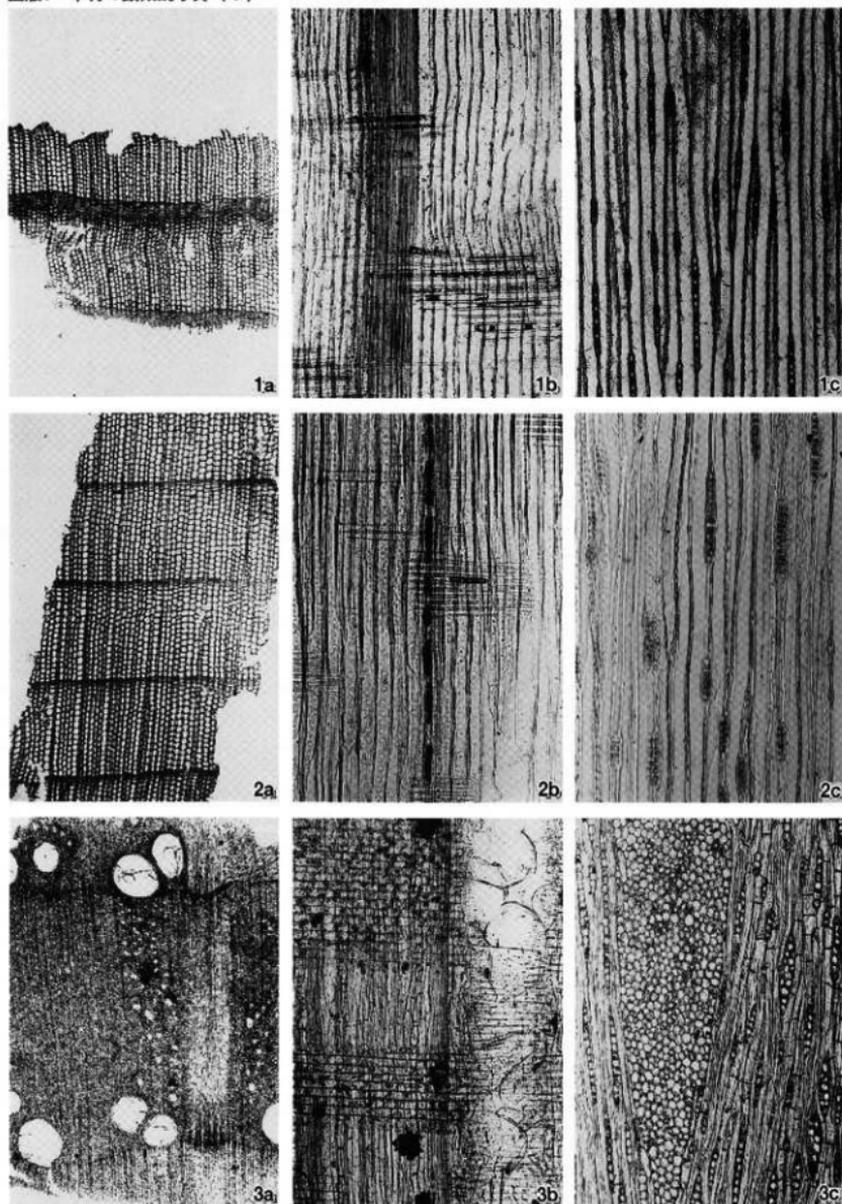
同定結果を見ると、スギが約半数を占めており、北陸地方の用材にスギが多いことと調和的である。また、スギに同定された木製品の多くは、全国的にもスギの使用例が多い(島地・伊東, 1988; 伊東, 1991)。一方、スギ以外の種類に同定された木製品を見ると、鑿にアカガシ亜属、下駄にトネリコ属、柱根にコナラ節およびトネリコ属、曲物にヒノキ属、櫛に広葉樹(散孔材)となっている。このうち、鑿、下駄、曲物については、同様の結果が各地で知られており(島地・伊東, 1988; 伊東, 1991)、日本各地で同様の木材利用が広く行われていたことを示唆する。柱根については、近接する針原東遺跡においても比較的強度の高いクリが多数使用されており、強度の高い広葉樹材を選択していたことが推定される。櫛は、現在ツゲ(柘植)で作られたものが最も良いとされるが、遺跡から出土した櫛の材にツゲは少なく、ツゲに次いで良いとされるイヌノキが多く用いられている(島地・伊東, 1988; 伊東, 1991)。櫛に確認されている樹種は、その多くの道管が小径で分布密度も高い散孔材である。今回の試料についても、道管が小径であることやその分布密度が高いことが観察でき、これまでの類別と調和的と考えられる。また、遺跡出土の櫛にイヌノキが多いことは、櫛の適材に関する価値感等が過去と現在とで異なっていた可能性もある。しかし、現時点で断定することは困難であり、今後の検討課題として挙げられる。

遺跡周辺の植生については、針原東遺跡で行った調査の際に落葉広葉樹やスギが卓越し、沿海地では常緑広葉樹も見られたことを推定した。今回の調査で見られた樹種についても、その多くは遺跡周辺において入手可能であったと考えられる。しかし、中世であれば流通によって離れた地域から製品等が搬入されたことも推定され、出土した木製品の全てが周辺地域の木材を利用したとは断定できない。今後、文献史料や木製品の形態等についても検討を行う必要がある。

〈引用文献〉

- 林 昭三 (1988) 椎土遺跡出土木炭の樹種。「椎土遺跡・塚越貝坪遺跡発掘調査概要」, p. 41-45, 小杉町教育委員会.
- 林 昭三・島地 謙 (1982) 埋没林の樹種. 大門町埋蔵文化財報告第 5 集「小泉遺跡」, p. 79-81, 大門町教育委員会.
- 平井信二 (1979-1980) 木の事典 第 2 巻～第 6 巻. かなえ書房.
- 北村四郎・村田 源 (1971, 1979) 原色日本植物図鑑 木本編〈Ⅰ・Ⅱ〉. 453p., 545p., 保育社.
- 伊東隆夫 (1991) 日本の遺跡から出土した木材の樹種とその用途Ⅱ, 木材研究・資料, 26, p. 91-189.
- バリノ・サーヴェイ株式会社 (1991) 布日沢東遺跡 自然科学分析報告. 大門町埋蔵文化財報告第 7 集「大門町企業団地内遺跡発掘調査報告(1)-布日沢東遺跡・布日沢北遺跡-」, p. 81-118, 富山県埋蔵文化財センター・大門町教育委員会.
- 島地 謙・林 昭三 (1983a) 出土木炭の樹種. 「県民太閤山ランド地内遺跡群発掘調査報告(2) 石太郎A遺跡・石太郎C遺跡・土代A遺跡・新造地A遺跡・東山Ⅱ遺跡・野出A遺跡」, p. 57-61, 富山県教育委員会.
- 島地 謙・林 昭三 (1983b) 出土木炭の樹種. 「都市計画道路 七美・太閤山・高岡線内遺跡群発掘調査概要 高山遺跡・東山Ⅰ遺跡・東山Ⅱ遺跡・表野遺跡・南太閤山Ⅰ遺跡・南太閤山Ⅱ遺跡」, p. 68-73, 富山県教育委員会.
- 島地 謙・林 昭三 (1984) 出土木炭の樹種識別. 「都市計画道路 七美・太閤山・高岡線内遺跡群発掘調査概要(2) 南太閤山Ⅰ遺跡・南太閤山Ⅱ遺跡」, p. 34, 富山県教育委員会.
- 島地 謙・伊東隆夫編 (1988) 日本の遺跡出土木製品総覧. 296p., 雄山閣.
- 島地 謙・林 昭三・伊東隆夫 (1982) 出土木炭の樹種. 「富山県小杉町 上野赤坂A遺跡-県民太閤山ランド地内遺跡群発掘調査報告書(1)-」, p. 27-29, 富山県教育委員会.
- バリノ・サーヴェイ株式会社 (1994) 針原東遺跡から出土した木製品の材肉定. 「小杉町針原東遺跡発掘調査報告」, p. 141-153, 小杉町教育委員会.

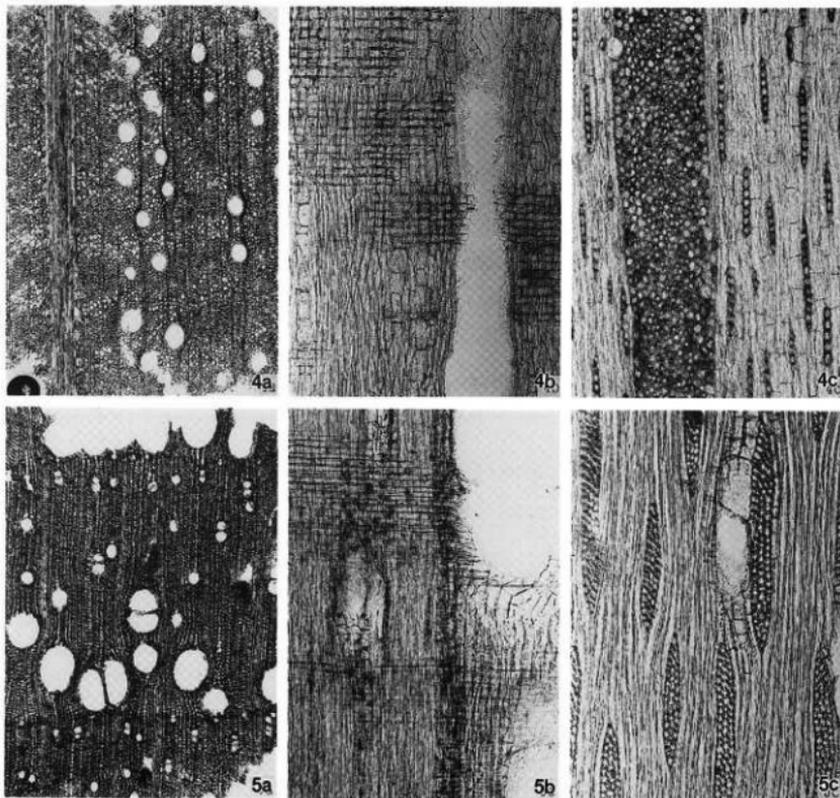
図版1 木材の顕微鏡写真(1)



1. スギ (試料番号10)
 2. ヒノキ属の一種 (試料番号14)
 3. コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種 (試料番号4)
- a: 木口, b: 根目, c: 板目

200 μ m : a
 200 μ m : b, c

図版2 木材の顕微鏡写真(2)



4. コナラ属アカガシ亜属の一種 (試料番号2)

5. トネリコ属の一種 (試料番号3)

a: 木口, b: 柎目, c: 板目

200 μ m : a
200 μ m : b, c

図版第 1

西地区
(X1~5
Y7~18区)

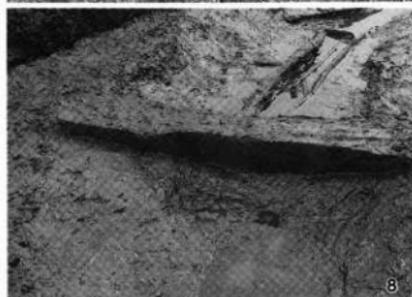
1. 調査前
の状況
東から
2. SD1
確認状況
北から



3. SD1土層
北から
4. SD1遺物
出土状況
北から



5. SD1完掘
状況
北から



東地区

(X2~5
Y33~40区)

6. 調査前
の状況
南から



7. SD2
確認状況
西から

8. SD2土層
西から



9. SD2遺物
出土状況
西から

10. SD2
完掘状況
西から

図版第2
東地区
(X17~22
Y38~61区)



1



5

1. 遺構確認
状況



2



6

2. 地区全景
西から
3. SD201
北から



7

4. SD201土層
南から
5. SD202
東から
6. SD202土層



8



8

7. SD203
北から
8. SD203土層



4



9

9. 作業風景

図版第 3

東地区
(X33~52
Y35~62区)

1. 地区全景
北から



2. 地区全景
南から



3. SD41
東から



図版第 4
東地区

1. SD42
(X38~50
Y38~48
区付近)

2. SD42土層

3. SD42遺物
出土状況



4. SD51
(X33~35
Y52~58
区付近)



5. SD51土層
北から

6. SD51
(X33~38
Y55~62
区付近
東から)



7. SD51土層

図版第 5
東地区

1. SE71~75
86全景
西から

2. SE68
東から

3. SE69遺物
出土状況



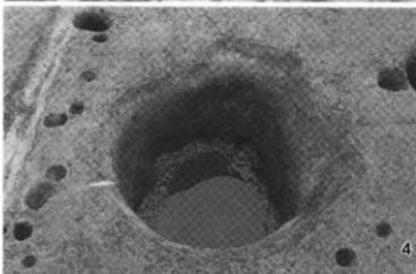
4. SE70
西から



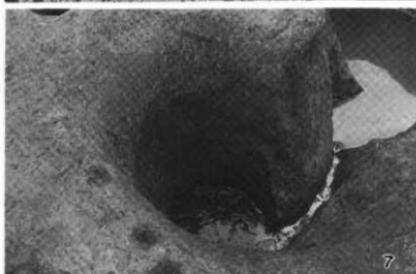
5. SE71
井戸側
南から



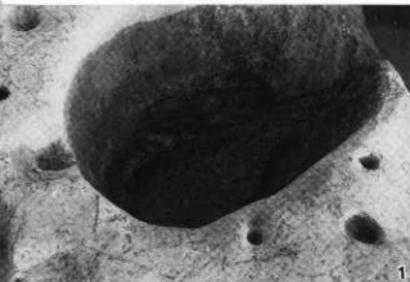
6. SE72



7. SE74
南から



図版第 6
東地区



1



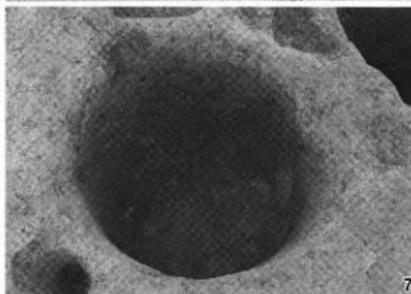
6

1. SE75

2. SE76



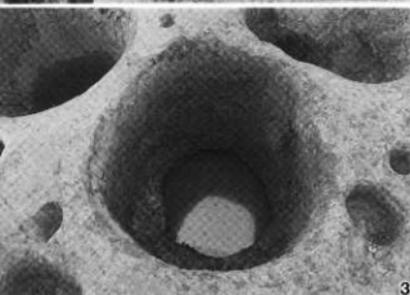
2



7

3. SE76完撮

4. SE77



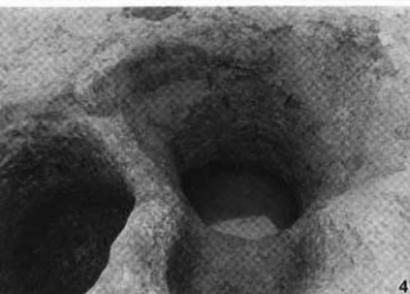
3



8

5. SE86

6. SK113



4



9

7. SK179

8. SK180



5



10

9. SX182
P339
北から

10. X33~39
Y52~62
区付近
東から

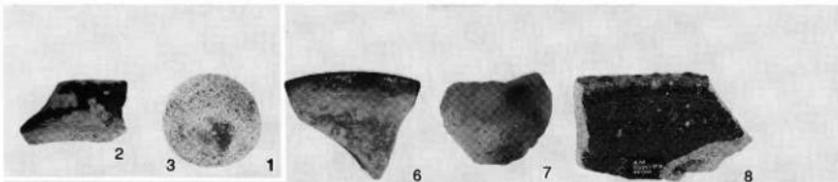
図版第 7

西地区

(X1~5

Y7~18区)

1. SD1

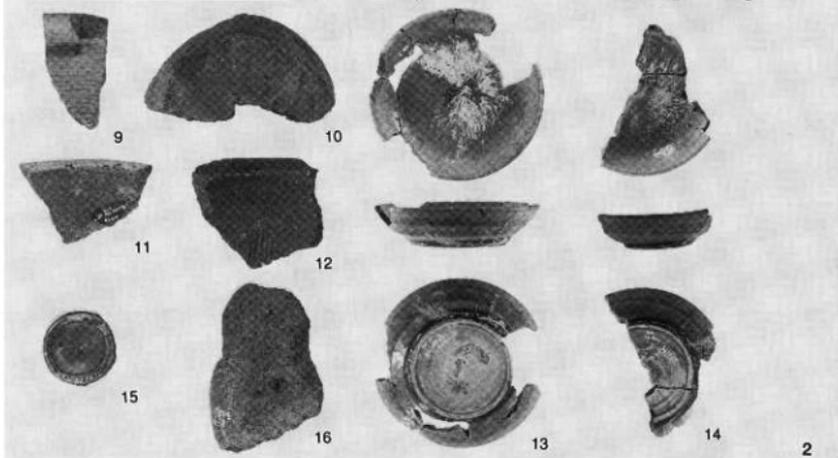


東地区

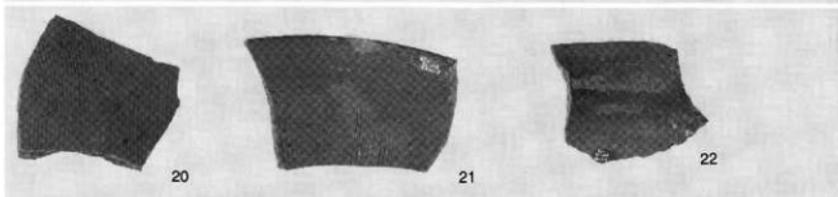
(X17~22

Y38~61区)

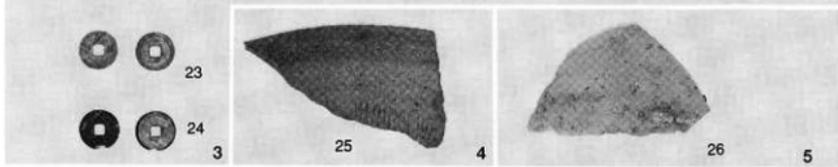
2. SD202



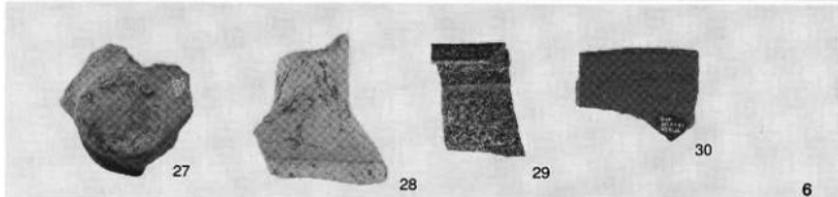
3. SD203



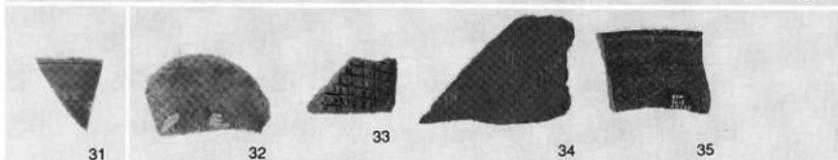
4. SD208



5. SD209



6. SD211



7. P401

東地区

(X17~22

Y38~61区)

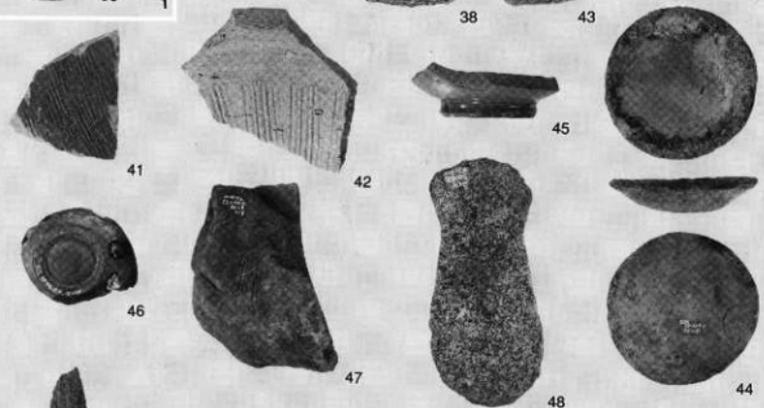
8. 遺構外

出土遺物

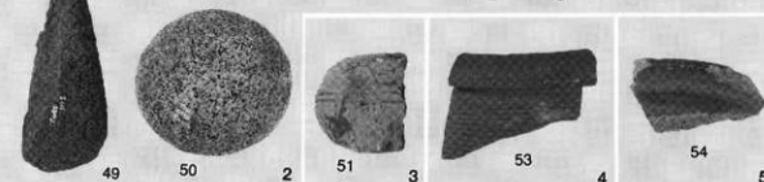




1. SD41



2. SD42



3. SD43

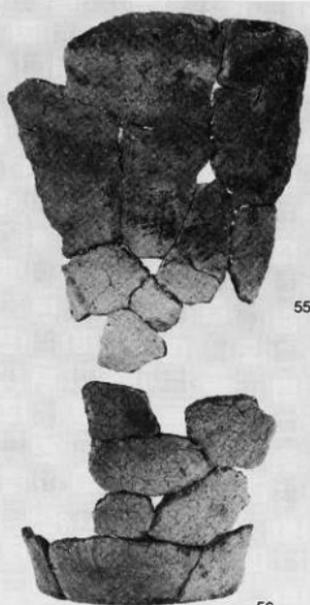
4. SD45

5. SD49



52

6



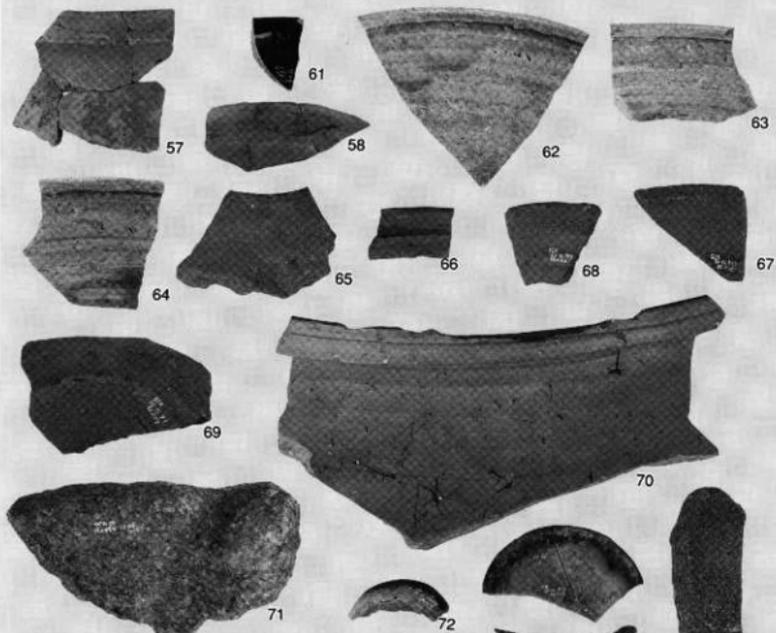
55

56

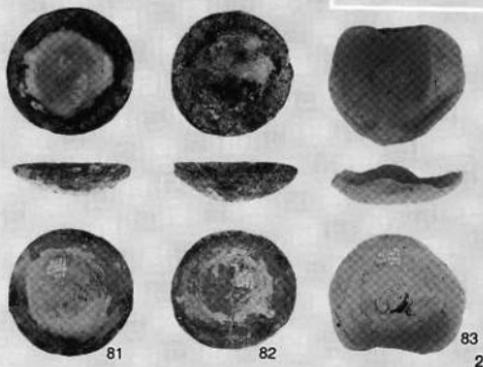
6. SD44

7. SD51

7

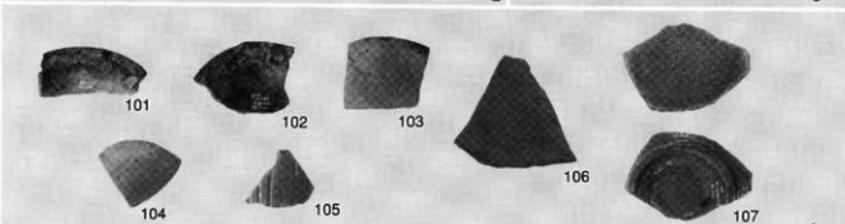
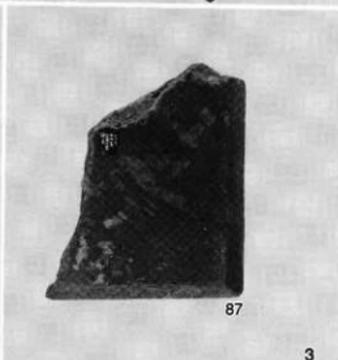


1. SD51



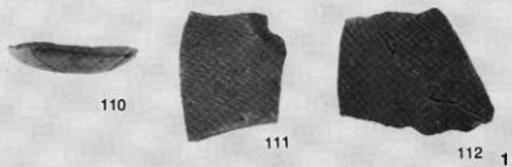
2. SD52

3. SD60



4. SB04

図版第 10
東地区



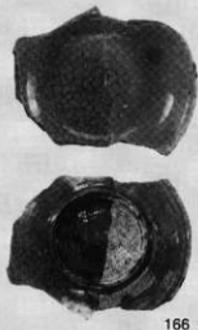
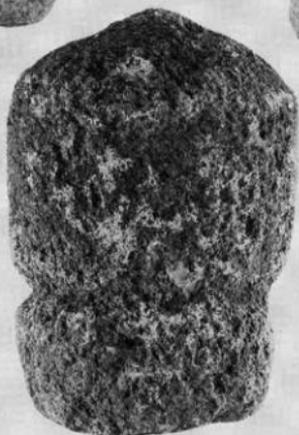
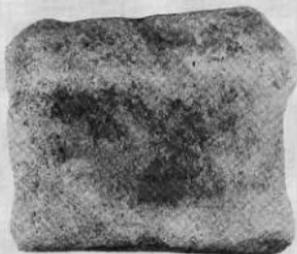
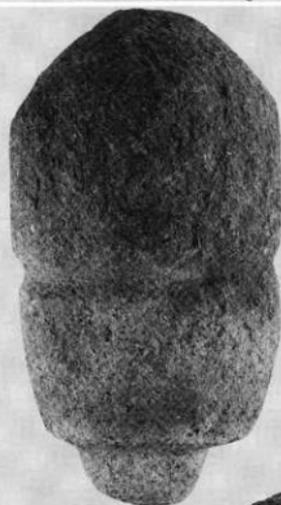
1. SE66
2. SE68



3. SE69



4. SE70



156

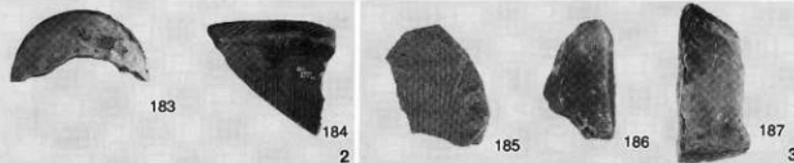
5. SE71

图版第 11
東地区

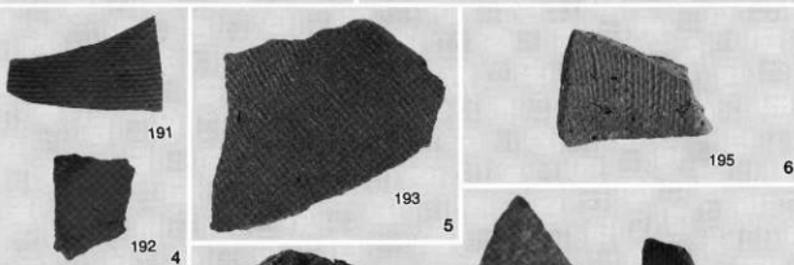
1. SE72



2. SE73



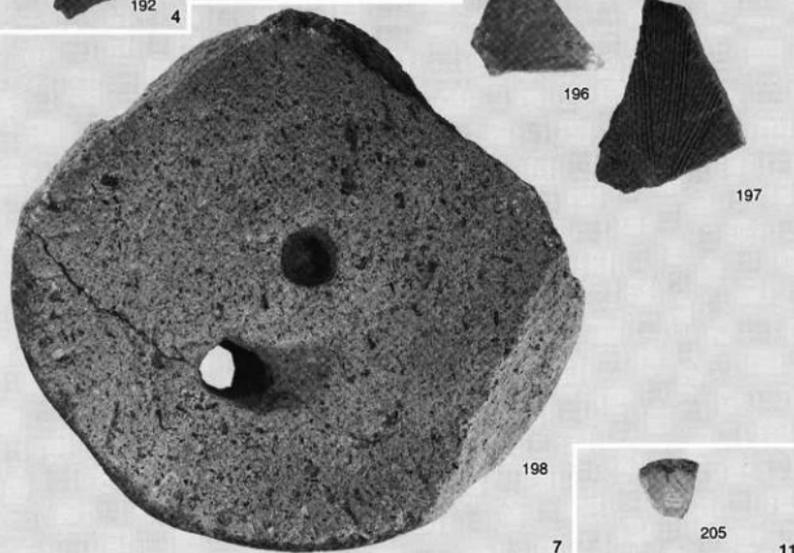
3. SE74



4. SE75

5. SE86

6. SE76



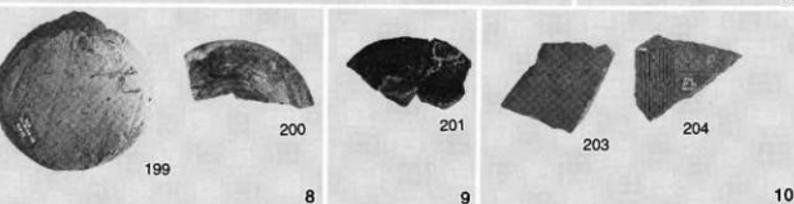
7. SE77

8. SE82

9. SE83

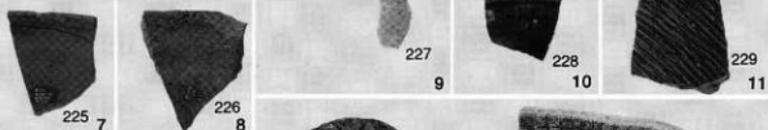
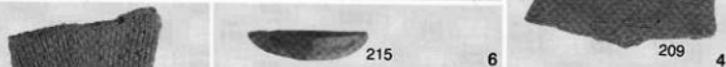
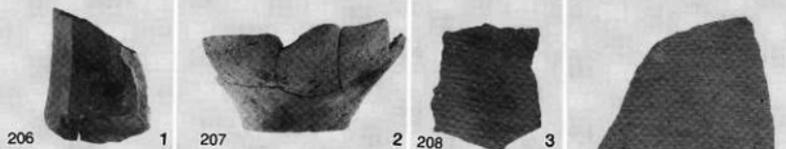
10. SE84

11. SE155

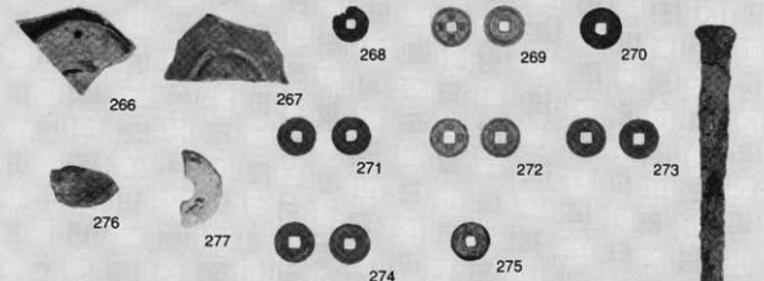
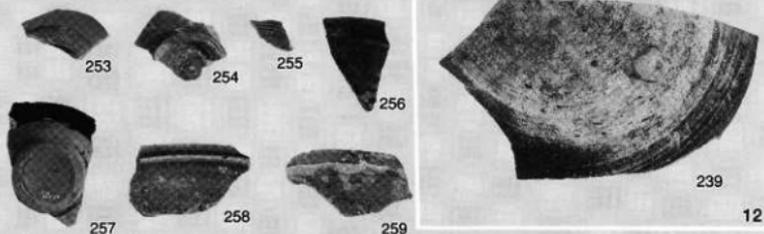


図版第 12
東地区

1. SK95
2. SK130
3. SK132
4. SK149
5. SK160
6. SK180
7. P193
8. P231
9. P270
10. P300
11. P339



12. SX182



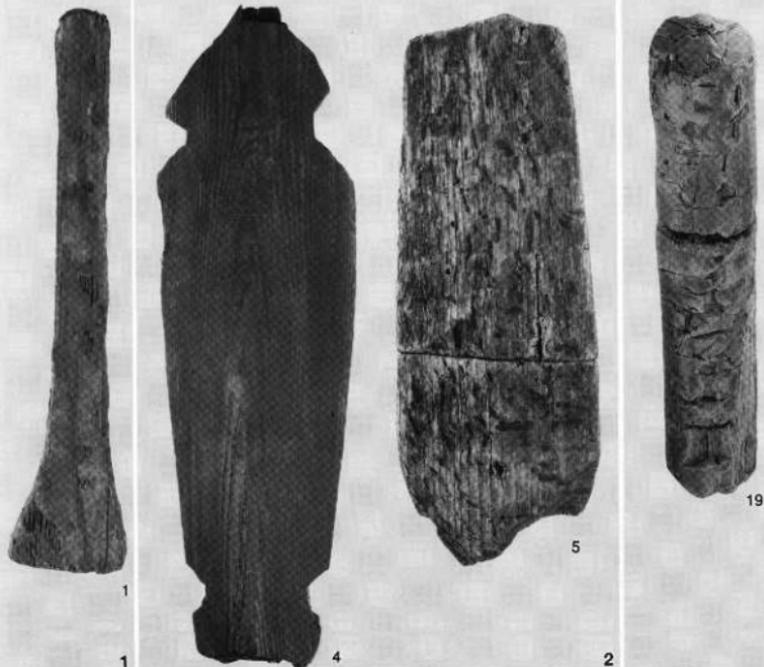
X33~52
Y35~62区
13. 遺構外
出土遺物

図版第 13

西地区

(X1~5
Y7~18区)

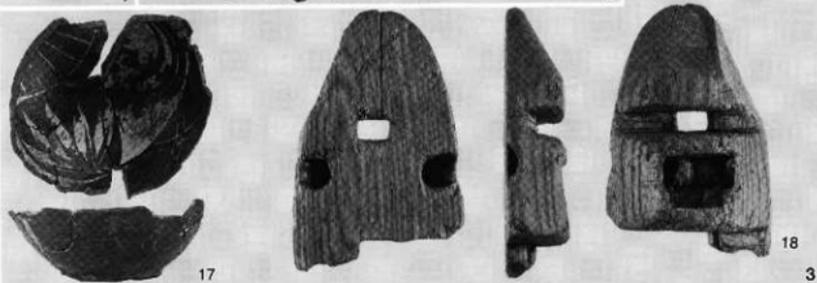
1. SD1



東地区

(X2~5
Y33~40区)

2. SD2



東地区

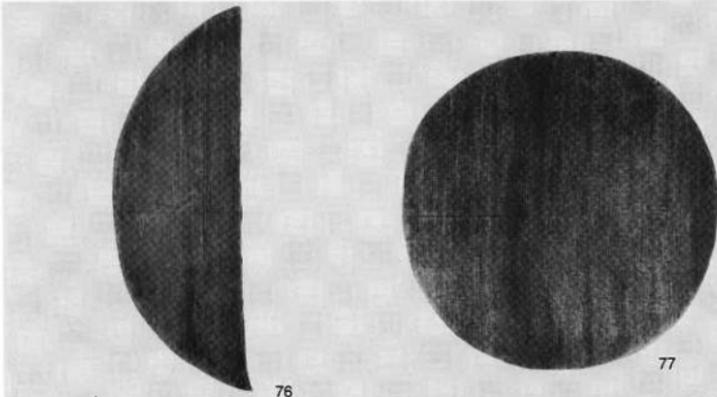
(X17~22
Y38~61区)

3. SD203

東地区

(X33~52
Y35~62区)

4. SD51





84



86

1



91



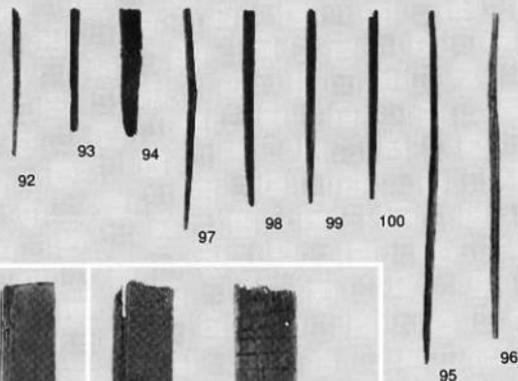
89



88 2

1. SD53

2. SB01



92

93

94

97

98

99

100

95

96

3

3. SB04

4. SB05



109



114



115



116



108

5. SE66

6. SE69

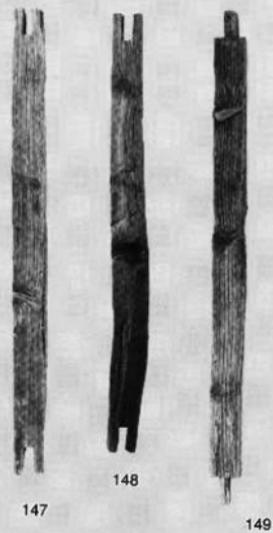
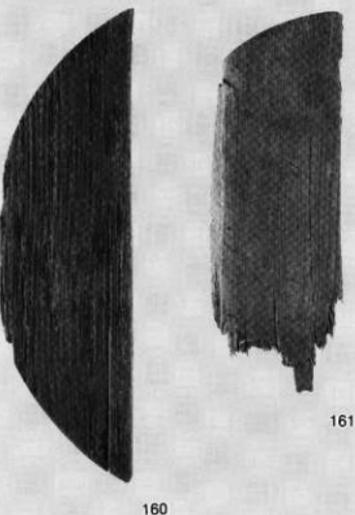
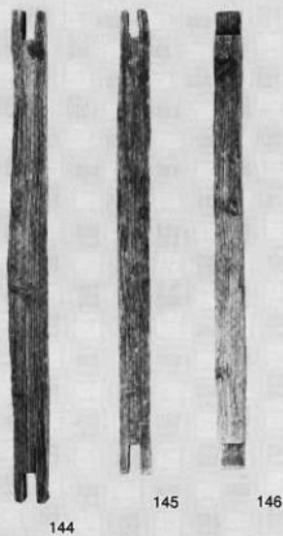
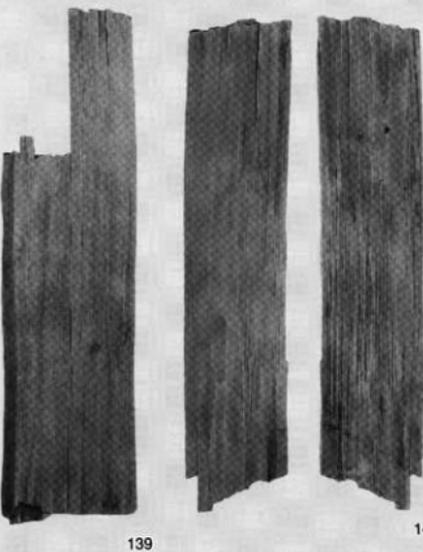
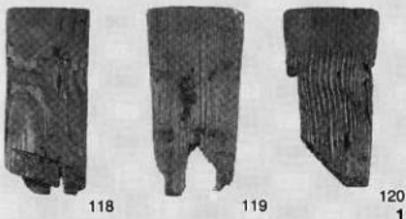
5

6

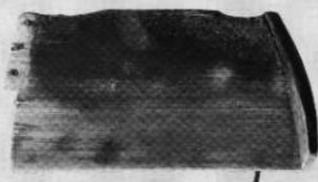
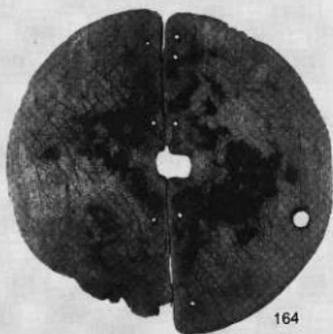
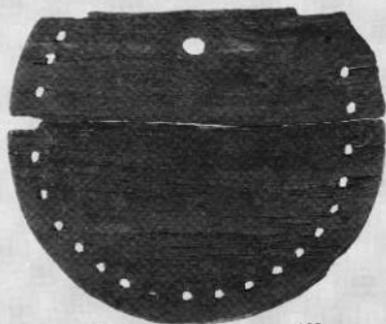
4

図版第 15
東地区

1. SE69



2. SE71



168 2. SE72

2

3. SE75

4. P125

3

4

图版第 17
東地区

1. P143
2. P199
3. P260



217

1



218

2



219

3



220

4



221

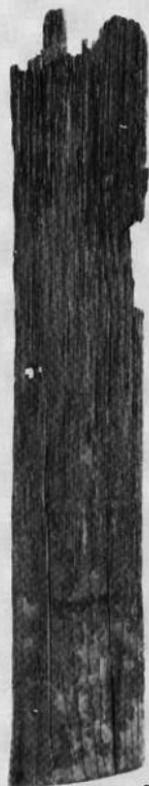
5



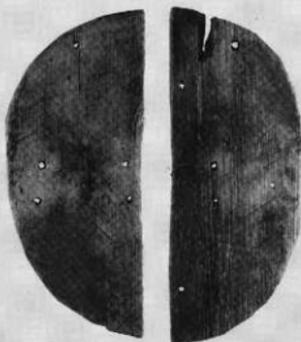
222

6

4. P301
5. P303
6. P334



230



232

233



234



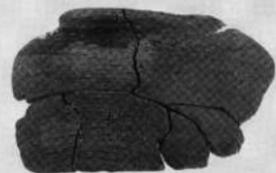
242



251



241



2



246



247

1. SX182

2. SX339

3. 遺構外
出土遺物
(X33~52
Y35~62区)

251

3

小杉町白石遺跡発掘調査報告

発行日 1994年3月31日

編集
発行 小杉町教育委員会

富山県射水郡小杉町戸破1511

〒939-03 電話(0766)56-1511

印刷 日興印刷株式会社

